女鑑

明治三十三年九月五日發兌

第貳百拾貳號

國光社

女鑑第貳百拾貳號

目録

女鑑

平素の鍛錬……一

論説

理想の婦人(中)……三輪田眞佐子……五
教育を受けたる女子とは如何……岸田松二郎……七
婦人と勞働……紅村生……一〇

精華

勅語要義……一一
孝女みよ……田山さと子……一三
師岡網治の妻……山本正周……一五

家政

女禮式……有住常子……一六
折方……有住くわう子……一七
茶禮初學……關森雄……一八
たちぬひ……西山たい子……二〇
だいところ……二一
割烹と禮節……石井泰次郎……二二

學藝

國文學講義……井上頼文……三〇
漢文學講義……佐々木天游……二五

漫録

女訓綬の雛形……樹取素彦……三三
日本將來の國民……肝付兼行……三六
他山の石……岐蘇小東洋子……四一
曲亭馬琴の眼中に映ずる女性を論す……白松園主人……四五
茶話それ〳〵草……木崎得玄……四九
ひとりたび……臨井ふく子……五一
一茶の文……山岡愛操……五七

樂園

曉風白露紀行……白松園主人……六〇
むしほし……永潜生……六四
眼鏡先生……彦峯生……六七
方言集(二)……七一

文林

東久世通禧……鍋島直大……七二
津輕承昭　竹屋光昭
水野忠敬　長谷信成
宮地嚴夫　北郷久政
坂正臣　谷勤
三輪義方
近衛貞子　鍋島榮子
前田朗子　西郷柳子
小池道子　北島以登子
松平淑子　鶴久子

稻毛日記(承前)……中島歌子　石榑千亦……七四

雜録

○沼津御用邸御増築　○東宮妃殿下御参内　○黑田伯薨去　○故陸奥伯夫人の逝去　○報國の志　○鈴木きち子　○奇特の婦人　○婦人の赤誠　○學生の美談　○美擧二件　○救護費の寄附　○老人會　○貞女　○小學校令　○假名と漢字　○英國兒童の思想一班　○萬國博覽會　○日本女學校入學式　○孝順

敎の庭

歌教百首　文數十章ほかくさ〴〵

口繪……高橋松淳
挿繪……同人

孝女みよ



平素の鍛錬

我が國の、古來、金甌無缺、萬邦無比の國體を持し、幾千年、國威を海外に輝し、嘗つて、外侮をうけざりしものは、勿論、列聖の威烈恩賴に由るといへども、また、わが臣民が、國の御爲としいへば、男といはず、女といはず、はた、老弱を問はず、身を獻げて、皆よく其の分を盡しゝに由りてなり。平素は、風をいたみ露を厭ふが如き纖々たる淑女も、一旦事あるにあたりては、凛乎として其にれもむき、敢へて後れざるもの、これ、我が國婦人の特殊なる美質にして、本誌史談欄に於いてだに、其の例を擧ぐること、既に幾百を超えたりき。然るを、何事ぞ。

時事新報通信員は、外國婦人の勇氣と題して通信せる中に、

籠城中に於ける外國婦人の擧動は、甚だ、大膽活潑にして、捲堡の築造などを手傳へて、善く、陸戰隊、及び、義勇兵の動作を助けたるなど、なか／＼、目覺しかりしに引換へ、我が國の婦人は、内に引籠りて、外の騷ぎを聞くのみなりし

と。

といへり。これのみならず。報知新聞は、一點紅（露國婦人の健氣）と題して、また左の言をなせり。

（前略）八月十日午前四時星を戴いて、玄帝廟の露營地を發し、大安平、紅家庄疃庄を經て、午後五時といへるに、全軍、馬頭に着きにけり。この日は引續ける炎天に、宛がら、燬くが如く、我が國にては、臺灣の外に、見も知らぬ華氏百廿度といふ酷熱なるに、數萬の軍馬の進むこととなれば、熱砂は、烟霞の如く飛散りて征衣に塗れ、日射病にかゝりて、路に倒るゝ兵士も尠からず。國のためとはいひながら、慘らしくも、亦、哀なり。斯る處に、露西亞軍の其の中に、年紀三十路に足らぬ婦人あり。姿優しく、風にも堪へぬ風情なるに、身には、白色の衣袴を纒ひ、腕に、赤十字の紀章をかけ、小さき帽子を戴ける外、蝙蝠傘さへ持たで、甲斐々々しくも、自國の兵や、將校の負傷を勦り慰めつ、死者を吊ふ健氣さは、三軍も、ために感激して、進みて死すとも、退いて、この婦人に笑はれまじと願はぬものはなかりしとぞ。この時、我が軍隊にも、斯

る婦人の居たりせば、多涙多感の勇將猛卒は、幾何ばかりか、勵みつ奮ひつ、今の手柄に、上こす功名ありたらむに、惜みても猶あまりあり。實にや、彼の露國婦人こそ、天の使といふべく、萬綠叢中一點の紅といふべけれ。夫に引換へ、北京籠城の我が公使館に居りたる婦人どもは、大砲の音を聽きてはイヂケかへり、左なき折は、出あるきて、負傷者の看護さへ爲さで過ぎたりとぞ、日頃、教育の惡きとはいひながら、夫たり、親たる人の教へぬは、いふまでもなく、本人どもの心がけ、苦々しき限といふべし。

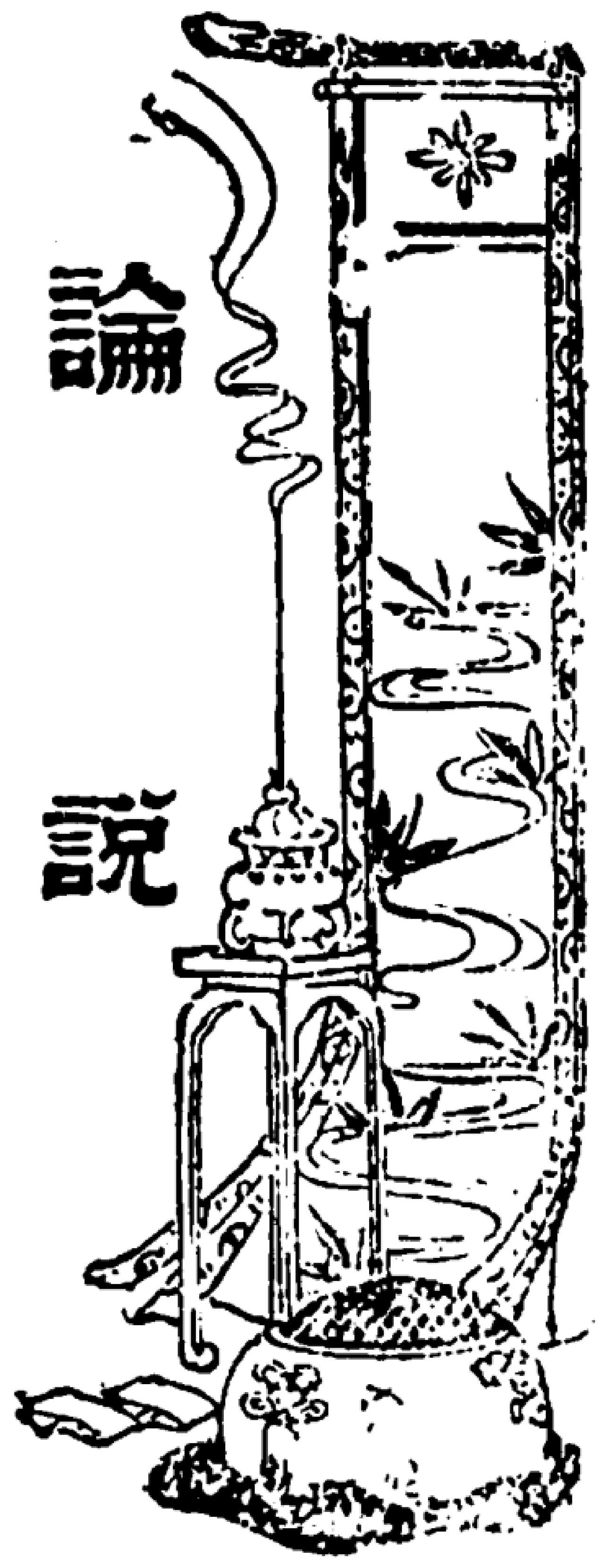
嗚呼、果して然るか。列國環視の間にありて、わが神州婦人の美質を滅却し、果して、斯くの如き醜態を演せしか。これを信ぜんとするも、容易に信ずる能はざるなり。抑、わが國の婦人が、西洋婦人の如く、常に輕擧躁動せずして、溫雅靜淑の德を修むるは、他日の勇往直進を期するところあるが故なり。若し夫れ、北京籠城に於けるが如き場合にあたりて、徒に大砲の音に慴れ、瞬間の娯樂を偸まむが爲に、負傷兵を顧ることを忘るゝが如きことあらば、平素の溫雅靜淑の德は、たゞ、卑屈諂諛となり了らむのみならず、彼の記者のために教育を危まれ、夫た

り親たる人の教を罵らるゝも、猶いまだ、其の鋭鋒の利からざるを歎せずんばあらず。ひとり、其の人々の心がけの苦々しきかぎりなりとのみ、いひて、うちおかるべきことならむや。痛恨痛悔、一般婦人のために、國家の名譽のために、飽まで、其の不德を責めざるべからざるなり。

たま〳〵生を我が神州にうけ、苟も、日本帝國臣民の名譽を荷へるものゝ、如何なればとて、斯る不名譽の行動を爲すことあらむや。然れども、斯く如き寃を蒙るは多少、乘せらるべき點の存することは疑ふべからざるなり。故に、誰といはず、彼といはず、平素、よく、德操を修め、精神を養ひ、一朝事あるにあたりて再び、斯る寃をうけざらむことを期せざるべからず。



論説



理想の婦人（中）

三輪田眞佐子

かくのごとく、智情意が發達すること圓滿にあらざれば、完全なる婦人といふべからず。然るに、徃昔の婦人は、なべて意育と情育に傾きて、智育の欠乏するが如く、現今の女子は、概して、智育に流れて、遂に感情の濃やかなる意氣の賴母しきところなきがごとし。見よ。天然地理を學びて、その智、能く海底の形狀を談じ、地中の火脈につきて述ぶる婦人も、良人の心中を知らず。以て交情の密なる能はざるため、破鏡の例は少なからざるべし。勿論現今の男子は、未だ、男子も、節操の守るべきものなるを知らずして、女子の人格を無視する罪あるは、明かなれども、さりとて、女子の暴を以て、暴に報ゆるは、譽むべきわざにあらず。唯節操なき男子は男子自ら耻づるに至るべし。

東洋の習慣より、今日に至りても、妾を養ふものあり。これ、非倫の甚しきものなれば、男子、自ら、猛省して改めよかし。されど、われら女子社會に於ては、男子の非行あるとなきとに拘はらず。これに眞愛と誠實とを以て接する覺悟なかるべからず。若し、良人、有德の人にして、內君、亦、有道なれば、至當の行にて、露ばかりも、奇特の婦人と賞譽するに足らず。凡そ、國亂れて、忠臣現るとかや。夫、常ならずしてこそ、妻の德、いよいよ尊けれ。されど、良人は、わが婦人を無上に愛

し、婦人も、わが良人を、最上に愛して、子孫も榮え、父母も安ずるを以て、始めて樂しき家庭といふべし。

世に樂しきものは月に花に、將た、絲竹管絃に數へ難きばかり多からんも、眞に愉快なるものは、團欒の家庭ぞかし。而かも、家庭を作るものは、夫婦なれば、夫婦は、死生を共にする決心あるべきなり。然るに、近來の統計表を見るに、わが國、離婚者の數は、十の三に登る。蓋し、その原因は妻の不德か、夫の無道か、若しくは、舅姑の無思慮かに歸するならんも、非難の中心點は、婦人にあれど、婦人たるもの戒めざるべからず。昔、柴田勝家の、羽柴秀吉より攻められて、將に、一門を集めて、自滅せんと謀るとき、妻に向ひて曰ひけるやう、汝は信長公の妹なれば、よもや、秀吉も、汝の身に兵を加ふることはなさじ。故に、汝は、疾く遁れて、命を全うせよかしと。時に妻淚の袖をしぼりていふやう、夫妻は、元來同穴の契としいへば、死を共にすることこそ幸なれと、たま〳〵、子規なきて空を渡りければ、

さらぬだにうちぬるほども夏の夜の
夢路を通ふほとゝぎすかな

これを聞きて、勝家の返し、

夏の夜の夢路はかなき跡の名を
雲井にあげよ山ほとゝぎす

なほ傍にあるもの、これを聞きて、また、

おもふどち打ちむれつゝも行路の
しるべや死出の山ほとゝぎす

實に、夫婦たるものは、精神の合一を要す。おもふに、所謂、朝に逢ひて、夕に離るゝ夫婦なるものは、恐らくは、一時、外面的の關係あるに止まりて、いまた、精神的の交情なき、假の契といふ

べし。されど、精神の合一を願ふものは、必ず、一片の利己心あるべからず。隔離心あるべからず。全く、我を忘れて愛するのみを知るべし。そもそも、我を忘るゝ實行は、凡俗の能くする處にあらず。果して、これを能くせんか、貞操無雙の婦人といふべし。若し、能く、我を忘れて愛のみを知るものなれば、などか怨みん。などか怒らん。

教育を受けたる女子とは如何

岸田松二郎

近來教育の必要を説くの時機、既に去りて、學校の創設年月と共に起り、男女均しく、學校教育の具、益〻、多きを加ふるに至れり。蓋、學校を設けて、人を教育するが故に、學校の增設の事益多なるは、即ち、受教育の數を加ふる者にして、人文發達の大に見るべきものあるは、敢て疑ふべきにあらずと雖ども、余は、聊か疑ひなき能はざるものあり。何ぞや、曰く明治以前に人となりたる女子と、以後に人となりたる女子の衝突是なり。前者は曰く、今の女子は、教育を受けたりと云ふと雖ども、只、其の言の敏にして、行の不敬なる、其の德操の堅からずして、其の情の輕薄なるは、遠く及ばざる所なりと。後者は曰く、進化の教育を受けざる女子は、其の心頑固にして、事理に疎く迷信多くして、其のなす所、系統なしと。兩者の見解、甚だ、異なる所あり。前者は、固より普通の智識を欠き、後者は全く、之を有するに相違なし。然れども、凡そ婦人として、一家の家政を司どり、又、其の子女を養育し、其の良夫、舅姑に仕へて、一家の和樂を收むる上に於て、前後兩

者、果して孰を多しとし、孰を少しとするか。其の親族に交り、朋友に接し、其の隣里郷黨に對して、兩者の得失、果して如何の相違かある。之を約言せば、此の兩者、何か女子の天職を全うするに足るか。理想上より、之を推論せば、智識あるものは、必ず、優にして、否らざるものは劣なるは、理の當に然らざるを得ざるなり。然れども、之を事實の上に徵して識德の量多ものは、必ず、能く良妻たり、賢母たり得るとせば、多年の螢雪を積みたるものは、遙かに優勝の位置に立ち、事事物々、前者に勝りて、彼等の欽仰を博し、彼等をして、矜式する所あらしめざるべからず。然れども、此の二者の間に於ける黒白雲壤の差を見出し得ざるものは何ぞや。是、余の疑ひなき能はざる所以なり。之を解くものあり。曰く、教育を受けたるものは、識見高く、德器宏大なるが故に風俗のために容れられざるなり。孔子の陳蔡に厄し、屈原の汨羅に投ずる、古今、皆、其の軌を一にすと。此の說大に可なるが如しと雖ども、是、世の自ら居るもの丶言にして、眞個に之を見る可からざるものなり。

今の學校に入りて、或は、某の科を卒り、或は、某の學校に出でたりと稱するものは、單に、其の道を通過したるの謂にして、未だ、其の練習を經りたりと云ふにあらざるなり。今の世は、資格を先にし、名譽を重じ、或は、位勳を以て、人品を尋るの傾向あるが故に、某の學校を卒業せり、某の學科を修めたりと云へる證書を有するを以て、直ちに識德成就せりと謂ふは、大なる謬見と云はざるを得ず。「チプロマ」の時代は、既に經過せんとするを、尙且、一片の證書に德器の成就を證明せんとす。是前後兩者の衝突を免れざる所以なるべ

し。

聞く、亞米利加の學生は、其の學窓にあるや、躬稱して曰く、學校に在る間は、一の課程を履むに過ぎず、吾人眞正の價値を顯はすは、學校を出でて、社會に投ずるの後に在り、社會に出たる後は、永久にして、器を成すの好適地なりと。余の賛する所、誠に之に在るなり。學校の課程を卒りたるの證書を有するが故に、之を以て、既に德器の成れるを告ぐるものにあらずして、寧ろ社會に立ちたる後に、之を練磨し、之を習熟するなり。されば、某學校の課程を卒り、某の學科の卒業證書を有するを以て、業既に老婦人の識德に比較し、前輩の意見を詮するが如きは、大に考慮せざるべからざるなり。見よ。倫理學者は、必しも、德行家にあらず、生理學者は、必しも醫師たるにあらず。家政學者、亦必しも、良主婦たりと斷行するを得ざるべし。古人も言あるものは、必しも德あらず。德あるもの、必しも言あらずと云へり。由レ是觀レ之、所謂普通の學科を學びたるが故に、敎育を受けたる婦人の眞價を卜するは、是大なる謬見と云はざるを得ず。敎育を受けたる女子は、既修の智識を實事に用ゐて、其の光輝を發揮し、其の眞價を生ぜしめんと務むるに在り。古人曰く、學で思はざれば罔く、思うて學ばざれば、殆しと。蓋學の言たる覺なり。平素學びたる諸般の事物を以て、時々刻々出で遇ふ毎に、之を照對推考せざれば、恰かも、寶玉を藏して廢物となすに均し。而して、其の學びたるが故に貴からず、之を實事に照して、超衆の効驗あるが故に貴きを知るなり。凡、經驗のみに依賴して、學ぶことなければ、羅針盤を用ゐずして、大海に航するが如く、其の方針、甚だ殆きが故に、學を以て、先人

の經驗を踏襲せんと欲するなり。されば、學ぶと、施すとは、相俟て、共に其の價を生ずるものと云はざるべからず。徒に學理を說き、智識を蘊蓄したるを以て、能事了れりとなすこと能はず。人の德慧術智あるものは、常に疢疾に存すと。余は、此の語を以て、受敎育女子の服膺せられんことを望むものなり。

婦人と勞働

紅村生

五千有萬の蒼生、ひとしく帝國臣民の榮譽を荷ひながら、哀れにも婦人にして、いとも厭はしき勞働を取るもの丶、日に其の數を增しつ丶、東洋に卓立せる、我が國婦人の節操と幾多の衝突を起し、心あるものをして、轉、感慨の情に堪へざらしむること、うたてき極みならずや。

如何に生活のためとは云へ、彼の欲深き當世の所謂紳士とやらに、幾千可憐の妙齡婦女が、慈善なる名の下に働かされつ丶あることを見れば、惡むべき、彼の僞善者、憐むべき此の天眞なる婦女と對比し來りて、我は默せんと欲するも默する能はざるなり。いで、一掬の淚を紙上に濺ぎ世の同情者と、吾々、此の女工問題に付き硏究の聲を擧げん。

商人の廣告にすら、筆太く軒端に愛國とか慈善とかをほこりがほして、私利を貪らんとする今日の趨勢社會道德の墮落は、殆んど、其の極に達せりと云ふも、不可なきなり。忠良なる國民を養成する敎育者にして、既に、精神家なし、社會下層に働く女子に向ひて、道德を說くが如きは、固より蛇足に類するの觀なきに非らず。而かも、今日滔々

として工業界に一種女工風なるもの丶養成せられつ丶ある事實は、決して苟且に付すべきにあらず。世の資本家は、年々、女工の增加するは、社會經濟上自然の勢にて、此の無職の徒に適當の賃金を與ふるは、資本家の恩惠なりとし、益女工集用取に勉むるが如し。吾人は、資本家に向うて、絕對的反對する者にあらず。而も、今日、資本家の る方針にして、勞働に値する賃金を與ふれば、婦人の節操のいかに破壞せらる丶とも、其の心身のいかに零落するも、馬車馬の如く、倒る丶まで、鞭韃を加へ、敢て、意とせず、我が工業界は、德義品格の如何を問はず、求むる處は。利益あるのみと云ふが如きを一般となさんか。吾人は、女工風なる一種の傳染病は、我が婦人社會に恐るべき變化を生ぜんことを憂ふるものなり。我が工業界豈、此の如き理想なきもの丶みならんや。(未完)



勅語要義

朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚なり我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして敎育の淵源亦實に此に存す

〔肇國宏遠樹德深厚〕謹みて案ずるに、皇祖皇宗、此の靈秀なる邦土を開闢し、之を、經營規畫して、統を垂れ、敎を立て給ひて、萬世、此の臣子を愛撫せさせ給ふべき基を立て給ひし大業は、實に、宏大悠遠にして、物として及ばざるはなく、處として達せざるはなし。か

つ、臣民、歴代仁慈の恩澤を辱うし、此の完美の國家を成立して、この光榮を擔ふ所以は、一に、皆、渥優なる祖宗の皇恩にあらざるはなし。生れて、神州の民たる者、寤寐の間も、此の洪恩を忘るゝことあるべからず。

〔克忠克孝〕我が國、君臣の分は、天地開闢の初より自、定りて、天祖の皇胤は、皇祖の遺體ながら、萬民に臨ませ給ひて、萬古易らせ給はず臣民は、また、或は、皇胤より分れ、或は、歴朝の恩澤に沐したりし群臣の裔孫にして、もと同一氣の血脉を受けたれど、君臣の情、自然に、父子の親と一致結合して、忠孝仁義の美風を成し、君國の爲には、萬人、皆、身命を犠牲として、報効を謀らざるはなし。斯くの如きは、世界萬國、一だも比あるべからず。されば、苟且にも、此の義を忘るべきにあらざるなり。

〔國體精華〕太古、皇祖、皇孫を此の國の君皇と定めさせ給ひしより、君臣の分、曾、亂れず。天壤無窮、此の土は、則、皇室の土なり。此の民は、則、皇室の臣なり。皇室の臣にして、皇室の土に棲息す。ゆゑに、君主ありて而る後に、臣民あり、臣民ありて、而る後に、君主ありしには、あらざるなり。是、即、我が國體の、萬邦に特異なる所以なり。我が、臣民たるもの、寤寐の間も、この尊嚴なる國體を忘るゝことあるべからず。

〔教育之淵源〕萬民、悉、この尊嚴なる國體の意義を了得して、本然を誤らざらんは、是、我が國、教育の本旨なり。故に學問の要は、この立國の特趣を保ち傳へて、誤らざるに在り。千省萬慮、必、由る所を過たざるべきなり。苟、この源を失はんには、如何でか、教育の効果を收

ひるを得ん。愼みて、此の義を忽にすべからず。

孝女みよ

田山とり子

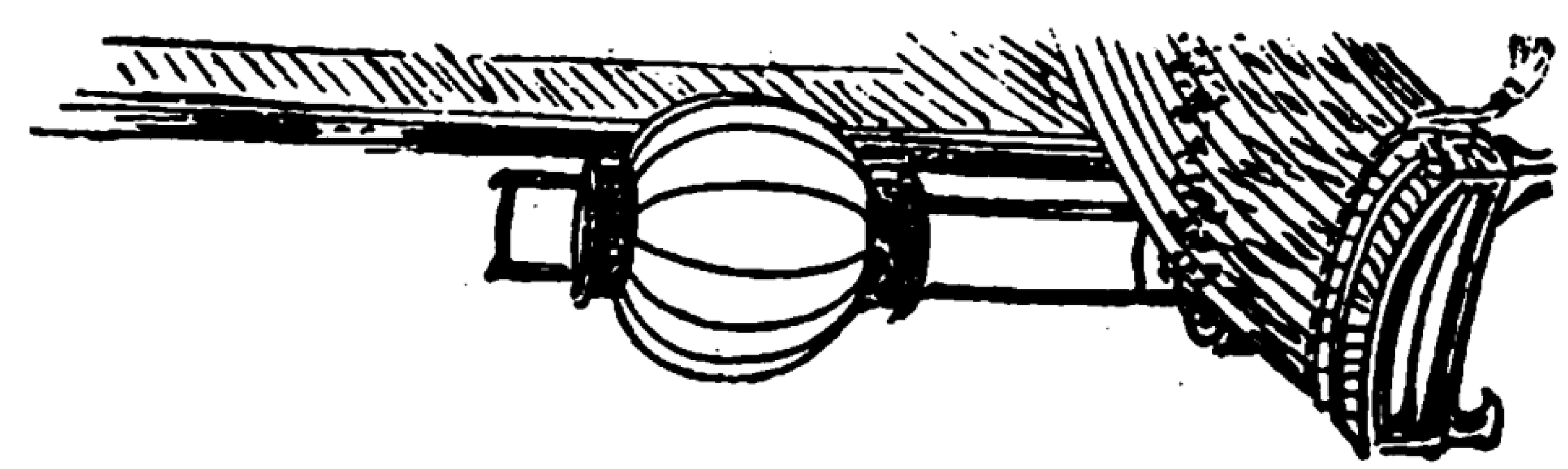
若松の城下、四の町の、左兵衛といへるもの丶妻に、みよといふがありけり。同じ城下西名古屋町の鍛冶職忠右衛門の娘なり。年わかくして夫にかしつく身となりけるが、うまれつき、實義に素直なりければ、舅七右衛門に仕へて、よく、孝をつくせり。これよりさき、七右衛門、中風をやみて手足のはたらき自由ならず、物いふことさへ、いとかたかりければ、物むづかしかりし性質は、いとゞ、つのりて、よろづに、せはしく怒りやすくなりしを、このあはれなる嫁のこゝろづかひのたゞならぬにて、遂に、一度も怒るばかりのことなく、病ひながらも、世をいと樂にすごしたりき。今、みよが心づかひの一端をいはゞ、朝夕の食事、髮をつかね、いたゞきを剃る等のことは申すも更なることなり。手水つかはせ、二便の仕末、さては手足のしびれたる、腰膝のいためるを撫でさすりなど、心ゆかぬくまもなし。また、夏冬にいたれば、凉しき日暖き日をうかゞひて、藥湯沸かして、痛むところを洗ひやはらげ、折々は、老いたる友を招きて、將棊をさゝせ、舅の手のとゞかぬところは、おのが手して駒をつかひ、或は石臺をすゑて、草花をうゑ、里の子等にたのみて魚すくはせて放ち飼ひ、或は、すこしの空地を庭にかたどり、日常好める草木を植ゑ込みなどして慰めぬ。なほ不快のいろの見ゆる時は、野原に背負ひいでゝ、小歌などうたひてすかしなぐさめき。むかし、もろこしの某とかやいへる孝子は、

小兒の服をまとひて、親の前に嬉戯して慰めきといへり。それとこれと、其の爲るところはことなれど、其の心は、一つにて、まさりおとりなかるべし。この頃は、今のごとく醫術も進歩せざりしかば、醫藥も、はか〴〵しくしるし見えず、さては神佛に祈請をこめ、月のうちに、しば〳〵、火食をたち、鹽味を忌みたりき。

夫左兵衛、其の弟仲右衛門といふものも、亦、孝心ふかゝりき。職業にいでゝ、異味を得ることあれば、必ず、われは食はずして持ちかへり父にすすめ、初物の類は、價を論せず、先づ、買ひもとめて父の食膳に供へけり。かくすること十幾年、一日も渝ることなかりしかば、郷黨隣里あげて其の特行に感じ、狀を具して、爲めに賞を乞はむとせり。

かくと知りて三人のものは、かはる〳〵、町役人のもとにゆきて、さまでもなきことを、な聞え玉ひそとて、いたくとゞめければ、町役人も、其の志を空しうせしめじとて、そのまゝに、さしおきしかど、斯るめでたき行の、いつまで世にかくれてあるべき。おのづから、領主に聞えて、寛延三年といふに、厚く褒賞せられきとぞ。

然しもあらぬことを、世に聞えて虚名を貪らむとさま〴〵、見苦しき行どもを敢へてする今の人ごころに、この三人がことを知せば、いかにか聞くらむ。さても、うらやましき心なるかな。



師岡綱治の妻

山本正周

師岡綱治の妻、宵子といへるは、水戸の士、長山平七の女にして、能く身を修め、家を齊へ、またよく奴婢を慈愛す。綱治に妻わりて、男子を生みけるが、之を綱常と名く、宵子すなはち、妾には、數多の調度を與へて、湊村なる、某に嫁せしめ、綱常を、已れの子として養育しける。其の慈愛、をさ〳〵生みの子にも劣らず。綱常も、また、宵子をまことの母と思ひ居けり。かくて、綱常、成童に及びける頃、始めて、其の實を知りたりとぞ。或る時、綱常病にかゝりけるが、宵子は、自ら、之を看護して、湯藥を進め、また、毎夜跣足にて神崎に詣でゝ、綱常の病氣、平愈を祈りけるが、其の誠の神に通じやしけん。病は程なく瘉えにけり。後、宵子は、夫に勸めて、また、一人の妾を置かしめけるが、綱治の奴、なにがし、妾の姿色に戀慕し、屢、艶書など送りけれども、妾は、日ごろ、宵子より、女の道を聞けるものからいかにしても、之に靡くけしきなかりければ、奴は、或時、綱治の他に行きて在らざるを伺ひ、妾の閨中に忍び入り、無體の振舞に及ばんとす、宵子、之を知りて、大に怒り、直に、其の處に至り、懷劍を揮ひて、奴を斫り殺し、夜具を以て、其の屍を蔽ひ、夫の歸れるを待ちて、其のありし次第を語りけりとなん。





家政

女禮

婚禮式（承前）

有住常子

先、緣女の親や、兄弟に、夫〻送り物をなし、又つゞきて、緣女にもとて送るべし。緣女の親よりも、聟の方へも送るべし。其の次第は、近世より、今にかけては、大方一様にして、つたはりぬ。頼みの事を記せるなる記に、舅殿夫婦へ、聟殿より、進物として、板の物、織物、引合樽、肴進上なすなり。聟殿より、御寮人へも、板の物織物等、引合樽、肴進上するなり。御寮人の両親へ、聟殿の両親より、進物もあるなり。御寮人方の上らう局へも、聟殿より、引出物給るなり。舅殿よりのたのみの進物も、右になぞらへ知るべしと見えたり。

其の禮代の次第の一例をあぐれば、舅への進物

袴地	一巻
雉子	一双
樽	一荷

但し、都合によりて、雉子の所を、鯛鱈などになしてもよし。又は何れも、末廣か扇子にても添へてもよし。

姑へ

眞綿	一折
こひ	一折

樽　一荷

これも、鯉の所を、するめになし、又は、白髪麻一折などにしてもよし。緣女への進物。

小袖　二重
おび　二筋
末廣　一對
たひ　一折
鰑　一折
昆布　一折
柳樽　一荷

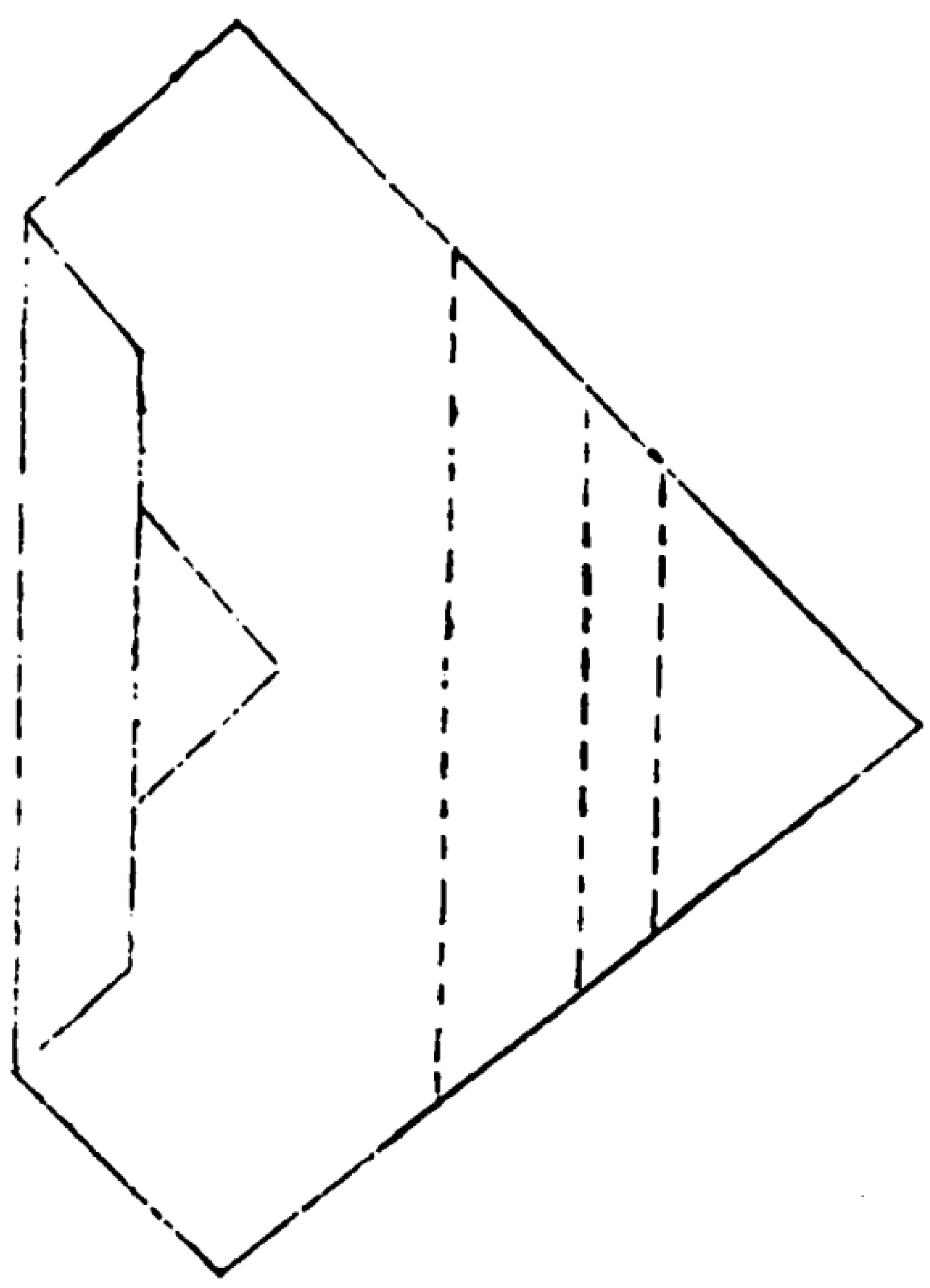
先かくの如しといへども、其の品の多少と、其の種の五種七種の事は、其の身分によるべし。夫は、其の調方のあらましは、次に圖をもて云ふべし。其の目ろくの認方と、其の品物のつみ様を、左に記さん。

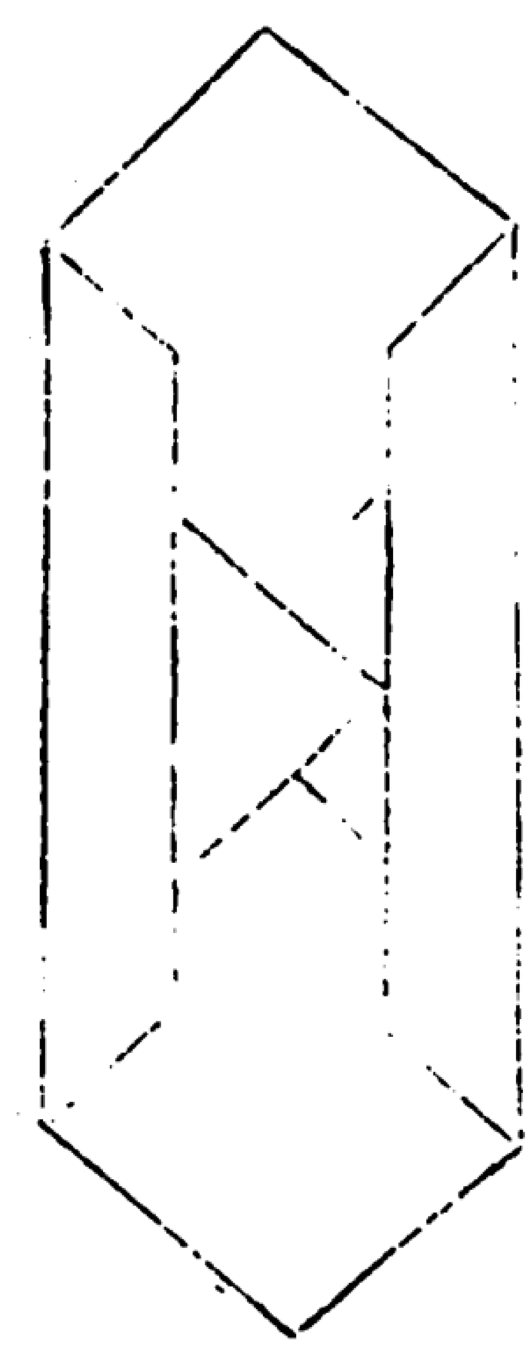
折方

蓬來の鰯包

有住くわう子

是は婚禮の合盃の式に蓬來につけかざるものなり。水引は、二輪に結ぶなり。





茶の湯

茶禮初學

孤峰庵祿仙齋不羨 閲
關 葦雄

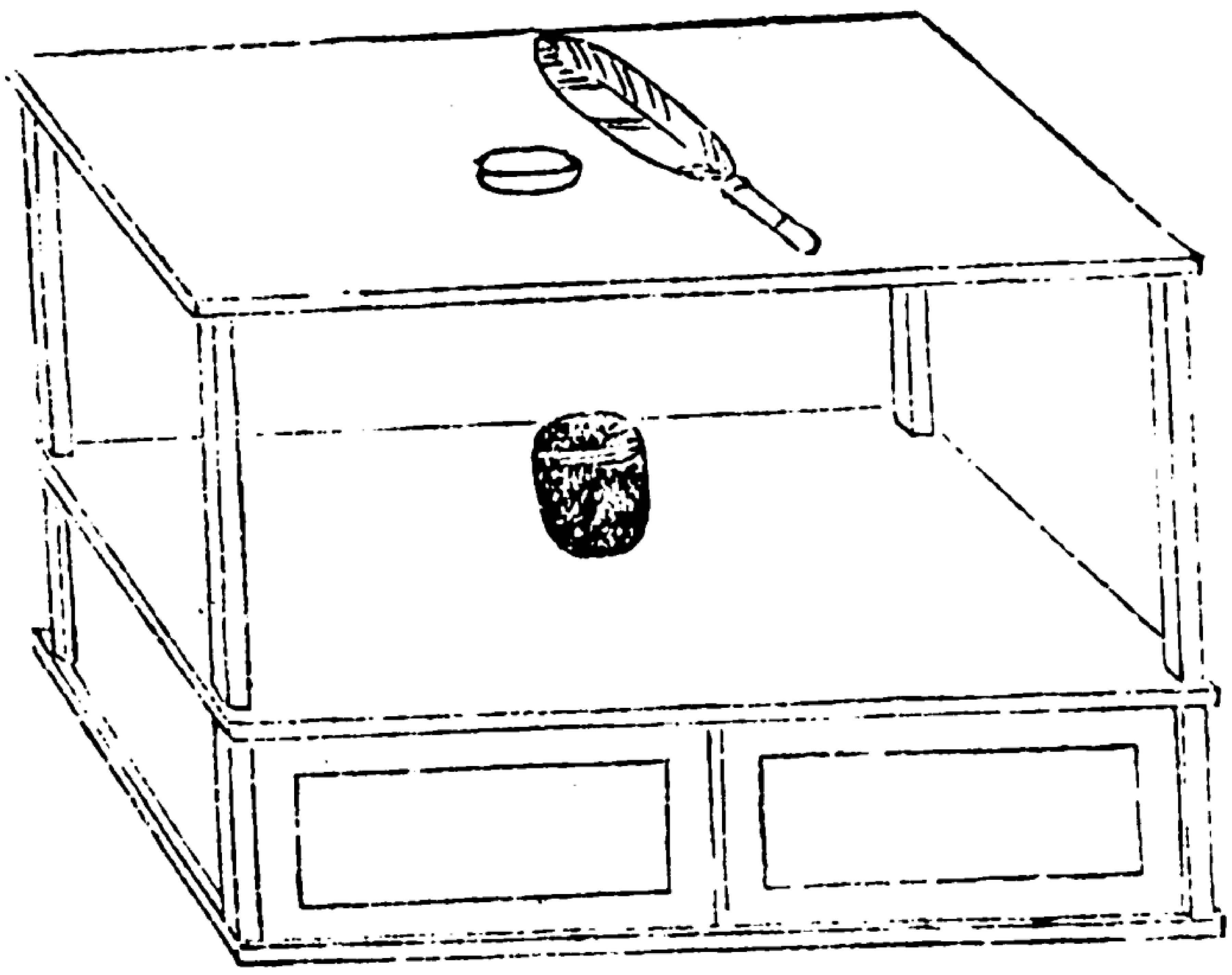
棚物の部

紹鷗棚一名袋棚とも云ふ。
不羨曰く、此の棚は、大棚の部類に編入して爐の季節に専ら用るものなり。檜にて製す。透溜塗、下に小袋棚有。小襖は、貳枚の引違なり。此開閉は、右の方は、右の手、左の方は、左手にてなし得るものなり。此の戸棚に

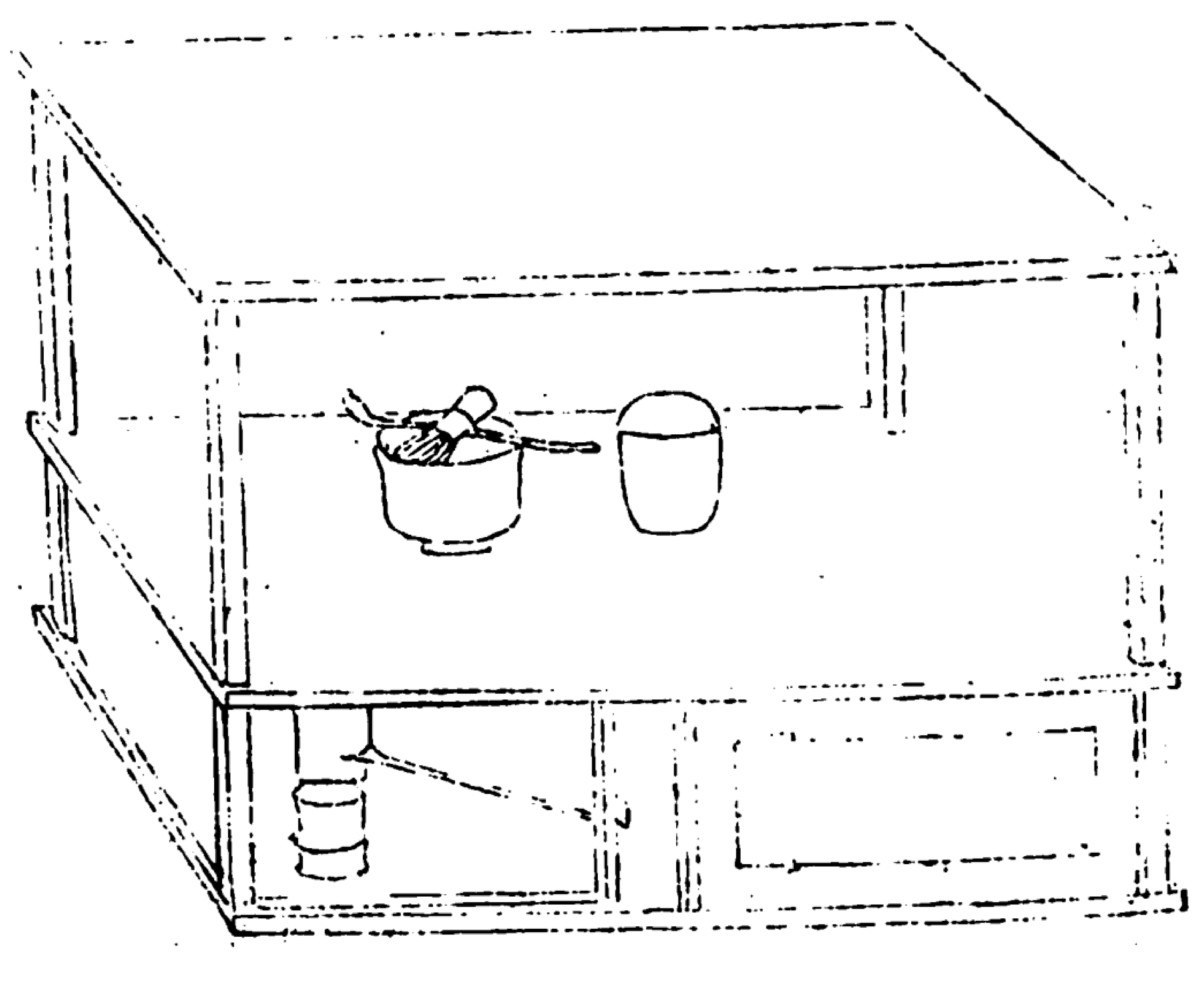
入る水指は、口廣く平形を好む。朝鮮物も、ヨール銅共、蓋遊鐶あり。是を用る、最適當なり。點茶の時は、半分出してよし。居前台目なり。飾りは、圖式に爾致す、見給へ。此の棚は、家居立派成程取合、宜敷棚なり。紹鷗は、氏は武野と云ふ。其の初め武田と云茶は、宗悟宗陣に學び、歌道は、西三條逍遙院實隆卿に學ぶ。此の棚に就ては歌あり。（わが名をば大黒庵と云なれば袋棚には秘事をこめけん）歌の意は、大黒庵は、其の庵號なり。袋棚秘事とは、愛翫の心なるべし。終身の茶を此の棚にこめて、樂しみしなるべし。古人先哲は、物其ものを好み、發明するにも、精神を籠抽二丹誠一十分に腦髓を苦しめて、考案する故、能立派に奏二其効一ものなり。後人、毫も嘴を容る事不レ能。敬伏の外なし。又、此の

點前は、誰と云ふとはなけれども、令孃貴婦人の華奢美麗出立れたる時抔には、特更に相當すべし。併、又、茶技修熟の上ならでは、起居動作も覺束なし。能々、其師に付て勉勵し給へ。

紹鷗棚
初莊下右の方下袋戸棚の內水指
天井飾
一輪生華入
香爐
炭斗內皆具
料紙硯箱又如圖羽箒香合



総飾
下袋戸棚の內右の方水指
左の方柄杓蓋置八の字
又中の棚薄茶器
下戸棚左柄杓蓋置

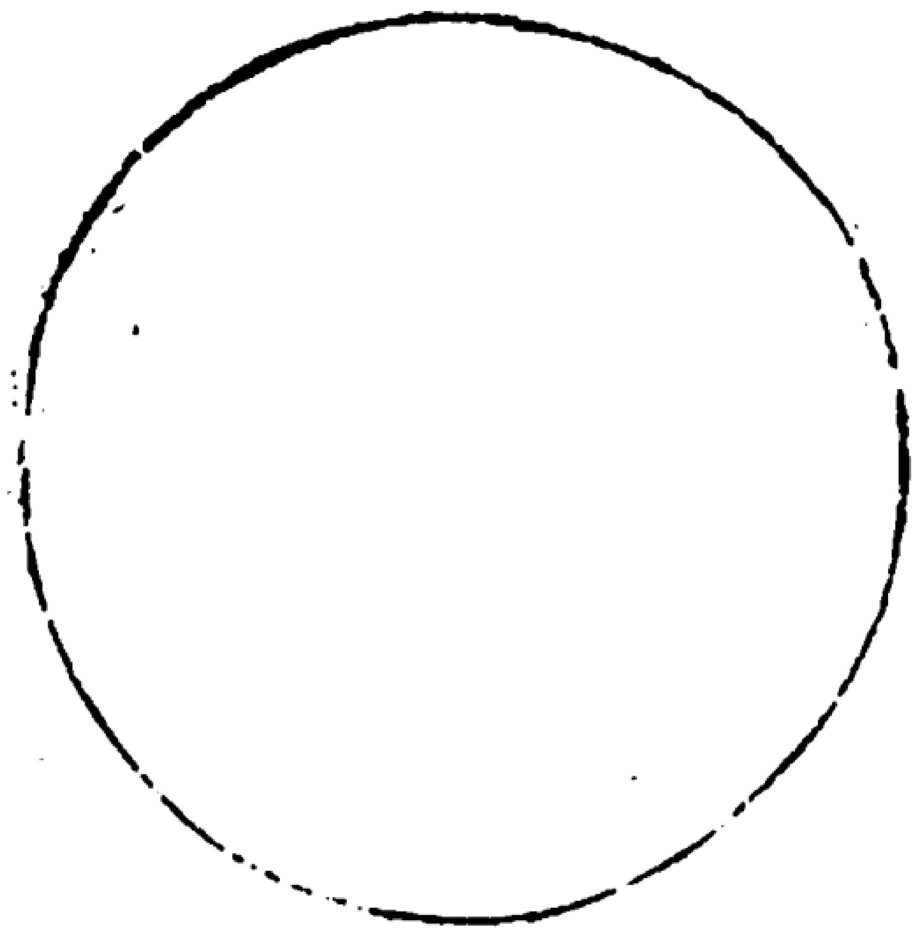


たちぬひ

西山たい子

匂袋

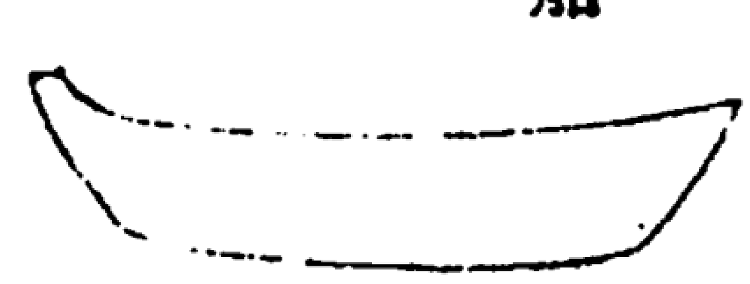
地球形



上圖の如く、眞丸き形を二つ切るべし





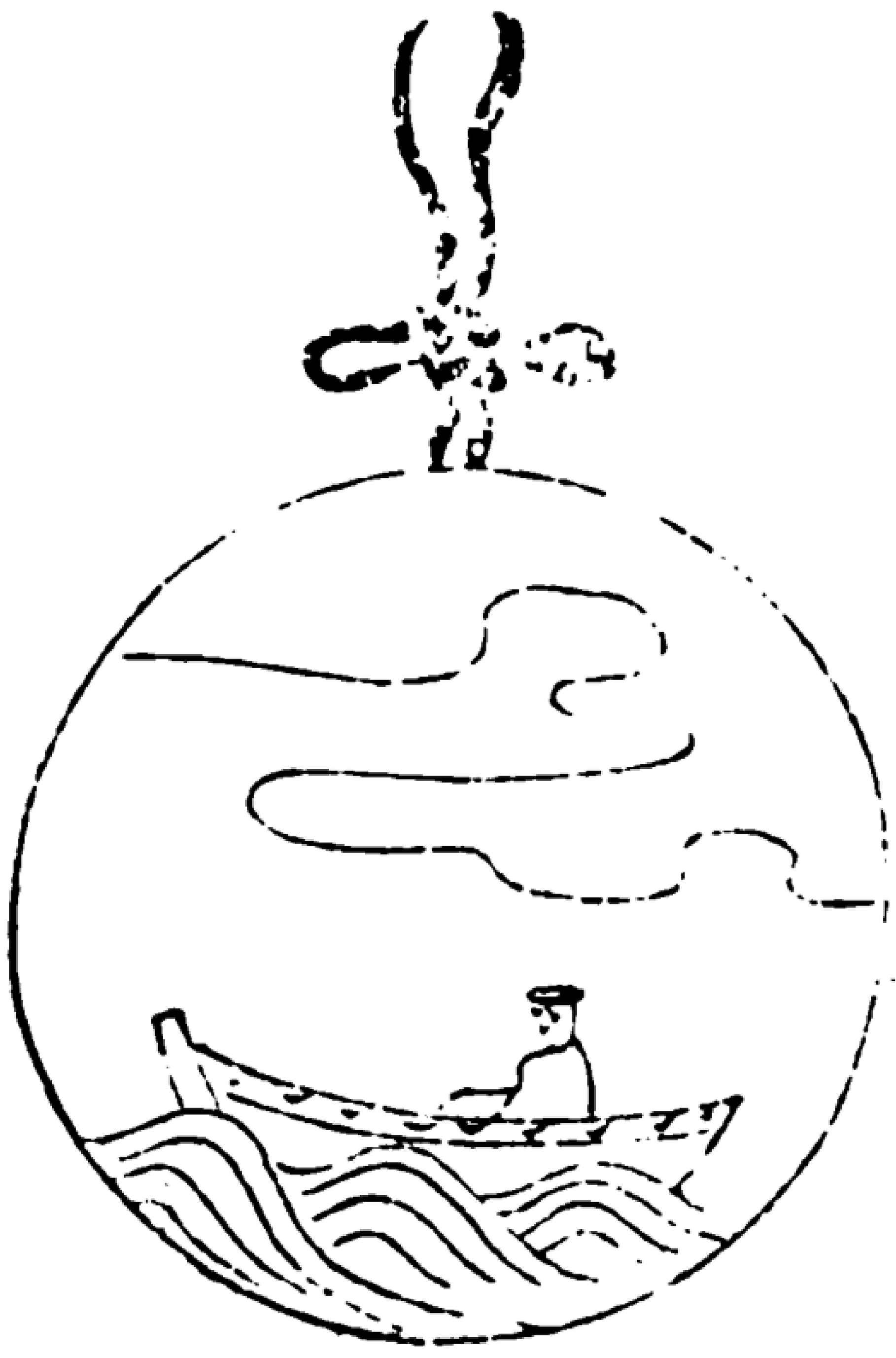




まづ、かやうの形に厚紙を切り、但し浪と空とは、地球形の周圍にあふやうに切るべし。まづ地球形にきりたるものをとり、少し凹みをつけ、その凸くなりたる方に、綿少許を入れ、布を被せ、其の表にせましと思ふ方に、空、浪、舟、人等のかざりをはりつけ、そら、浪等のきれのはしを裏がはにかへし、その地球形の凹みたる方に、匂ひ綿を入れ、紐をかたくつけおきて、裏と表とを合せ、其の合せめに、大白の糸をぐるりとまはし、のりをもてつぐし。左の圖を見て押しはかり玉へ。但

し、かざりは何にても、各の好にまかすべし。

その圖



だいどころ

あなご里芋茄子甘煮

先づ、里芋を能く洗ひ湯煮し、あなごを開き、骨を去り、能程にきり、茄子の皮を去り、これも能程にきりて、酒、砂糖醤油にて鹽梅し、能く煮て、おろしきばに、鰹節を加へ、かきまはし、器に盛り、胡椒をふりて出すもよし。

にしんの甘露煮

先づ、にしんを、一晝夜程、米とぎ水に浸し置き竹のさゝらにて、一つごとに、能く洗ひ、湯煮して、其湯を捨て、酒に砂糖を加へ、しばらく煮て醤油をさして、能く煮込むべし。にしんは、滋養分多きものなれ共、消化惡き故、なるべく、柔らかに煮て食すれば、營養になるものなり。

赤茄子スープ

赤茄子の、へたを小刀の先にて、くりぬき、水にて洗ひ、横に、二つに割り、種をしぼり出し置き、玉葱を、たてに、薄くきり、肉汁の脂膀にて、煎りて後、赤茄子をいれ、食鹽胡椒を加へ、文火にて煮、これを裏漉にて漉し、肉汁にてのばし、又火にかけ能程に鹽梅し皿に盛て出すべし。

さつま煎

先づ、小豆を、能く洗ひ、釜にいれ、能程に煮へたる頃、さつま芋の皮を去り、さいの目に切り、其の中にいれ、砂糖を加へ、沸騰たせ置き、糯米をいりて、又釜の中にいれ、能くかきまはし、火よりおろし、暫く、ふたをし置時は、米は、小豆の中にて、程よくふくれ、柔らかになり、甘味にして、茶菓によきものなり。

割烹と禮節（承前）

石井泰次郎

山蔭卿、即ち、四條家系の人にして、其の孫は、伊達家これなり。四條の名稱に出て、四條流と古くより云ひ傳へたり。

大職冠鎌足公　淡海公　房前公　魚名公　鷲取　藤嗣　高房　政朝（中納言従三位藤原朝臣山蔭）

又、此の卿の名は、仁和二年芥川行幸の供奉を記せる書に、又は、十訓抄に、又は、大鏡に道長の母方の祖父に當れるよしなどあげたるに見えたり。

此の四條流の源出せる山蔭卿は、彼の百人一首に、君がため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ、と詠じたまへりける、小松の御門の御めぐみを受て、其の御代より以下、臣民間の割烹として、日常にも、冠婚の祝事にも、萬の事に臨みて、調ふべき料理の源を起しゝなり。

小松の御門のみめぐみに成りぬる由緣は、左の條條にて推はかり奉るべし。

小松の御門と申すこの御時に、藤壺の上の御局の黒戸はあきたると、聞きはべるはまことにや。

（藤原爲業作　崇德院頃の人大鏡）

黒戸は小松の御門位につかせ給ひて、昔たゞ人

るおはしましたる時、まさなどとせさせ給ひしを忘れたまはで常に、いとなまぜ給ひける間なり。御薪に、すゝけたれば黒戸といふとぞ（吉田兼好つれ〴〵草）

かく記し奉るはかしこき事には侍れど、一千餘年前より現今に渡りての、割烹の源を湧出せしめたまへる大御めぐみを仰ぐべき人々の便にもとて、おそる〳〵記し奉るにこそ。

扨、此の流祖より、次第に傳り來りて、近古に渡れる迄に、其の名の世に喧傳せられたる者は、四條大納言隆親卿、園別當入道基氏、細川勝元、同晴元大志麻六郎左衛門長次、大草三郎左衛門公次、多治見備後守貞賢坪内某、細川幽齋藤孝、生間民部、秋庭備中等なり。其の他の武士も、賓客饗應は、必ず、御前庖丁の如き物有りしに由て、皆其の敎師に附て、習學せしなり。武家のみに限らず、宮所方にも、庖丁刀の式を習禮せし事は、源氏物語に、ちかき川の鮎、にし川より奉れるいしぶしやうの物、御まへにて調じて、と書けるなん、すぐれてめでたきとよ。只今さやうの料理仕つりてんや、云々と增鏡のしたの巻に見えたるにて知るべし。なほ委しくは敎授方の所にいふべし。

○四條隆親卿と、園別當入道の事は、徒然草に由て、一はからさけを供御に參らせられしを、くわやしき物をと人のいひしに、鮎の白子を引いでゝくるしからじと申し事に名高く。一は雙びなき庖丁者なりてふ事を以て、世上に紹介せられたり。

細川勝元の事は、塵塚談に名高く紹介せられたり。其の他も、共に四條流中の人々なり。

是より近世に渡りての傳統は、暫く預りて、後に之をいふべし。かくの如く、宮所も、四條流の源

泉を溢し、國々も、又、其の流末を汲み競ひし其の餘流は、ひいて今日に渡れるなり。

是に由て、余輩割烹界の文章生たる位地を退きて近來の割烹教師と世人の稱する先生等の所説を述ふべし。

華族女學校講師田邊和氣子故人女史割烹講述の緒言

凡そ、女のつとめ多かる中に最も重んずべきは廚の心得にこそ有りけん。假令高位の人の内室たりとも、普通の料理法、及び、豫算確算に詳ならざる時は、下人の侮りを受るのみならず、不經濟に流るゝ物なり。衣食住とて、人の一生、一日も、離れ難き物の中にも、最大切なるは飲食なり。食物に由て、羸弱なる人も、健康となり、食物不注意より、健康の人も病ひを發するためし、今更いふ迄もあらずかし。されば、一家の主婦たる物、朝夕、是に心を用ひ、平常の食物は淡泊にして、滋養あるを用ゐ、夫を始め老幼のため、衛生に經濟につとめ給ふこそ肝要なれ。

人は身分の上下に關せず、男は朝に家を出つれば心を勞して、外の務を取り、ゆふべに歸るを常とす。女は、家に有りて、之を待うけ、何くれと心を用ゐて、夫の口に叶ふべき食物を調理し置て、まめ〳〵しくもてなさば、男は日毎に家をたのしみて歸るべし。是に反して、女の心まめならずは、いつしか外に心移りて、思ひの外なる事をや生せむ。

一家の富榮貧衰は、皆女のつとめにこそよるなれ。それつとめ給へや。いそしみ給へや。

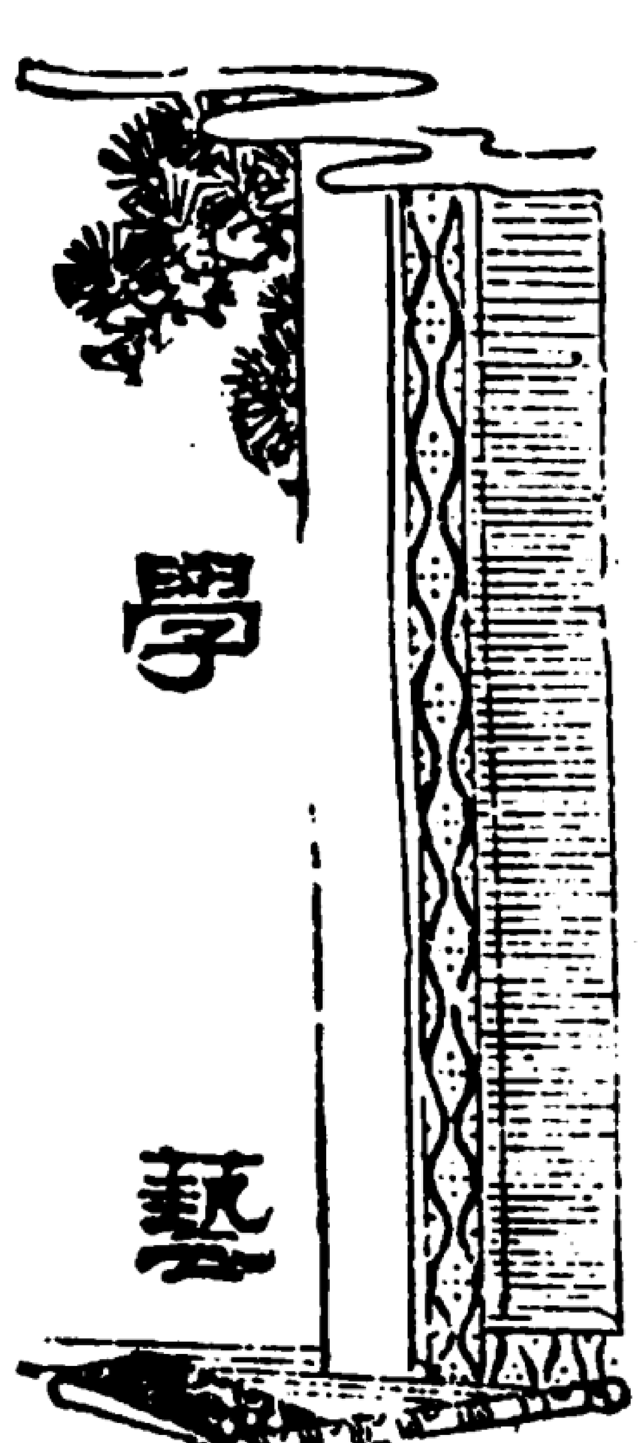
料理の方法に、二種あり。一は婚儀、其の外の大禮に用ゐる饗膳なり。二は常式の饗膳の料理及び、平常の調理なり。又土地の風俗によりて

調理法も多少の差別は有れど、其の一例を知るときは、如何なる法も應用して爲し得るものなり。此女學會の講義にては、こと〳〵しき儀式だちたる料理の法は、今一歩進みての後とさし置つ。此には、普通の饗膳の献立の大略を示して、參考をそなへ、料理には、極めて簡短なる日用の菜より講述する事とはなしぬ。

地方の片田舍に、生立少女がたは、膳椀、其の外の饗應物の名稱を詳かに知らざるもあるならん。故にこれらも圖して參考にそなへん。

何汁何菜といふは、汁一種あれば、一汁なり。菜三種あれば、三菜なり。これ、即ち一汁三菜なれど、日用の食物に假令種々菜あるとも、何汁何菜だ[illegible]いふべからず。客を招きて饗する時の献立には、其の組合せの法ありて、儀式に用ゐるを何汁何菜といふ習はしなり。此の差を心得ざるべからず。

献立をなすには、四季ともに、其の頃最も珍らしき魚菜を撰びて、取合す事を要す。又、同種類の物を用ゐるべからず、老人幼少の客など交ふるときは、殊に注意すべき事にこそ。



漢文學講義

佐々木天游

惠美子堂記

山縣周南

海爲ニ萬寶藏一。萬貨出焉。而惠美子所レ賓。不レ過ニ一釣竿之利一。然世則有ニ福神之名一。是何說乎。古之善處レ富者。陶朱爲レ首。聞猶不レ保ニ其子一。富之難レ處

哉。故厚積若抵。出焉若泉。可謂之富。未足以爲福者。人各自適所居。自樂其天。則寧而壽考矣。苟繇其道也。富貴有以行。貧賤有以處。天下無不可者。是可以爲福矣。余觀惠美子像。豊肥寬裕。猶然而笑。蒙叟曰。除病瘦憂患。開口而笑者。一月之中。不過四五日而已矣。夫笑也者。人身之和氣祥風也。惠美子。身有祥風和氣。雖有憂患疾病。莫之能侵。故能終日開口而笑。眞福神哉。或曰。惠美子之笑也。則有意焉。蓋笑世之專心壹力。唯富是務。不復知財物之累己耳。

海は萬寶藏なり。萬貨出づ。而惠美子の資る所一釣竿の利に過ぎず。然も世に、則福神の名あり。是何の說ぞや。古の善富に處するもの、陶朱を首となす。而猶、其の子を保せず。富の處し難き哉。故に厚積抵の若く、出すこと泉の如し。之を富と謂ふべし。未た以福となすに足ざるものは、人各々自ら居る所に適し。自ら、其の天を樂めば、則寧にして而壽考なり。苟も、斯の道に繇るや。富貴以て行ふあり。貧賤以て處するあり。天下不可なるものなし。是以福となすべし。余惠美子の像を觀るに。豊肥寬裕、猶然として笑ふ。蒙叟曰病瘦憂患を除き、口を開て笑ふもの、一月の中、四五日に過ぎざるのみと。夫笑なるものは、人身の和氣祥風なり。惠美子、身に祥風和氣あり。憂患疾病ありと雖も之を能侵すなし。故に能終日口を開て而笑ふ。眞に福神なるかな。或曰。惠美子の笑ふや、即意あり。蓋し世の心を專らにし。力を壹にして唯富を、是務めて、復財物の己を累すを知らざるを笑ふのみ。

此は、俗に申します七福神の一の惠比須神堂の記で、惠比須神は、蛭兒命のことであります。偖、

海は萬寶藏たりで、海と申すものは、萬の寶の藏れ取りてある處で、樣々の寶となるべき處のものか、海より出てまゐります。(出焉は、之より出づと謂ふ意なり。即海より出づと謂ふことなり。)さうして、其の澤山に寶が藏りてありますところの海の中より、惠美子神が取りて所得にするところのものは、(資は取なり) タッタ一本の釣竿の利益だけに過ずして、其の取る所のものは、誠に僅々たるもので御坐ります。(惠美子の像は、何れも一本の釣竿を持て、鯛を釣りてをられます。故に不レ過二一釣竿之利一と申したものであります。)然るにサウであるのに、世間では、則福の神と謂ふ名がありまして、七福神の一に數へてをりますが、是は、何のドウいふ理窟で御坐りませうか、海中の萬寶藏を皆取るでもなく、タッタ一本の釣竿で、鯛を釣り取るだけのことであるのに、福神と申すのは、ドウいふものであろうかと、少しく疑問の體に持込みまして、此より以下に、其の福と謂ふ義を釋して、惠美子の福神たる所以を辨ずるのであります。偖、古のむかしの善上手に富に處し居りて、金を澤山に、持ちましたものは、陶朱公の范蠡を第一と致します。しかしながら、其の猶上手に理財貨殖の道に、通じてをりました所の范蠡すら、猶、其の自分の子を保ちて、子の生命を助け保ちますことが出來ませぬで、其の中男が人を殺して、楚と云ふ國に囚はれました。(陶は、地名でありますが、范蠡が越を去りました後に、陶に行きまして、姓名を變じて、朱公となりまして、貨殖の道を修め、巨萬の富を重ねましたので、支那で金持の話を致しますと、先初めに陶朱公を稱します。)さういふ所よりみますと、富と云ふものは中々居り惡くて、富を持扱ふと云ふことは、六ケ

敷ことであります。故にそれだからして、厚く澤山に、財寶を積重て、持ちてをりますこと、山坂の如く、(抵は坂のことなり。文選に坂抵巀嶭而成レ巇とあり)限なく、財寶を出ことは、(出焉は、之を出すと云ふ程の意にて、用字法上の出焉に同じ)泉ノ湧出が如きものは、之を富の金持分限者とは申すべきも、マダ以て福徳者とはなすに足らぬと云ふものは、何せかと申しますと、陶朱の如き富者も、其の子を保つと云ふ福を持つなどは、出來ませなんだ。大概世の中の人は、福と富とを同じことゝ心得て、金さへ持て居りますものは、福者と思うて居りますが。それはまだ福と云ふ義を知らぬからしてのことであります。ソコで、眞の福と申しますものは、ドンナものかと申しますと、人各々、其々に、自ら自分の現在に、自分が居ります處の場所に適し安んじて、其の外を願はず、自ら自分の稟得たる所の天命を樂み、安心して、非分の事を企て望む樣なことを致しませぬときは、則ち其の時は、安寧にして、人の怨を買ふこともなく、壽考の生命長くして、(壽も考も、いのちながきことなり。)天の災を蒙ることもなく、安樂長命なることが出來ます。苟も、かりそめにも、斯の道で、自ら、其の居る所に適し、自ら其の天を樂んで、非分の事を願ひ望まぬと云ふ道に依りて、世の中を渡りて行きますれば、志を得る富貴に、金を持ち、位も貴きときは、以て自分の志を行うて、天下の人を兼て善し、亦、志を失うて、貧しく貧乏にくらし、賤しく、身分なくしてあるときは、以て自分の場所に安んじ處りて、獨り善し、富貴にして淫せず。貧賤にして憂へず天下行く所として、宜しからざる所のものなく、身も心も、共に安寧なることが出來ます。是が所レ

謂眞實の福と申するもので是以て福德となすべきぢや。世間に申します金持とか、分限者とかは、あれは唯、富者で、福者ではありませぬ。以上、先福と謂ふことを辨じまして、ソウシテ次に惠美子の福神たる以レ所を論じます。偖、余自分が惠美子神の像をみまするに、豐かに、ダップリと肥え大り、寬かに、裕かに、一向大容な風をしてをられまして、猶然の、ニコ〱として、笑うてをられます様か、如何にも、福神らしい、蒙叟の莊周が中々世の中は、安樂なことが少なきもので、病氣やら、心配事やらを取除いて、心の底から、樂しく嬉しくて、口を開きわげて、笑ふ處のものは、一月の中、四日か五日に過ずして、タッタ一月に四日か五日許りのみぢやと、申しました通りで、眞に樂しくして、笑ふと云ふものは、中々稀なことで御坐ります。(莊周は、蒙の人なり。故に蒙叟と云ふ。叟は長老の尊稱なり。除二病瘦憂患一云々は、莊子盜跖篇に出づ。)夫々一体、笑と云ふものは、人間の身体の和氣祥風で、人の身の和かにめでたき氣が、口に發して笑となるので、誠に目出度ものであります。惠美子神は、常に猶然として、笑うてをられますので、其の身体には、目出度き和かき氣が充ち滿ちてをります。そこで憂患の心配な事とか、疾病の病氣とか云ふ邪氣厲風がありましても、其の和氣祥風に打負て、惠美子神の身體を侵して犯して災禍を加ふることがないのであります。それ故に、能く終日の一日の中、ニコ〱と、口を開て笑うてをられますので、是が眞實に福神であります。(哉の字に、詠歎の意あり(穴堅に、多く財寶を取るが、福と申すものではありませぬ。以上惠美子の福神たる所レ以を辨じまして、以下は、或人の言を借りて、世人を諷刺し、

文の波瀾をなしたものであります。偖て亦或人がありて、恵美子神のニコ〳〵として笑うてをられるのは、則ち意ありで、無意味の笑ではなく、蓋(蓋は推原の辭なり)其の笑うて御坐る意を察するに、世の中の人が、心を專らにして、專一になり、力を壹にして一生懸命に、脇目もふらず、唯一筋に、富で金持になること計りのみを、是務め行ふて、徳を修ることを知ず、利益を貪ることのみを希うて、却て、復財物の金錢什物が、已に福することは偖置て、己、自分を累して、却て災を招き、尤を致すの具となることを、知らざるものを冷笑のである。(耳は決語なり。)と申しましたと或人の言を借りて、世の營利にのみ、汲々たるものを諷刺して、茲文を結びましたので御坐ります。

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(一)

平安朝文學の隆盛なるに及びて、二人對峙して彤管を揮ひ、有髯文士をして、しりべに瞠着たらしめたる兩文豪ありき。

兩文豪とは、そも何人ぞ。とはずして、清少納言と、紫式部なること、諸嬢の知らるゝ所ならむ。

紫の筆は、艶麗嫺雅流暢を以て聞え、清の筆は清素簡潔適勁を以て稱せらる。

今、日常普通の文中に、優婉高尚なる美詞を交へて、流暢にかゝむとせば、艶麗閑雅なる美文を玩味して、その精華を摘み、よく調化せしめむこと緊要なり。

よりて、まづ嬢たちのために、紫式部日記を譯解

し、つとめて、文字以外に含蓄せる餘意をあらはし、たやすく、美文の組織をしらしめむとす。

今、銀盤玉をまろばすが如き源氏をとらすして、趣味平淡なる、この日記を取れるは、専、美文と時文とを調化して、俗に流れず、雅に偏せざる、普通文の資料となさむがためなり。

孃たちもしらるゝ如く、源氏のかたは、もとより作り物語なれば、靈筆縦横、烟波縹緲の致あれど、この日記のかたは、たゞ日常の出來ごとを記すにとゞまれば、いかに、錦心繡腸、咳唾玉をなす作者といへども、ほしきまゝに、神出鬼沒の靈腕をふるふこと能はざるなり。その能はざる所、すなはち、普通文に適するところなり。

この日記によりて、水戸の學者、安藤爲章氏は、式部の才學徳行を證明し、紫家七論をあらはされたり。

また、この日記によりて、源氏物語の奥旨をもさとられたり。

されば、孃たちも、この日記の文義をあきらめらるゝと、ともに、作者式部が、深意のあるところをも味はへたまへ。その益すくなからざるべし。

ちなみに、作者式部の小傳をも、附記せまくおもひしかど、そは、既に本紙にも、下田義天類ぬしの、源氏物語講義にも載せられたることあれば、今は、煩をさけて省きつ。

源氏物語の文中にも、質實の條ありて、通俗文に参酌し、適當のところ多かれど、下田ぬしが、例の獨特の長所なる、その講義録におきて、深刻なる健筆を呵し、從來雲霧の中にとざゝれたる疑義を通解し、作者が精心のある所を捉へ來りて、その文意文情を曲寫せらるべければ、今はそのかたにゆづりていはず。

さて、この日記の本文は、もと書きつゞけなるを今、よみやすからしめむ爲に、句讀をきり、章段をわかてり。

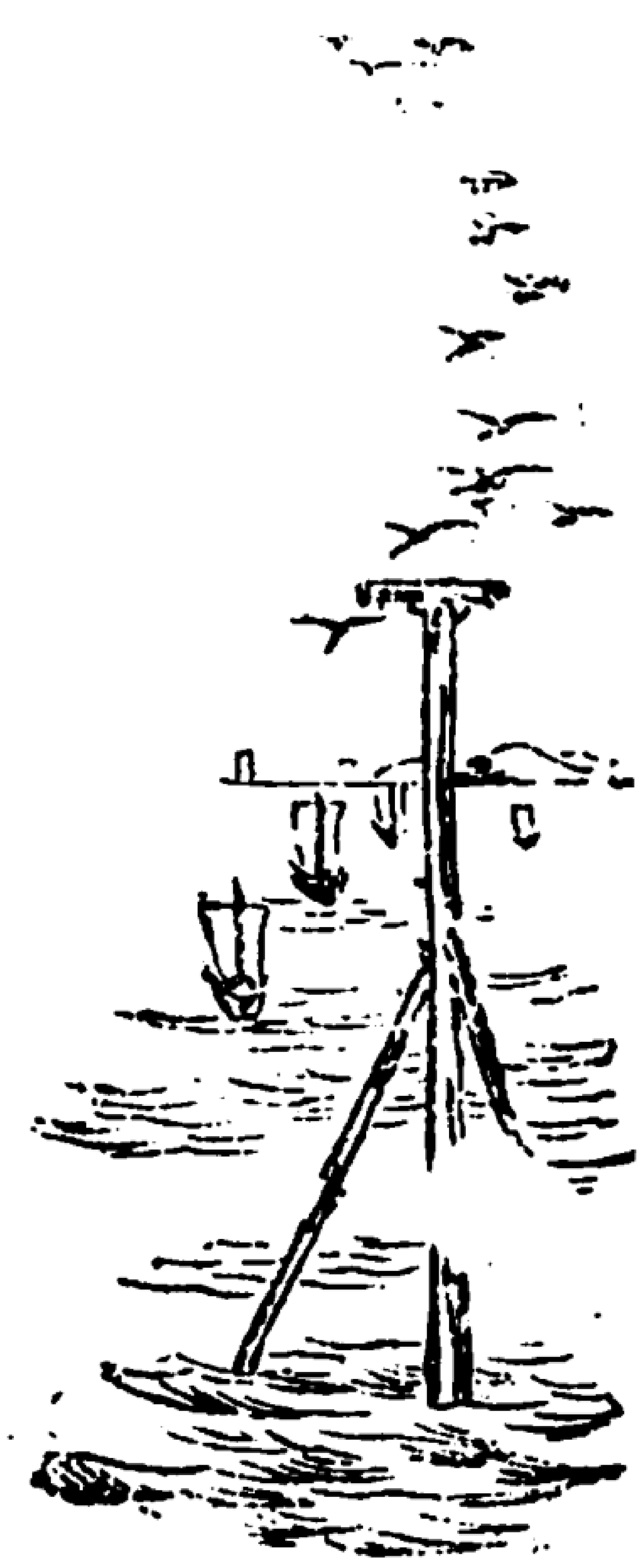
この講義は、ひたすら、嬢たちの解しやすからむ事を眼目としたれば、さしも本文に必用なき故事考證等は、たゞ、その要のみを摘み、語釋などの數說に分れたるは、その中にて、妥當とおぼゆる一說のみを擧げたり。

されど、大に文學上のたすけとなるべき條は、例にそむきて、まゝ數說をつらねて記せる所あり。これ講述者が老婆心なれば、不規則と、な見すぐしたまひそ。

今釋義と、譯解とを竝べてあげたるは、行文以外にひそまりたる意をさとらしめ、含蓄せる餘情を摘みて、雅文の組織を會得せしめむがためなり。

譯解は、專、さとりやすからむ事を主眼としたれば、つとめて、平易なる通俗文體にうつし、なほそれにても、さとられがたく覺ゆるところは、傍に、カタカナもて、言文一致體の口語を附記せり

今、譯述上につきて、注意すべき要點を、次號に列記せむ。





漫録

前日御話申置候、女訓綾の雛形壹綴御持せ申候。右は、殆んど十年前の編纂に候へば、當今時勢の成形に比較候時は、不都合も可有之、此の邊は、御斟酌之上、御看過を被成下度候云々。

六月二十三日　　素彦

女訓綾の雛形（巻の壹）

従三位男爵　楫取素彦

一嵯峨桐、太秦の金襴といへる、白極の緞子につつみたりとも、破れ瓦のまろび出たらは、ほと〳〵興もさめつべし。立居ふるまひ、言葉のしな都雅なりとても、心術いやしく、頑ならむ、いかにせん。心を治る教などは、稚き人、その聞たもたん事の覚束なくは、あれど、眞白なる糸の黒まぬさきに、心おきての一ッ二ッをも知らせまほしくて思ひつるまゝを云とけなくも、書つけぬ。

一凡、生としいけるもの、雄あれば、必ず雌あり。人はさらなり、鳥獸魚介虫類乃至非情の草木まで、千世萬代に絶ず、榮行は、皆雌雄和合して、生みなせるいさをしによるなれば、男といひ、女といふ同功一體尊卑の差別なきやうに思るれども、固より左あるまじき天地自然の道あるを能く辨ふべきなり。先我が皇國にして、神の御世に伊邪那岐、伊邪那美二柱の大神はじめて、國の御柱を旋らせ給ひしとき、陰神の詔の先立せ給ひしを、陽神不良と宣はせしが、果して、生ませる御子神意に適はせ給はず。復、高天原に昇りまして、天神に縁由を告させ給ひしに、そは、男女、先後の

順序たかへるによるとの　神勅ましませしかば、此の次は、陽神より御詞出させ玉ひてこそ、生成の神功をば、遂させ給ひき。唐土にも古の聖人、天地の道を明らめ教を萬世にたれんとて易てふ事を創造せられしに、天は、陽にして、尊く、地は陰にして卑しく、陽まづ施して、陰これを承け、男唱へて、女和する理を諭されぬ。西洋のふき傳にも、造化の主、まづ、おのれに肖たるものを揑ねて、人となす。即ち、男なり。この男體より分ちて、女子を造り、男をアダムと名け、女をイブといふといと、信じがたき説ながら、男の女に先だつの理は、大様たがはす。彼是を考へわたして其の道理をさとるべきなり。夫、女は、三從の道とて、家にありては、父に從ひ、夫に適ては、夫にしたがひ、夫なき後は、子に從ふべきなれば、假初にも、人に先立ちさかしばみ、我は顔なる氣

色あるべからず。まづものやはらかに、おもりかにして、奥ゆかしうてこそあらまほしけれ。さりとて、よしやあしやの分別もなく、ひたすら人まかせになりたらんは、無下に口をし。雪に撓める嫋竹も、直なる性をば失はで、頓て、もとの姿に起き返るぞかし。事に觸れ、物にふるゝとも、心の操は、露ばかりも動かさじと、一筋に思ひ定めよかし。柔順は、天性の婦徳にしあれば、専ら、此の道によるべきは申までもなし。されども、能せずば、楫を絶えたる小舟の行衛もしらずたゞよひ廻り、あるは、水のまに〳〵誘はるゝ萍のいとはかなく、あはつけき名を流しやせん。さてこそ、柔順の徳に、貞固専一の教を加へて、婦道の本とはすべきむねを、倭唐土の賢き人達は、つぶさに諭しおかれしなれ。女の身にとりて、愼み戒むべき事數多あるが中に、

妬忌するほど罪ふかく、怖ろ敷ものはあるまじ。妬忌するすぢなどは、知らぬほどの心にも、我より勝るものを見て、はじめには羨ましく思ひ、終には憎くなりて、心よからず思ふこともあるべし。こは、取も直さず、ねたみ心の萌せるなり。我より勝る人あらば、兄とも姉ともおもひ、敬ひかしづくべきが道ぞかし。よしさまでなくとも、彼も人ぞ。我も人ぞ。いかで劣りはつべきと、勵む心を起さば、終には、彼にも勝る域に至りつべし。徒に、人を羨み妬むは、おのが心のいやしく拙なきより起るなり。稚き時より、妬忌の情を、切に戒め禁ず。おとなび行くまゝに、つのり／＼て、果は、人をも苦しめ、我が身をもはふらかし、世にあさましき話柄とはなりぬべし。周の文王の后は、世にすぐれたる徳行のあまたある中に、妬忌せられぬを殊更に稱へ申し、言の葉を、國風うたてふ詩の、そのなかにしもれかれにき。また、婦人の妬まざるは、よろづふつゝかなるを蔽すべしといふ言あり。返す／＼も、愼みたしなむべきは妬忌の心なりけり。

一生れつき怜悧人のくせとして、我はと思ひあがり驕る心のあるものなり。古への清少納言小野の小町にも劣らぬ才貌ありとも、驕慢の心あれば、必ず、人にうとまれ、行末も幸なかるべし。取分もの學びする者は、けしきばかりも、此の心きざせば、進むべき業は、日に／＼降り行きて、終には、師友に見かぎられ、學びのわざも徒事になりぬべし。氣色にはあらはさずとも、心のうちにれもひあがり、人を見くだすは、即ち、驕心にして女子の身にとりては、嫉妬におとらぬ凶徳なるをや。百とせの姥となりて、路傍にさまよひ、古家の簾かゝげて、駿馬のはねを買はずやありしとか

こちけん、昔の人の果をおもひ見よかし。

將來の日本國民（六）

肝付兼行

國民的品性と政體　我が同胞の代表者たる敷島大和之助は、其の名にも似ず、海事思想に乏しくして、其の品性が、海國民的でないが、是、抑々各有形的要素の活動しない所以である。然し、此の品性は、祖先傳來のものでは、決してない。即ち申すも遺憾ながら、是我が暗世政治ともいふべき、近古二百有餘年の間、行はれた、鎖國政治の遺習に外ならぬのである。乃ち鎖國は、海外との絶交であるから、此の政治を行ふには、何よりも先、人間の生命たる食物の獨立といふことが、大切で、又海外貿易殖民等のことを禁じなければならぬから、自然の結果食料の作者たる農業者、即ち、百姓を殖して、之を尊とみ、海外との連絡者たる商、航、工業者、即ち、町人船乘を撲滅して、之を卑しむ習慣を造り出さなければならぬ。そこで、非海國の教にして、農は國の本とか、父母在せば遠く遊ばずとか、海國には、最も忌むべく厭ふべき所の主義を持する陸國、支那の儒教を極力天下に布て、尊農卑商工の政畧を嚴行し、其の上にも、國人の海外に出でむことを恐れて、船の大小と構造とに制限を加へ、其の大さは、五百石積以下たるべし。其の構造は、軍艦無龍骨たるべしと令し、且つ、此の禁令を犯し、海外交通を爲すものは、死刑に處すといふ國法を定めた。故に因襲の久しき、百姓に天下の御百姓といふ尊稱を生じ（尤も裏面には、土百姓、水呑百姓の蔑稱は無きにしも非ずだが）町人に、素町人といふ蔑

稱を生ずるに至つた。さうして町人の方には、裏面にも、尙、御町人などいふ尊稱は、決して起らなかつたのである。されば、其の結果は、農工商の分配を非常に偏農的になし、左の如き統計を開國以來、將さに五十年に垂とする今日に尙遺して居るのである。

種類／國名	農	工	商
英國	一九	六八	一三
佛國	五四	三〇	一六
獨逸	四二	四五	一三
米國	五二	二九	一九
日本	七九	七	一四

是前段に、好位置に在る町地が、殆ど田畑になつて居るといふた所以で、即ち、何よりの證據であります。尤も、日本のみはステートマンス、イーア、ブックの如く年々の統計が、此の職業別に得られませぬから、去る明治廿五年の三府三十六縣の調べより得たもので、七縣欠けて居ますが、まづ百分比例に於ては、少し古い丈けで、大過はなからうと思ひます。其の他各國のは、今年のステートマンス、イーア、ブックより、皆取つたものであります。政體はあまり切實に說明せんとすると、政談に涉る恐れがありますが、如何なる政體がよいかといへば、海上權力を得るの要素としては、何政體に論なく結局方針の動かない政體が一番宜しいのである。英國の如きは、王政變じて、一時クロンウエールの統領政治となつた時でも、航海で、國を維持するといふ施政の方針は、少しも變はりませむ。寧ろ一層勵行した位であります。佛蘭西の如き、和蘭の如き、或は陸軍に傾き、或

は海軍に傾き、其の方針が、ぐれ〲して確定せぬから、一は、竟に海權が得られず、一は忽ち海王の全權を失うて終に今日の有樣に縮小しました。佛國もルヰ十四世時代には、海軍を大に擴張しましたが、其の方針が續かぬから、根の無い喬木で、忽ち衰凋しました、我が國は、幸に萬世一系の　君主を戴き億兆一心の民より成立て居りますから、確乎たる國是の定まるに於ては、之を萬代不易に遂行することも、決して難くはないと信じます。政體の話しは、憚る心がありますから、此の位にして置きませう。偖、我が國は、有形の要素には十分の天賦を得居りますが、之を利用する無形要素には、まだそれだけの發達が、私には見えない。扨、今日世界の文明も、其の發達し始めたのは、第十四世紀、否寧十五世紀以後の事でありますから、我が日本も、鎖國政畧の嚴行さへなかつたならば、恐らく、歐米に劣らぬ文明の先進國となつて居たに相違ないと信じます。鎖國政治と支那の儒敎との普及した結果、學士の母に前述の如き者を出す日本となつたのは、誠に口惜しき次第であります。それですから、人を養ふは、實に百年の計で、品性の改良は、なか〱一朝一夕ではできませむ。偖無形の要素は、有形の要素よりも、一層大切なものでありますが、有形の要素が、殆ど人爲で得難いに引替へ、無形の要素は日月は要しても結局人爲で得ることができるのである。故に民草培養の職にあられる諸君にして、憤勵一番蹶起して、國素の缺を補ふの精神を以て世の子弟の敎育に從事されるに於ては、敷島大和之助の長所たるべき海權の資用も、敢て難いことではない。呉々も、我が國、今日の國民的急務は其の品性の改良にあつて、即ち國民敎育の勵行に

あるのであります。又、我が國人口の増殖する割合は、近年十個年の平均により、一萬人につき、百四人二分で、六十七年目に二倍し、百六年目に三倍、百三十四年目に四倍、百五十五年目に五倍二百二十四年の後には、十倍になりますが、土地には殖える當てがない。殊に當御縣などは、狹い土地に多數にして稠密な、人口を持て居りますから、自然土地に不足を生じ、次第々々に農業のみでは、生活が出來なくなるのである。故に生活の手段方法も、自然に變化しなければなりませぬが米澤の士族が維新の改革に際し、他縣、多くの士族の困つたにも拘はらず、さほどの困難を感じなかつたのゝ、早くから内職に従事した習慣のあつたのは、結果であります。農業者も、其の通りで、世の變遷に從ひ、士族の維新の際に於ける如き、生活上の革命は、到底免かれない故に、今後の二三男以下は、勿論、其の他と雖も、商工業に轉ずるといふ方に心を向くることが、自個の爲め國家の爲めに、甚だ肝要であります。是は、信州人の話で、四五年前の計算でありますが。米を作つた一段歩の收益は、まづ貳拾圓位であるが、之を桑畑とすれば四拾圓乃至五拾圓の收益がある。福島縣でも、一段の桑は、慥に四拾圓に賣れると聞て居る。又、一段の桑を以て、養蠶すれば、糸にせずに賣ても六拾圓には、慥になると聞て居る。故に年中、過半泥だらけになつて、米作をするよりは、養蠶の方が餘程割りである。さうして、米作をするよりは、外國の金が取れるのであるから、國の爲にもなるのである。されば此の結果は、人の殖ゑるに反し、米の作り手が減ることになるのであるから、日本人の食する米はどうして得るかといふ問が起るかも知れぬが、隣國の朝鮮よりも、

隨分得られる。又、朝鮮に依らずとも、日本人位の米は、英領ビルマのラグーン、佛領交趾、支那のサイゴンに行けば、いつでも得られる。ラグーン、サイゴンの港名は、米の形容詞にまで使はれる位で、世界に有名な、米の輸出港である。さういふと、又、南京米は、油氣乏しく、まづいといふ攻擊が出るかも知らぬが、成程冷飯になると、バサ〱する、けれども、温かい內に食すれば、敢てまづくもない。又、是迄は、內國米の拂底して高いときにのみ、輸入するの結果、兎角、價の安いものを買ひ入れるからでもある。故に良質のものを求めて、三度とも焚きたてを食するやうにさへすれば、何も言ふことはない。要するに、我が敷島大和之助が、世の競爭場裏に長所を出さうとするには、自給的生活を廢して、他給的生活を取り、なんでもまづ、外國人の嗜好を察して、其の嗜好に應ずべき品物をドン〱作り、之が輸出を圖らねばならぬが、偖、之を實行しやうとするには、先づ勇敢の氣象を養ひ出すことが第一で、そこで父兄の諸君に望みますが、時に變じて止むことなく、しかも吾人は時と共に變ぜざるを得ないものであります。又、古語の所謂窮すれば變ず、變ずれば通ず、で人間處世の要訣は、實に變通應用の中に在るのであります。乃ち鎖國時代には「農國之本」「父母在不遠遊」的の非海國敎訓も、時に應じて用に立ちましたが、されど正反對なる開國進步の時代の今日には、是が却て害となつて居るのであるから、まづ從來の儒敎に養はれた蟄居的の腦髓は一洗して仕舞はれなければならぬ。

他山の石

岐蘇　小東洋子譯

(一)ナポレオンの母(ツヾキ)

彼は、母にとて、銀のランプ一個を只殘し丶のみ。金錢を遺さゞりしは、之生前、母の需用を充たして餘ありければなり。母が佛國より遣し丶醫師、アントマーチ氏は、ナポレオン帝の死後、歸國の途に向へり。ロンドンに到達して、彼女に、歸航中なる事を報告せり。彼は、ナポレオンの顔形を石灰の鑄物にて作り、其の一をメアー夫人に送れり。彼は、佛國に到着し、ナポレオンの妹、ポーリンと、其の母を訪問せし時の事を記して、母が、其の愛子ナポレオンの死を聞きし時は、妹よりも、猶如何に感激悲痛に堪へざりしか。彼は、其の母の愁傷を記す能はざりき。只「余は、余の見し處の事實を記して、殊に注意を乞はんとす。余が、第二の訪問に於いて、メーア夫人は、いと沈靜幽寂の有様にて、談愈々進み、語濃かならんとせし時、殆んど、苦痛に堪へ兼ぬる風情なる故、余は差控へて、談を中止せしに、彼女は、涙を打ちぬぐひ、又、質問して止まず。之は、實に心腸裂けんとする程の勇氣と苦痛との爭ひにてありき。余は、三度彼女を訪ひし時、非常の親切の言辭を以て、謝せられ、彼女の好意の驗として、余は金剛石を得たり。其は、ナポレオン帝の母より得たるものとして、余が、生涯身膚を離さゞるなり、」と記せり。

ナポレオン帝の、最後に至るまで、熱心に看護奉養を怠らざりき。其の醫師は、帝の死後、彼は、ゴール、スパルジーム兩博士の惱蓋骨論の方式に依り、此の大人物の頭を試驗せんとするの感を起

し、其の試驗の結果は、左の如き顯著なる品相を得たり。

第一僞善の機能、第二勝利の機能、第三親切慈悲の機能、第四想像の機能、第五功名心と光榮とを慕ふ機能。

才能智識の機能に關しては、

第一獨立、即ち、個人と事物に對する機能、第二宇宙上に於ける土地の機能、第三數理的の機能、第四對照的の機能、第五哲學上に於ける根本的機能。

ナポレオンの容貌、及び、眼力は、母と同一なる如く、母子の心意上、道德上の品質も、又同一なる事は疑ふべくもあらず、殊に萬難相迫るも、之に打勝たんとする意志力と、大膽なる事は、ナポレオンに於てあらはるゝ如く、母の上にもあらはる。彼の母は、彼が壯年血氣の時代に於いて、配所の牢屋に死すべきを運命せられし事を、夢見し前、屢々ローマより書を飛ばして、彼を慰撫せんと盡力至らざるなく、自己が持ちし凡ての物を、皆、彼に送りき。彼は、壯年時代を回顧して、感謝して曰はく、「余の母は、余の爲めに、一のつぶやぐ事なく、粗食をなして、生活するの止むなきに至るの意識の高大は、彼女の胸中に王位を占め、自尊と、高貴なる大望は、情慾も勝つ能はざりき」云々、

千八百十八年十月ナポレオンの母は、アイクス、ラ、寺院に於て集りたる聯邦諸王に對し、ナポレオンの爲めに陳述して曰はく、「妾は、一の母として、妾の子息は妾が身よりは、一層愛すべきものなし。汝等諸王、及、帝國を攝理する善能の主の名に依つて、彼を有斯流刑たらしめ、自由の綱を解かん事を願ふ。此の爲に神に願ひ、又、此の世

に於ける神の代理者なる汝等に願ふ。」
ナポレオンの母の死せし時は、何才なりしかに付ては諸説あり。エリス夫人は、八十才にて死せしと言ひ、有名なる（ナポレオンの傳）の著者、ウイリアムは、千八百三十六年四月廿六日、ローマに於いて死せし時は、八十六才の高齢なりしと言へり。何にもせよ。彼女は、千八百三十年、庭園を散歩中、受けたる傷害により、非常に衰頽失望のものとなれり。
今吾人が、レチチア、ボナパートの人物に就て、公平の判斷をなさんとするに當り。吾人は、彼女の品性が、彼女の苦勞多難の生涯によりて、感化せらるゝ事多きを信ず。若し、彼の女が、故郷コルシカ島より追放されずば、彼女の思想と事業の主義は、追放、彼女の夫の早死、第二子の亂暴の所爲、其の他全家族の苦慮等が、彼女の性質を増成せしよりも、非常に異なる事ありたりしならん。吾人は、母とナポレオンの境圍より、別に一個人の性質を離して論ずる能はず。ナポレオン、自身、既に殘忍にして、人情には全く過眼視せりとの誹謗を受けしも、醫師の解剖は、彼女が、非常に親切にして、恩愛に富むを證せり。彼の母は、後年に於て、歷史家のみならず、彼女に迄は、感謝と愛義に富む、彼の言より貪慾なりと評されし程なり。之れ母が儉素にして、一度は、シャーレマン帝以來の大帝王の母となり。光榮の極點に達せし時も、次には、囚人となり、王位を剝奪されたる追放人の母となりしときも、金圓を浪費するは、幸榮、災危等の大變化よりも恐る可きを知れり。彼女は、常に謂ひし如く、雨降らざる前に、其の用意をなせり。之不幸、災害は知らぬ間に慥に來るものなればなり。彼女は、少女の時は、コ

ルシカに於ては、美人の名高かりき。彼女は、女子等を養育せしが、殊に美人にして、腕白なるポーリンには、實に持て餘ませり。若し彼女が、養育上に於て、キリスト敎徒的の母の强固なる意志を以て、彼等子女の輕薄、悪風を制せざりしならば、佛蘭西國に於ける、特に彼女の時代の朝廷に於ける道德の腐敗を知るに足る。若し、ルイ十六世の朝庭が、不義、放肆にてありしならば、ナポレオンの朝廷も同じかるべし。彼女は、譴責せざる事は、之を默許す。去れども、彼女自身、情慾は、絶對的、之を排斥し、彼女の剛膽なる精神は、萬難の波濤を擊破し、コルシカに於ては、夫の危難を助け、戰鬪革命の波瀾中に生みたる愛子のために、凡て危險に勝たんと用意せられたり。母が、子息に對する待遇は、公平にして、兄弟姉妹、共に、一の猜忌厭念わらざりき。故に、吾人は、彼の母が獨り助手もなく、父もなく、住む可き國さへなく、殘されたる八人の子供を鞠育、敎養せし事は、實に眞實なる證據なり。彼は母の無我、敬神、信實、愛情を嘗めたりき。

若し、彼が、母の忠告に耳を傾け、凡てを母の賛成を得てなされしならば、彼を崇拜せし人民を、安全に支配し、他の諸王と平和に交際し、最も偉大なる、幸福なる、生涯を送りて、飽くなき此の世の權力の爲めに、愛す可き軍隊を、犧牲に供せずして、彼が死の際に言ひし「軍隊の大將」として、殘りしならんにと。彼は小兒の時より、アレキサンダー大王の傳を愛讀し、大王が「余の打勝つ可き國は、最早や世界になし」と言ひて、嘆息せしを記臆せり。彼は全歐州の覇王たらんために、佛國を保護せし、高大なる軍隊のみならず、人民の推撰により得たる佛國の王位迄、犧牲に供せし

事は、實に歎惜の至りなり。王位を去り、配せられて、數年ならずして死せしナポレオン、其の人の母は、彼女の後年を「永遠の都」とも言ふ可き、ローマに、隱處を得て、玆に住めり。其は世界の何の都よりも、彼女の心と記憶を殘す處にして、地に建てられたる王國の滅亡、人間の希望の空、此の世に於ける快樂の夢の間なるを、深く彼の女が感せし紀念處なり。されど、彼女は、宗教の信仰と慰撫とに依りて、

遠くして大なる光榮ある町。しかも其の家は
永遠滅びざる、町に住みつゝある。

其の宮殿は、佛蘭西の宮殿より、壯大に、王位は滅する事なく、爭闘は起る事なく、常に、和氣靄然として平安たる處なり。

（終）

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其十二）

白松園主人

世の常言に、氏よりそだちといへり。まこと氏素性は賤しくとも、幼きより良家の庭に生ひたちなば、惡しくなる者は、甚だ稀なり。されば、亦氏もそだちも賤しくして、良き者とならむことは、瓜をもて茄子となし、南瓜をもて、大根となさむよりも、難きわざなるべし。俊平姓賤しといへども、幼より士家に仕へて、忠孝の義を習へり。故に其のなす處よく節度に中りて、苟しくも汚れに染まず。之に反して、此の度、秋布が病の看護の助けにとて傭へる輪栗といふ婆々は、氏もそだちもまことによからぬ者なりき。俊平は之をよき者と信じて、傭ひしにはあらねど、さるべき者なか

りければ、せん方なくてやとへるなりき。されど、氏もそだちもよからぬ、此の老婆、いかでかよき事を營むべき。そを入れたりしは、俊平が一生のあやまりなりき。騷擾浮沈の動機は、はしなくも、此の惡婆によりて演出せらるゝに至りぬ。今、其の輪栗の性質をかき出せる條を見よ。

齡は五十に餘りぬべし、口よく利て、何事にも眞實だちて進止へば、この日より留め置きて、火打水汲む炊の所行、醫師許藥劑を乞ふにも、俊平は、この賚によりて、一層休める心地したり。されども折々仞錢の耗ることなどのあるを、貧しき故に心汚穢き、輪栗が所爲かと思へども、思ひ捨てゝ問ひも糺さず、とかくするほどに、この年も殘り少なになりにけり。俊平は長き夜すがら、幾度となく起き出てゝ、秋布が枕邊をさしのぞき、爐に炭をつぎ藥を爝めて、一夜とも懈らず。輪栗は漸く居狎ゝまゝに、ともすれば仕こなして、傍痛きことはあれども、秋布も俊平も、今更に渠なくてはと思へば、亦何事も得云はず。

之の文によりて、輪栗が性質善惡の一般を了するに足らむ。輪栗は漸やく慣るゝに從ひ、淫僻を以て、俊平を挑發し、平地に波濤を起さむとせり。

一夕、稀なる徒然なれば、輪栗は火盆を中にして、俊平と對ひてゐたり、江湖上の物がたりなどする序に、後室さまの病着は、氣のかたとかいふものにやあらむ、わかくて孀婦にて暮し給へば、さる病着のおこるぞかし、おん身もあまりに物頑し、老朽たる身にもあらぬに、後室さまを慰めはせで、さる病痾の發るまで、うち置き給ふは油斷にあらずや。

情火の燃え易きは、壯年の常にして、之に注ぐに油を以てせば、その火焰を揚げざる者稀なり。されば此の自然的理外の理に抗せんには、道義の觀念極めて厚き人に非ざれば、制する事能はざるなり。今、輪栗は、老奸なる巧言を以て、その鐵石、の心を動かさむとせり。百尺竿頭更に一步を進めて、其の急所を突いて曰く、

作麼なる情由のあるかは知られど、男女の主從が儔居して、女

夫ならずと宣ふとも、誰か實事と思ふべき、わらはに任せ給ひなば、せん術はいくらもあらむ、鈍きもここに依るものを。

強慾の情より外に一物なき賤婆は、實に獸的性理に悟入せり。之を叱するも稚し、之を笑はんも不可なり。俊平は何を以て、之に處したるぞ。その委しきを知る能はざれども、馬琴は左の一端を漏して止めり。

俊平はいと淺ましと思へば、他事に紛らせて、はやく臥房に入りたるが、日比の疲勞に熟睡をしたり。

嗚呼、俊平、早く臥房に入りて、忽ちに熟睡したるが、嗚呼、彼が、一貫の忠骨は狂はずとも、彼も一個の男子なり。老婆が奸言を耳にして、能く眠ることを得べきか、彼が胸中は、正に錯綜煩亂して、種々の事になやめるなるべし。或は、疑に對する處分策を考へ、或は秋布の身の上を憐み、或は、其の行末を思ひ、或は人世の上を觀じて、種々の感にむすぼれながら、遂に眠りに就きしならむ。そは必ず後に於て說明せらるゝ時あるべし。

かくて秋布は、次の日の早旦より、猛に病者瘥りけり。かゝれば今は、一日もはやく、肥の州へ赴くべし、師走の天に雪な犯して、路にてふたゝび病煩ふとも、こゝにて死ぬるに勝すべしとて、この日よりして只顧に、いそがし立てゝ已ざれば、俊平も禁めかねて、輪栗には身の暇をとらせ、店九郎に宿所を返して、年極中浣に主從二人、西を指てぞ立出ける。

長病に臥せる秋布が、次の日より、にはかに全快して、征途に上るといふは、余りに突飛ならずや。物すべて順序あり、順序を失する間には、潜める消息なきを得ず、讀者こゝに注意して、遽々然として驚くことを止めよ。

馬琴、此の次に於て、長々と註釋を試みたり。之前に、俊平が熟睡をしたりといふ伏線の解釋にして、俊平が內容、即ち、裏面觀察を施したる者な

れば、此の處、馬琴が、尤も苦みたりし跡なる事、歷々見るべし。故に長くとも左に掲げてむ。

いにしへの人いへることあり、酒は禮に始まりて亂に終り、人は五常を心に具へて、五常を全くするもの稀なり。君臣の恩義、夫婦の情愛、交遊の信實、師弟の授受、好憎褒貶、愛惡取捨、その始ありて終なきもの、比々として皆是なり。悲いかな迷悟相違からず、善惡比憐をなせり。扨も村澤俊平は、忠義純粹の心をもて、逆旅に秋布に仕ふること、はや二とせに及べども、男女の禮儀を正しうして、夜は一室に睡ぶることなく、實も戯言をもて慰めず、その性酒を嗜まれば、醉狂の失ちなく、その身健なりければ、勉めて艱苦を辭することあらず、今の世には、いと有がたき、老實堅固の良僕なれば、秋布もふかく賴みて、聊かも疑はず。されば主從相愛して親しけれども、禮讓を亂る事のなきものから、秋布が長き病着に、俊平日夜看病して、枕邊に侍りし折は、彼の嫂の溺るゝ時に、手をもてこれを助けざることと究はざる勢ひありて、その起きんと欲するときは、抱扶けて柱に倚らしめ、その臥せんと欲するときも、亦しかせざることなければ、こゝろやうやくに迷ひそめて、胸うち騒ぐ折もありけり。

有如之程に俊平は、一夕屋婆々、輪栗に、秋布がうへにつきて、浮きたることを云々といはれしをよくも聞かで、やがて臥房に入りたるに、夢にもあらず現ともなく、妄想そゞろに胸に浮みて、つく〴〵と思ひみるに、後室はその齢尙二十にも足らずして、生涯孀婦ならむこと、人情に違ふに似たり。且その容止の艶麗なる、京鎌倉にも多く得がたし。縱われ、彼の柳下惠が心をもて、心としつゝよく之に仕ふるとも、わが齢もまだ四十に足らず、男女の主從只二人、旅泊に年を累ねんこと、誰か情由なしとして、疑はざるべき。譬ば今宵栗婆々がいひけんは、なべて世の人情のまゝにして、これに違ひて疑はれむは、愚昏なるわざに似たり、倘潔白を旨とせば、辭し去るにますものなし、さればさて今更に、後室をうちすてゝ、獨旅路に呻吟まゐらするはいよ〳〵不義なり、かゝればわが主從は相別れんとするに離れがたき天緣の致す所か、情なき夫婦に相似たり。……人おの〳〵過世ありて、主となり家僕となる果報は、任せぬものにこそ、うたてかりけるわが身やと、果敢なきことさへおもひ宿の、迷ひに胸を苦しめしを、漸く醒めて思

ひかへせば、こは淺ましやわれながら、膽太くも主の後室に、懸念しつるは何事ぞ、總角の比よりして、主に仕へて、私なく、心ざまの正しきを、よく知られたればこそ、わかき婦人に冊けて、仇討の供にすら立たせられたるわれなるに、妄想なりとも情慾に、惑うて不義の奴とならば、このふたとせの艱難苦勞も、忽地泡沫と消えぬべし、われには惡魔の身に添ひて、狂はするにやあらむずらむ、……これより後は情を禁め、慾を制する工夫をせばや、と思ひつゝ又睡りけり。

嗚呼、此の忠僕も、遂に情慾のためには、犧牲となるを免れざりしか。否な猶、一片の道義は、尚身邊を離るゝこと能はざるが如し。余は讀者と共に疑はむとす。這般の裏面觀察も、何となく朦朧として、影を捕ふるが如く、確乎たる俊平が消息を知るに苦むの感なきを得ず。要するに、此の辨は、馬琴が評釋にして、俊平を疑ひたるに過ぎずといふべし。何となれば、俊平は、今迄忠義一偏にして、寸毫だも不義の證迹を示さゞればなり。

吾人は疑ふ、一時の名譽心に驅られたるにも非ず、その性と、そのそだちとによりて、我はかくならざるべからずと信じたる俊平が、俄に墮落し終らむとは。但し以後に至りては、苟くも、その影迹を現はし來らむには、その辯護すべき余地を存せざれども、今の處にては、馬琴が評の冤なることを俊平の爲に悲しまずんば非ず。乞ふ、その後をよめ。雷霆至り、驟雨至り、電光石火、目眩し耳聾する時、強風一過、更に雨雪を加ふるか、はた晴天白日の光輝を認むるを得るに至るかを知らむ。

（以下次號）

茶話それ〳〵艸（承前）

平安故木崎得玄述

孤峰菴　不羨寄稿

一室にかきこもりて。茶にあそぶこそ徒然もなく心の濁りも清まる心地すれ。

不美曰く、此の章は短くして、能盡しけり。眞の茶の本體は、此の二行の數字にて判然せり。本來無一物にて、神經の穢物を除去して悟道の本分を解し得む、一身は安全なるものなり。一家の風波はなく、親籍、及、知己友人の交際上も圓滑なるべし。豈唯茶のみならん哉。一室に籠り、茶に遊ぶ心を以て、父母に接し、心を平和ならしめば、人間として、萬物の靈故、孝の心、果して惹起せん。釜の聲音程會く、靈妙不審議の性質あるものはあらざるなり。此の階級のわかる迄は、皆讃茶をおまなびなさえまし。

一茶はおのれをつゝまやかにし。驕をしりぞけて名器をのぞまず。むさばらざらんぞいみしかるべき。むかしより、茶をよくせる人の、いやしげなるはまれなり。いにしへ、粟田の善法といひつる人は、さらに身にしたがへるたくはへもなく、手取釜一つにて、飯をも茶をもとゝのへて、（狂歌にかく、手取釜おのれは口が差出たぞ雑炊たくと人にかたるな）此の人は、珠光も、詫數奇の隨一と譽められしとなり。一貫も、詫數奇にて、茶法にもかゝはらず、器軸をも持たず、ひたすらに自分のおもむきを加へ、にじり上りの口に、新焼の茶碗をかざりて、關守となづく異風なれど、いさぎよき詫數奇なれば、時の人ゆるして、茶の交りありしとなり。是をいみじとおもへばこそ、記しとゝめて、世にも傳へけめ。

不美曰く、茶は、おのれをつゝまやかにし、驕をしりぞけて、名器をのぞまず、むさばらざ

らんぞいみしかるべき。此の段は、まことにかくこそありたけれ。己をつゝしみ、驕をしりぞくると云ふことは、平素、人の耳底に入居事なれ雖、衆善奉行諸悪莫作にて、言ふべくして、行ふ事難し。爰に注目して、眞實に茶道を學んだ諸媛等ならば、利己主義も、利他主義も、能活用して、賢母良婦となられるのは疑ひありません。粟田口善法と云人は、所謂、世の中を悟り、陶宮して、茶道を樂んで終たんであります。手取釜と云ふものも、于今、茶人社會におこなはれて居升、なんと飯も頒、又、湯を湧し、茶も點ると云は、辨理なことではありません歟。胸中清淨にして、潔き人なりと茶祖の珠光も稱美せし人なり。次に、ノ貫と云人も詫數奇にて、敢て茶法にかゝはらず、道具軸物をも不持ひたすら自分の想像をのみ專らとし、新物の茶碗を闕守とせしは、此の人一世の奇談なり。異風なれ共、江湖の衆庶、発して交際す。茶徳も、又、大ならん。世の間を悟ると云ことは、諸嬢等に必用は迂遠なるも、新婦にして、舅姑の間、風波も悟りて後、曲て隨氣せば、無利を云ふとも、其の無利は、頭上を輕く如二一風一去て安安と過往べし。

ひとり旅

鹽井ふく子

思ひわづらひぬ〳〵。いつか決起して、都に歸り止らまし。とても、母にはかしづかれず、同胞にも遠ざかり居るものならんには、都に歸へりて志したる道を、一すぢにふまゝし。我が世の限

りたわまじと師にも誓ひ、父の最期に遠ざかりしも思へど、此の道故、決氣して〳〵と、つねには思ひ居りながら、流石に、ひとり、職を辭しては、心もそゞろ、兄上は何と聞き玉はん。母上は如何にれどろき玉はん。おのれを導きたる人は何とおぼさんか。我ながらわまり心のはやさに法を失ひたり。誠は、我も、今日、只今辭せんとは思はざりき。數ならぬ身をも撰び出でゝ、高等女學校の敎の師にわてられし人の志、偏屈なる心にさばかりはいとふらん。よくこそは奉ずる心になりてくれしと、果敢なき事を兄上もよろこばれ、汝が事を聞ゆる毎に、たゞ母上が額のおしわのゝびるぞやと、こま〴〵の御文もわりしを、一言をもはからず、辭して歸へりしと聞き玉はゞ、如何に情なしとおぼさん。母上もさばかりは、本意なくきかれん。さるにても、濱田にても、日來、我がいと

ふまゝに、人には遠ざかられ、すゝまぬまゝに、人の中にも入らぬをゆるされ、しかも、我が家の奴の如く小使をも使役せさせ、敎子たちとすさび作りし作物にも、肥料ほしゝとたはぶれしまゝ、馬糞をかけくれし事もわりたり。辭して歸へる、其の朝も、校長みづから門に送り出でゝ、やさしうも、こま〴〵車夫に心づけられたるなど、人々の厚志、思へば、そゞろ、辭したる心もなし。いつぞやは、

えもやすき心地こそせね我をひき
のぼる車の如何にとおもへば

下りんか〳〵と云ひし山坂、知らぬまに越えぬ。とするほどに、車は、にはかに早くなり、さながら中空をかけるかの如く輕くなりたる。おぼろなる心にも、ふと心づかれて、思はずうしろをかへりみれば、電報配達のおとをも押して駈けるなり。

一錢の錢もあたへず、一言の禮ものべず、たゞ輕くのる事一里半ばかり。とするほどに、いつしか何處へか行きたりけん、ふりかへれど姿も見えずなりたり。世にはなほかうやうの人もありけるよとをかしさに心ゆきて、萬づのわづらひもさり、一夜を青田の旅店にあかし、翌日、未明に車夫を急がせ立ちぬ。誠は廿二日に歸るべきを堪へず、廿日にゆるされ旅立ちぬ。報らせたる日よりも、先き立ちぬれば、母も兄も思ひがけず迎ふらん。我が心のくまだになくば、如何にほこりても飛び入られんをなど思へば、又や雲かゝり來りぬ。よきは、告げずおきて、辭令下りし時、その時、にはかに人をおどろかして、そのまゝ都に上らんと、幾重の山を越えつゝ、やう／＼思案定めて家にはつきぬ。母上よと呼びつゝ入りくゞれど、思ひがけぬげに、たゞ書生のみ迎へたるばかりなり。はや、はりあひもぬけつゝ、母上はとゝへど、松江の病院におはしたり。君が明日かへるとのしらせなれば、母御にも明日午前に歸へらるゝよしにて、迎ひの書生も先きにまゐりたりと云ふ。力もぬけ、氣もくじけて、やう／＼父の佛前にはひ行きぬ。かねてもや父はあらじ、燈火をかゝげても、御姿もうつらねば、りんをうちならしても、我かど答ふる御聲もなし。あはれ、天地の何の神にいのらばか、げにうつくしき父に、又言とはん、一層此のまゝ、母上もろともに、冥土の人とならば、また父母を並び見ん事の叶はんかなど、つくづくと思ひ伏す。一間には、妹の來りたるも知らざりき。やう／＼に呼ばれて、母君は如何に、もしはみまかられしにはあらずやと、我にかくしあるにはあらずやとゝへば、否、さにはおはさねど、御身体すぐれさせ玉はねば、兄君が、いたく心を

くだかれて、君が歸りまさん折りまでにとて、松江の病院につれておはしたりと聞ゆるも、たゞ涙なりけり。さても〳〵さやうによわらせ玉ふを、など告げては玉はざりし。さやうの母をおどろかして如何で都に上ぼられん。決起せんずる心も、今は、たゞ失せて、かなしく、辭職せし事さへ忍びえで、大町に聞えしに、彼方は、たゞ笑みて、ただ、我が世を知らぬをそしりぬ。しかゑ、御身が、よく母をはなれて、今日まで、一人旅をばなしけるよ。兼ても、たゞをかしう思ひ居たり。我よきに計らはん。何事も、心にかけな玉ひそと云はるるもうれし。されど我は、たゞ何となくすまぬ思ひ、すまぬ心地、此のまゝ思ひ入り、思ひ絶えまほしう思へど、母の歸へり來れるもうれしく、くるしく、たゞよみぢの父にひたすら呼ばれん事をいのりぬれば、我から思ひわづらひて、中々に母に介胞をうくるもくるし。とても不孝の子、傍らにありしとて、いたづらに、母を煩はさんのみ。母は、たゞ、孝ある、兄夫妻が、はぐゝめば、また足れり。さりとてひとり旅、一旦事ありては、信實になぐさめいさめくるゝものもなく、至誠、人には徹せぬ不德の身もて、ひとり旅せんよりは、不法の言、又耳にひゞかぬ程に、都にかへりて、師の君の傍らに、志したる道をもふみとげまし。

　世の中はうばらからたち女郎花
　　心してさけひめ百合のはな

今も、心にとゞまる父が敎草、ひとり旅にては、おのづから氣もつよう、思ひがけず、うばらのとげだつ事もあり、女郎花のくやしき名をもとりなば、父君がかねての敎へにもゝどりぬべし。歸へらなん、〳〵、食に魚を欲するにはあらねど、出るに車を思ふにはあらねど、たゞ〳〵、

咲かでやは如何でしをれん春花と
　めぐしたゝれし親の子なれば

親の子ぞ〳〵。春花と、めぐしたゝれし親の子ぞ。あはれ、うしはもわかんばかりのあつさに、小さき船にもまれ、わざ〳〵松江に出で、人をば退けて、不束なる我をとゞめんとし玉ふ君の厚志、わだになすはつらけれど。老衰の母には殊にうしん髪ひきかへさるゝやうなれど。さるにても、濱田の教子が、我がためにうつし植ゑたるまがきの菊や、軒のすゝき、心のとゞまらぬにはあらねど、殊に男めきたる教子が、我がいさめをよろこびて、やさしうも文おこせしが、如何に生ひ行かんか。人はそしれど、我はいといつくしと思ひし教子の一人、生ひ立てゝ見まほしかりしもありけるを。さま〳〵の思ひに思ひくだけて、此處にまたひとり旅、都に上ぼりつきて、狂へるかと人に見られたるもげに、狂ひたりや〳〵。

　あはれひとり旅

なすものにはあらじ、なすものにはあらじ、必ずなすものにはあらじよ。乞食しても、夫婦つれだて、柴をとり、菜をあさりても、姉妹たづさはれ、しき島の、やまと島根に人ひとり知りてこそ、世をも過ごせ。知られぬうき世に、例へ少なく意を得、金殿玉樓をかまへ、錦衣錦繡につゝまれ、幾百の人にかしづかるゝも、一旦名譽地に落ち、位金時を失はゞ、又何かせん。しかも、高屋、鬼窺ふの世の中、高才人いとふ世の中、己ひとり高尚にし潔白に過ぎんとすれど、中には風にくしかるゝよ。時に見る人もなし。語る伴もなく、いたづらにくやしき涙を千尋の谷中にたゝゆるのみ。風は空うそぶくよ。

憂世にすまんと思はゞ鰻にもなれかし。濁江をく

ぐる法もあらん。鯰鰌にもあれかし。泥水にむせばぬ術を知らん。なまじひに人面して、世のため、國のため、ひとりつくさんとするとも、いたづらにむせびくるしきのみ。

丈夫仆れて、幾歳にして、志やあらはれけん。親をも省みず、妻をも、子をも、家をも、金をも求めず、一死を、たゞ國家のために惜みし林子平、くろがねとふみ固めたる踵も、あらがねときたへたる臑も、いたづらに脚夫のふるまひとなりはてしのみ。あはれ、稀有に見る世なかしせば、數百歳の後も、その卓見はあらはれずして、たゞ狂人、徒らに無緣の餓鬼となりはてんのみ。あはれ、おろかなりや。延元元年、正成が、敵を京師にやくするのたゞ一策、用ゐる事能はず。遂に七生の魂魄をとゞめて、一死を究めたるも、世はなほ忠義の志の至らぬをそしる。あはれ死ね〳〵、魂魄もとゞむるな。見る人のなき世、語る伴のなき世は、比干、心をさかせても、人は、遂に感徹せず。其子、誠に狂するに至るも、人は、遂にさとらじ。鍾子期死して、伯牙、終身また琴を皷せざるぞいみじき。聾者のみの世に至曲をつくしゝとて、何の甲斐かあらん。まして、丈夫にもあらず、能も拙なき女子、親をおき、同胞にはなれ、志を半ばにたち、さま〴〵の思ひに身は細りて、ひとり旅ねに衣衾をひたすとも、誰かは感せん。女子たゞ夫につれられよ。秋殺に、たゞ顔色の損ずるを惜しまるゝ。夫ならで、又、誰かあらん。夫死なば死ね、〳〵。なほ住ば、親同胞とたゞ住め。たゞ我あるをよろこぶは親なり。少しの事にも感ずるは親なり。共に我をなげくは同胞のみ。共に、我ををしむは同胞のみ。生きむ親あるほどを生きよ。住まば同胞と共にすめよ。

一茶の文

山岡螢雪

さても暑しと、帶解き捨てゝ、汗の麻衣脱ぎ更つつ、取る手遲しと、澁團扇、あふぐも、いつか隅田川、流るゝ光陰の、いと早く、庭の青桐散り初めて、秋風颯と立田姫、そむる錦に、紅葉葉を、集めて神酒をあたゝめむ、時もやうやう、近づけど、暑さは今も氷賣り、軒端に聲もたえやらぬ、今日此の頃、せめては、消夏の料にもと、古き文庫を取り寄せて、底より得たり蟲喰紙、開けば、俳人一茶の文、讀ばいよいよ、面白く、いとも、をかしき其の餘り、汗も自とひきだしの、原稿用紙取いで、蚊軍攻くる破れ窓、漏るゝ夜風に力得て、おぼつかなくも、そが小傳を、一言二言、書き添へぬ。

一茶は、通稱を、小林彌太郎となん呼び、寶暦十三年に、信州水内郡柏原驛に、生れたりしが、不幸にも、幼き時き、慈母を失ひて、あはれ、無情なる繼母に、苦しめらるゝ事、久しかりき。長ずるに及びて、自から、嗣を避け、一生を風流に送らばやとて、初め、俳諧を素丸に學びたれど、中頃より、隨齋、成美などに從ひて、其の道を極め俳趣、脫俗、洒落自から、一機軸を出すには至りたり。

今世に行はるゝ、著書「おらが春」の如き、實に、一茶が自筆の、集なりとぞ。

性いと磊落にして、王侯、貴顯と雖も、恐るゝ氣色毫もなく、嘗て、我が國、隨一の大名として、飛ぶ鳥も落さんばかりの勢威、嚴かなる、金澤の城主、前田加州侯が、出府の路次、旅のわびしき伽にもがなと、使を馳せて、御旅館にぞ召し玉ふ。

わはれ、尋常のものならんには、周章ふためきて參るべきに、一茶は、それに應ぜざるのみかは、却りて、御用の候はゞ、當方へ御座れと、平然として申し對へければ、使の士、大にあきれ、見るまに、滿面朱を注ぎたらんばかり、怒氣を含み、大喝一聲無禮者めと、罵りて立ち去りたれば、一茶直に、

不明者や嗚呼、わからずや不明者や

と口吟みて、呵々大笑したりとなん。噫、一茶は是れ、微々たる、信陽の一平民に過ぎざれども、身を風雅に委ねて、一世を睥睨し、眼中一の王侯なく、其の豪膽、其の氣慨の高潔にして、名譽の野心更にもなく、最床し。かゝる風致こそ、誰もあらまほしけれ。

一茶、素畸行多く、白晝常に提灯を点して、都大路を足にまかせつゝ、逍遙ものから、口さがなき童等は、わら馬鹿よ、狂人よと、笑ひさゝやけど夫らには少しも頓着せず、人が、如何なる爲にかと問へば、莨の火に供ふと、平氣にて答けりとなり。又、客など來りて、食事の時に至れば、早や食事の時にはなりぬ。さあ、來られよと、己先導して、もよりの酒樓などに上り、主客互に錢を出し合ひて、好むものども充分に飲食し、すめば共に、手を携て歸り、談話をつゝけだりとか。其の行、概ねかくの如し。

江戸に遊ぶこと十年餘、下谷阪本に寓居し、俳諧寺と號したり、而して、文化十一年に、生國へ歸り、こえて、文政十年、師走十九日、六十五を一期として、病て身まかりぬれば、親戚故友等打つどひて、其が鄕里妙專寺に、あつく葬りたりとぞ。

さて、文章は、あまり世に傳らねど、次の一文を讀ば、一茶が文かく、技量も大かたは推はからる

る、即ち、

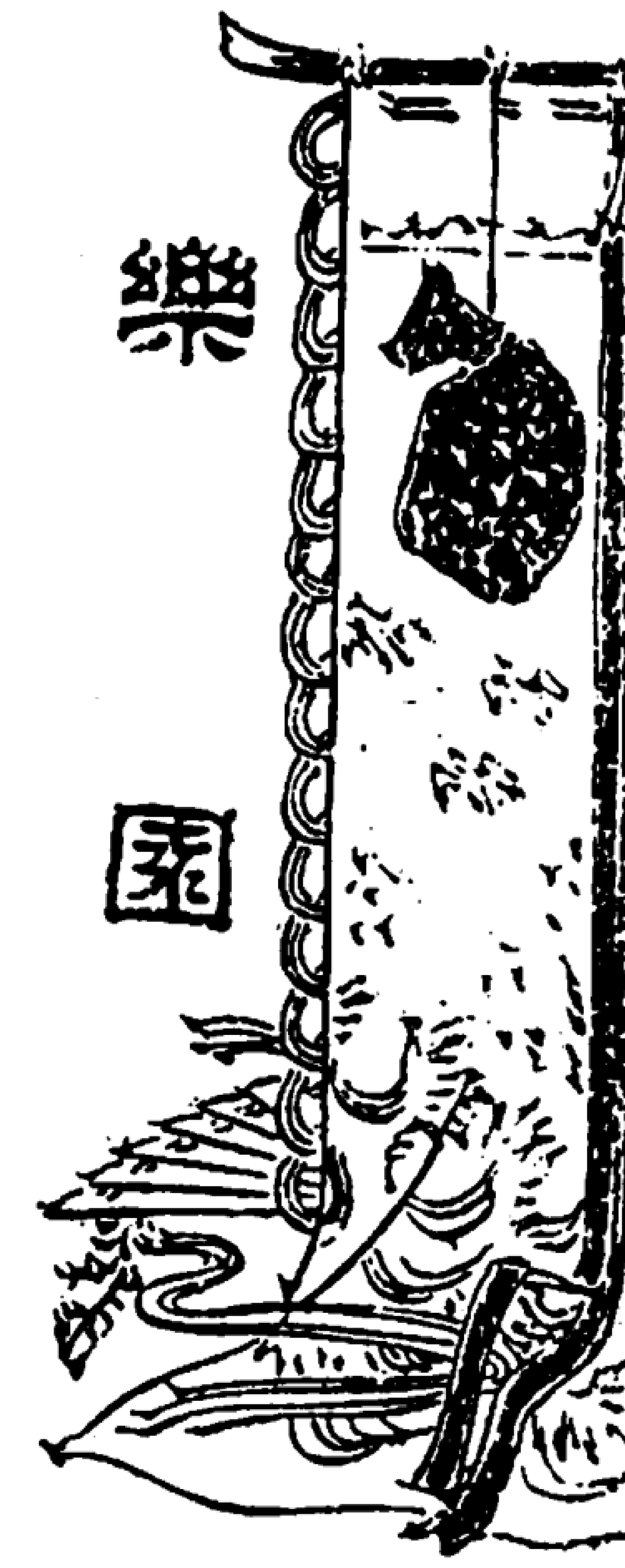
●陸奥紀行之一節

ことし、みちのくの方、修行せんと、乞食袋を首にかけ、小風呂敷脊なかに負たれば、影法師は、さながら、西行らしく見えて、殊勝なるに心は雪と墨染の袖と、思へば〳〵、入梅晴の、そらはづかしさに、今さら姿を替るも、むつか敷、卯の花月十六日と云日、久しく宿馴れたる庵を、うつろになして、二三里も歩みしころ、細杖をつくづく思ふに、おのれすでに、六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山に、かたふく命、又、ながらへて歸らんことも、白川の關をはる〴〵越る身なれば、十府の菅菰の、十に一つもおぼつかなしと、案じつめたるほどに、ほとんど心細くて、家々の鷄の時を告る聲も、とつてかへせよとよぶやうに、聞え、畑々の麥に、風のそよふくも、誰ぞまねくごとく覺えて、行道もしきりに進まざれば、とある木陰に休らひて、瘦脛をさすりつゝ、詠るに、柏原は、あの山の外雲の、かくれる下あたりなど、おし斗られて何となく、名殘をしさに、

思ふまじ見まじとすれど我家哉

古里に花もあらねど踏足の
　跡へ心を引くかすみかな。

讀み去り讀來れば、興味いよ〳〵深く、脫俗洒落の風、自から、文中にあふれ、八十年後の今日、尙よく、彼れが、磊落の性を、まのあたり見る心地ぞする。あはれ、貴孃よ、正科の學業を勵み玉ひて、腦重き後、家事をいそしみ勞れて、眠り催し玉はん頃一茶にあらぬ、茶一服めして、一讀一笑の棨を玉ひてよ。



暁風白露紀行

白松園主人

▲七月二十九日

暁天風冷やかに、瀼々たる白露は、路芝におき餘りて、朝暾の出づるには、まだ二時三時もあるらむとおぼしきころ、柴のとぼそをうち叩きて、頻りに呼びさます者あり。さてはわがをしへ子、若月生なめり、と急はしくおき出てゝ、戸をひらけば、あやまたず、旅のよそひかひ〴〵しくて、入り來れり。いとはやくも、物しつる者かな、しばし待ちねと。朝餐したゝめ終り、母に辭してたち出でぬ。

薄霽露に濡れて、穗いたく延びず、畑に生ひたてる芋の葉は、風に吹かれて、頭ふるさまは、否々といふに似たり。只見る稻田、青々として萬頃の波を寄せ、四周の山々緑こまやかなり。飛ぶは稻子か、鳴く蟋蟀、うち振る如き蛉虫の、涼しき聲に秋立ちて、桐のひと葉の散るころも、かくやと思ひなされつゝ、二人はしきりに路を急ぎて、朝日出でゝ間もなきに、既に四五里の道を來つ。佐波山峠をうち越えて、若月生の鄕里なる、西の浦にぞ着きにける。

之よりさき若月生、おのれの宿にまうきて、暑休を幸に、必ず伴ひ參らせむ。浦の苫屋のしほけぶり、いとうるさげなれど、夏はさすがに、蒼波渺茫のながめ、白砂青松のけしきも、にくうは候はず。明日よりと、そゝのかされて、俄に思ひ

立てるなりけり。日中は、その暑さ、山も裂け土も砕くるばかりなれど、大樹森々と茂りあひたる木蔭に、滾々と湧き出づる谷水を、かたへにひきたれば、涼風おのづから座下に生じて、酒を呼びて一酔を催せども、内外攻撃といふほどにもあらず。華胥のゆめさむる頃は、日已でに落ちて、銀燭のもと、更に緑酒に飽くことを得るも、皆若月生が志なり。

▲七月三十日

庭の池なる蓮葉における夕の露、秋の籬に、なよやかに姿やさしく咲き出でゝ、さはらば傷はれぬべうれもはゆる朝顔の露、稲葉そよふく風に、危ふげながらとまりたる草の葉末の露、いづれもまだ乾ぬまに、若月生、及び柳生等を従へて浦曲に出でぬ。朝の風、涼やかに襟元に通ひきて、處々にうゑなめたる蓮のにほひなど、いと心地よし。行くこと里許にして、一の漁村に出でぬ。乃ち某高樓に上りて、眺めよき一室を借りぬ。樓は直ちに波上に座して、大海の浦に對し、漁郎が網を引き、釣を垂れたるさま、煙を吐く滊船、白帆あげたる小舟など、あさびらきに、漕ぎ出づるあり、漕ぎかへるありて、實に一幅の活畵圖なり。望遠鏡をとり出でゝ、うち見やれば、青巒淡く見ゆるは豐後の山か、少女の眉ひきなすに似たり。かくて見むは興うすし。いざや續けとばかりに、余は衣を脱ぎて、躍りて海中に入りぬ。二生もつゞいて入りぬ。小舟ひき寄せ、とび乗り棹して、をちこちこぎめぐり、折から碇泊せる、某丸といふ滊船に上りて見などするうちに、正午にもなりければ、漕ぎかへりて樓上酒を呼び、二生に命じて酌を行はしむ。兼ねて、若月生が家の鹽田を見ばやとの約ありけ

れど、晝餐了りし後、岸について迂廻する事、半里にして達しぬ。生が父すでに來りて、余等の至るをまちをり。時に炎天燒くが如く、暫時も外に立つべからず。しかも製鹽業は、尤も此の炎天ならざるべからず、即ち炎天は、此の業の最大好期にして、曇天驟雨は、此の業者の尤も恐惶時期なり。されば數百の男女は、此の炎天に曝されて、流るゝ汗は、衣を絞りて、或は海水をうち揚げ、或は砂をかき、或は竈に火を燒きなど、東西奔馳、寸時の休暇なく、以て淸らかなる事雪の如き鹽を、山の如くに製出す。此の勞働者を名づけて、濱子といふ。山に居りて伐材に從事するを、山子といふの類なるべし。其の製鹽につきて、若月生の父なる人、精しく說明せられたれども、圖に示めさざれば知りがたかるべし。伊勢物語に、鹽尻のやうになんありける。"とありしは、いかなる者なりけむ。今の製とは全く異なれば、知るによしなし。

嗚呼われ、此の濱子等を見て、尤も感に堪へざりき。居る時は椅子により、團扇をつかひて、なほ暑しと云ひ、出づる時は日傘にかくれ、車を走らせて、なほ得堪へずといふ、年猶壯にして、病餘の老人めきたる者、都會の地などには男女共に、槪して多き習ひなるに、同じく人間に生れ來て、幸か不幸か、かくばかりの徑庭あらむとは。獨り、此の濱子のみならず、彼の炎天爍日を犯して、朝より暮に至るまで、田の中にかゞまりて、稻の草を取る女を見よ。蓋へる笠のすきまも溜る者かは。面の色は赤らみて、手さへ足さへ、ふしくれだちて、自然の美をも奪へども、終日營々として、維れ日も足らず。親を養ひ、夫を扶け、更に其の勞と苦とを厭はず。何ぞ、其の心事の可憐にして美なるぞや。都會の婦女子は境遇おのづから異なり

て、勢ひ此くの如くなるを得ずといへども、百姓といへば奴僕の如くに賤み、却りて、其の勤勉素樸彼が如く尊ぶべきを思はず、方今、概して、百姓に學力ある者少きにより自ら顧みて、其の位置を墜す者多けれども、彼等にして、一朝學理の域に至る者多きに至らば、何ぞ今日の如き位置に在らむや。都の婦女が、何一ッ生産のわざなきにも係はらず、農家の娘を土くさしと罵り、或は百姓女といひ、而して却りておのれが、鏡により白粉を塗り、茶の湯生花、カルタ、トランプの戯に餘念なく、益もなき談話に一日を消すをもて、高尚なりと心得ると、其の心事の優劣いづれにや。髮を大事にし、容貌顏色に心を入るゝは、いづれの女として異ならん。朝夕すうる玉篋の蓋の色も褪ず、見ては容を正しうする鏡の塵のかゝらむを悲むは、なべての女心なり。誰か、之に親むを忘れんや、たゞ家事におはれて暇なければなり。都會の婦女子に、農業をなせと勸むるにはあらじ、折にふれては田舍に出でゝ、その勤勉なる樣を見よ。夢にも思ひかけざる事のみなるべし。然らぞ少くとも、おのれの不仕末にして、不生産的なる、徒らにその綺羅を競ふことの耻づべきを知るに足らむ。故におのれは世の婦人に、寧ろ容貌調度などは、飾るといふよりも、たしなめといふことを注文せんとす。

▲七月卅一日

起き出づれば、朝日きら〳〵と窓に入りて、東天漸く赤く、先づ今日の炎暑、昨日に增さるも、劣らざるを證せしむ。本日は若月氏の家に在りて、終日飲酌す、夜に入りて涼風衣袂輕し。

▲八月一日

今朝若月氏に辭して、歸途に上らむとす、即ち酒

を出して別を惜む。近隣なるをしへ子、柳元孝の父なる人、來りて西の浦燒の陶器を贈りぬ。午前八時漸く盃を收めて起つ、若月生余を送らむとて、乘馬に鞍を置き、以て余に乘らしむ。余乘馬に熟せざれば之を辭す。生轡を取りて步して余に從ふ。歸途自ら乘らんが爲めなり。行くこと暫くにして、余之に鞍を當てんことを許す。生依りて一躍して鞍に上り、鐙をわげて馬腹を蹴れば、眞一文字に走る事四五町にして、馬を留めて余を待つ。一時間余にして、遂に三田尻町に達し、若月生は辭して轡をかへしぬ。余は友人富田氏を訪ひて、晝餐を喫し、談二時間にして、別れて出で、乘車して日沒の頃山口にかへりぬ。何が故に、本日强ひて山口にかへりしかといふに、山口の七夕祭を見むが爲めなり。即ち陰曆七月七日は、今日に當れり。山口町は、古來家ごとに、長やかなる笹竹を軒に立て、之に紅白の紙にくさ〴〵の事をかきてつけたり。之やがて、天の河なる梶の葉に習へるなるべし。さて、又數百の、小くて紅き提灯を吊し、夜に入れば、悉く、之に點火す、滿街、此くの如くなれば、遠く望めば星の林の如く、近く見れば不夜城にて、連々逶迤として絕えず、その美はしさ例へんに物なく、實に山口の一奇觀なり。余、他鄉に在りて、之を見ざる事四五年なれば、旅裝をとくと等しく出で丶見る。之を見んとて出づる人亦夥しく、町は爲めに賑へり。

（未完）

蟲ぼ志

永潛生

もとより腹はさむ强記の才もなく、去りとて、

庫に萬卷の藏あるにあらねど、風かんばしき長日の閑を、午睡に消さんよりはと、破りたる文机の裏よりかき集めたるもの、さては花に啼く鶯、水に棲む蛙に類ふべくもあらねど、せめては梢に譟く蟬とも思ぼし玉はらば、豆腐屋も通はぬ田舍の道に、氷賣の聲するよりもめつらしと、都の人達は聞き玉ふ方もあるべしや。

いつの頃にかありけん、父君の、これ見よ、久しう取り出でざりし青瓠の、かくも色附きたり、と給ひければ、とりあへずかくなむ、

あさな夕なとりなでまし丶青ひさ子
　色つくまでにち丶老にけり

○ふたつなき友の、身まかりし、知らせを得てし折から、春また淺ききさらぎの末つかたにて、早咲きの梅の、三つ二つ散りかふさまの限りなう身にしみて覺えけれど、

さきだちて世にめでられし梅の花
　まづをしまれてちりそめにけり

○同じ友の、まだ病の床にありける折、文遣るはしに、

我はしも花にもかもな朝なゆふな
　きみか病のとこにかはらむ

など、書き送りしことも、夢の樣おぼえて、

今さらに花となりても何かせむ
　みはかに匂ふ花となりても

日を經るま丶に、いと丶たえがたう覺えければ、

けふもまた若葉の影にひとりゐて
　むかししのへはほと丶ぎす啼く

亂かはしき繰言の、木蘭の花ちる蔭に、眠れる人は、いか樣にか聞くらむ。

○悲しきことのありける折、よみて、姉君の許にまゐらせたる。

わひて世にふるやの軒をこと丶へは
　雪にはゝゑむ梅もありけり
白菊のきよき香はなかく丶に
　おく霜よりやならひそめけん
打ちまとふつたのにしきのなかりせば
　老木の松は風に折れまし

○醫を學ぶ君こそ藪にもあらぬ　筍なれ、と或る友の戯れければ、

あらかねのつちをつらぬく竹の子に
　幾世かはらぬふしもこもれゝ

○秋たちける日よめる

きのふまで涼しく見えし松風の
　はやくも秋となりにけるかな

○東海道を汽車にて過ぐるに、岩屋の觀音とて巨なる巖の上に立たせ玉ふがあり。此のあたりは、打ち開きたる一面の小松原にて、かしこには小高き丘の立ちならび、こゝには澄みわたる鏡の池の影清く、さては、千代をこめたる若緑のこのもかのもに、放れ駒の戯れ遊ぶなど、さながら繪にかける樣にて、我が身も夫の栗色にてあらましかばとぞ覺ゆる。かゝる處にこそ、二頃の田は求むべけれ、と思ふにつけてもかくなん。

山青く水遠しろきこの里に
　我が父母の家居つくらん

○折にふれたる

紅の花のいろにはとげなきを
　鬼薊とはたかなつけゝむ
吹く風のあれにあらふる荒海を
　しら帆ゆたかに大船のゆく

○故里に在りて、都の友許に、水密桃を贈る文のはしに、

三千とをのものならなくに雲ふかき
　遠おく山の白つゆぞこれ

○いつの年にかありけん、望の月いと明るくてさながら晝の様なりけるつとめて、従弟なる者の、よべ寝ねがてに、月の姿三十六首を、ものし侍りぬとて、示しけれど、戯れに其のはしに、

　三十六計(景)盡き(月)はてにけり
返へしをと君給はゝ、いかにせん

とかきておくりぬ。月の御神は、いかさまにか笑ひ玉ひけん。月の光ならばまだしも、照る日の下に、汗の滴を硯にうけて、かいつけたる、むしばしならぬ、恥ざらしの筆は、一しほ可笑きふしも侍らむかし。あなかしこ。

眼鏡先生

彦峯生

(上)

善哉々々、年に似合はぬ汝が信心に愛で、祈願の趣きゝとゞけて遣さう。

といふ聲に、ハッと頭を擡げて見ると、幼い時、母よりもらひし草双紙にて、よく見覺えおいた、九郎判官義經の先生なる、鞍馬の大僧正坊様が、木葉天狗をも召連れず、何かの、大きな古株の上に、例の羽團扇をかざし、端然とかまへて御座つた。

そも、この大僧正坊に祈願を込めた少年といふのは、何者だらう。

姓名。いふ程のものでもない。が談話の順序に言うて置かう。即ち、姓は葦原、名を基風といふ。

幼にして穎悟、七歳にして小學校に入り、十五歳の時、優等を以つて高等小學を終ふ。常に好みて唐宋の文を讀み、古詩を誦す。人目して神童と稱す。と、何か新聞の三面なる今世偉人傳にでも載りさうな人物であつた。これが、英學とやらいふものを、通信教授によつて、習覺えてからは、一層、聲譽を高うした。そこで當人もおもへらく、僕の樣なものが、即ち、後々にいたつて偉人豪傑と呼ばるべきものであらうと。それより、其の偉



人豪傑になつた時には、如何しやう斯樣しやうといふ樣なことばかりを始終考へて居たが、さて、幾分か、心の底に、若しや偉人豪傑になれないやうなとでもありはせぬかと不安心におもはるゝ所もあつて、折々は、沈思て居ることもあつた。何でも、これは神の力をかりることゝ、如何いふことから悟つたものか、急に信心をはじめ、近所の神樣へ三七二十一日の日參をつゞけた、今日は、其の滿願の日にあたつて居る。

ハヽツ、かたじけなう御座ります。然樣なれば、貴坊樣が、保證うて、偉人豪傑にして下さいますか。ありがたう御座ります。



と、さすがは、世界一の人物にならうといふだけあつて、神樣の威光にもおそれず、うや〳〵しく、幾度か、御禮を申して居りました。

如何にも、祈願の通、たしかに偉人豪傑に致して遣さう。しかし、今すぐにといふわけにも相成らねば、先づ、この眼鏡を其方に授けんに。これをかけて、世間をよく〳〵觀察すべし。ゆめ〳〵怠ることあるべからず。

といふ間に、一陣の淸風吹き來つて大僧正坊を天へつれまゐッた。餘の風が身にしみると思ふとオヤ〳〵夢で、あつたのか。

と、しはれながらも、神社の前の神狛につかまつて、のびをしながら、あたりをキヨロ〳〵見まわす柏子に、御洗手水のそばに、何者か置きわすれたのだらう。眼鏡があるのを見つけだした。

ヤ、

と驚きかけよつて、無二無三に、其の眼鏡を懐中におしこみ、いくたびか神様に禮拜して、わが家に立ち歸つた、其の足どりには、早や、たしかに、偉人豪傑の態度を備へて居つたらしかつた。

（中）

葦原基風は、大僧正坊より授かりしと稱する眼鏡をかけてから、お釋迦の誕生でもあるまいに、天上天下唯我獨尊となりすました。イヤ、今年の鯨は、何故田作の樣なのばかり捕れるだらうとか、富士の山が小くなつて、尾背の芥塵の樣になつた、アーア、やがては、消えて無くなるだらうが、惜しいものだとか、と惜がつたり、不思議がつたりして居る。する處を見ると天地山川さへ皆小なりといふ意氣込であるらしい。

其の割合からゆくと、人間などは、眼にもはいらない筈だが、如何いふ風の吹廻しか。折々は、見えるさうで。

露伴、紅葉を文學者だと信じ、德富や陸や朝比奈のやうなものを新聞記者の大立物にして置く

やうな奴等のことだから、陽之助を外交家と崇め、操六を戰略家と稱へ奉るのも不思儀はない。ヲー、ジェリイあはれなる國民よ！などゝ、御丁寧にも、イキスクラメイシヨンをつけてまでの大長息を發することもあつた。



葦吹く風のそよろ位なら義理とあきらめて聞いてくれる人もあらうが、何分にも、氣焔萬丈、天地開闢以來、圖のない大法螺。あまりの馬鹿々々しさに、頓と、相手になつてくれる者もない。

しかしながら、當人の身になつて見ると、こゝが夫、非常に自分の俊傑ところであるのだ。大僧正坊から授かつた（？）眼鏡は、最初は、世間を觀察する筈のものであつたが、いつか、世間を馬鹿にするための機械になつて、最終には、其がために、到々、自分で自分を人間以外に放出したのである。サア如斯なると、人間の禮節なんどは、知らないから、失禮のありッたけ仕盡して居て、其で耻つるといふことを一向知らない。人間は、つまらない奴ばかりだと悟つたから、誰に憚るといふこともない。犬糞を汚穢がッて寄付かないのと、神佛を勿体ながッて寄付かないのとの區別あることを知らない德には、人が相手にせぬのを見て、自已は神佛同樣だと心得て居る。犬糞同樣はなッつまみなることは、實に、これ、焉ぞ知らむであるからして、自稱偉人豪傑の基風が氣焔は、ますく、其の度を高め、今は、正に、百億萬丈に

も逃して居る。

或時、豪傑、つら〳〵、伏して惟みた。自己が如斯日本で相手のない程えらくなつたのも、原因はといへば、ナショナルリイダアの一二三を讀むで見せたのが抑だ。左様して見ると、リイダアの四五はおろか、エビシイデむかりで手紙もかけば、談話も出來る、奴西洋人は、先づ以つて、えらいと言はなければならぬ。些は談せる奴もあるに相違ない。イヤ洋行に限ることだと、いよ〳〵、新潟から船で浦鹽斯徳へわたり、西比利亞を横ぎつて露京にいで、其から巴里倫動にゆき一伯林はおろか、維那でも羅馬でも、亞米利加までも荒して見ることに決心し、直に上野に駈けつけ、新潟さして出逃した。

方言集（二）

奥州岩井川岸村落の方言　高松生

父、とつつァ（下）　おとちさん（中）　おとあまン（士族）

母、おが（下）　おがさん（中）　おがあまン（士）

祖父、づんつァ（下）　おづんちァん（中）　おづあまン（士）

祖母、ばんつァ（下）　ばいさん（中）おばあまン（士）

兄、あに（下）　あんつァん（又あんや）（中）　あにあまン（士）

姉、あね（下）　あねさん（中）　あねあまン（士）

弟、しやてこ（下）

妹、いもとこ（下）

叔父、おんつァ（下）　おんちァま（中）　おづあん（士）

叔母、おんばァ(下)
長姉、れッけェね(下)　おつけェねさん(中)
末妹、ばつこわね(下)　ばつこわねさん(中)
同輩の間の敬語、しゆう、(例へば三郎を呼ぶに、さぶしゆうと云ふが如し(下)
牛の子、べごゝ(下中)
馬、まうこ(下中共)　うまこ(士)
馬の子、まつこもつこ又まつこゝ(下)
鷄、とゝこ(兒童)
日、おッさま(下)
井、えど(下中士共)
我が家、おらえ(下)
町に行て來きましやう、まつちやえつてこベッちや(下)
汝の家に行く、ききまたッつァえんから(下)あんたつァえぎやし(中)

之を賜りてもよからむ、くェづけてもえがんベッちァ(下)　こェづくれてもえげすぺど(中)これくなあッてもよくあんまえんか(士)
飯食を進むるに、御茶のまさェ(下)　御茶あがらさェ(中)　御茶あからんえィや(士)



夏露

東久世通禧

こほれてはまた結ひつゝ涼しきは
夏のあしたのたけのしらつゆ

月明らかなる夜友來り

鍋島直大

ともし火は光りなき迄てるつきに
浮かれいてゝや君は來つらん

梅雨晴　津輕承昭

梅雨もいまはとはるゝくもまより　のきのしのふに夕日さすなり

夏夜雨　竹屋光昭

雲間よりつきも見えなから降雨に　こよひわつくも思はさりけり

夏庭　水野忠敬

星か岡しはしこぬ間にはの面は　わか葉涼しくしけり合にけり

夏雲　長谷信成

鳴神のおともきこえてはそらに　くものみねこそあらはれに見

嶺松　宮地嚴夫

目にたちて高くそひえしみねの松　いく世か人にわふかれにけん

拿破崙第一世　北郷久政

放たれて千々にこゝろや碎きけん　へれなの島になみのよるひる

竹風　坂正臣

夕月の葉こしに見えしくれたけに　ふけてきこゆる風のおとかな

燭影映水　谷勤

高殿のうたけはすみてみつの上に　うつるもさびしともし火の影

滿池蓮　三輪義方

こひの子もはなちおきつる池みつを　ひとりしめたるはなはちすかな

深山瀧　近衛貞子

白雲のつねにおりゐるおくやまの　たきはおとのみ聞えけるかな

梅雨雲　鍋島榮子

日數へてふり積きたるさみたれの

はれぬともなき空のうきくも

避暑　前田朗子

日さかりはこゝにすごさん我が宿の
おほ木の蔭はわきもかよへり

月夜に船こぐかた　南郷柳子

いかはかりこゝろゆくらん月影を
乗せてとわたる海士の釣舟

暮行空に月出でたり　小池道子

夕日さす雲のはたてをまもるまに
やまのはたかく月はのぼりぬ

朝梅雨　北島以登子

今朝汲したらひの水にかたつふり
しつむもわひしさみたれの頃

夏植物　松平淑子

夏なからしたに通へるわきかせに
ちるへくゆらくにはの桐の葉

船納涼　鶴久子

いつ方に舟さしよせて涼まゝし
隅田かはらもかせのすくなき

望遠帆　中島歌子

沖遠くなるほとみえておひかせに
はしるほ蔭もうこかざりけり

稲毛日記（承前）

石榑千亦

一時間を経て、おもしろき松たてる岡のかひの窪田の末に海の見ゆるを、早幕張なり稲毛なりと喜ぶ。げに近きわたりにてはこゝなりけりと人うなづく。このわたりにておのれ

共におひ共にそだちしわが苗の
わかれ〳〵に植られにけり

稲毛より下りて、畑中の石なき道をたどりゆく。まづ目に入りしは、とげあるらしき葉の平たきに、小さき白き花のさけるが、さはにうゑられたるなりけり。顧みて何ぞと問ふ。誰もしれる人なし。いちごならむなどいふ人のありしに、奥村ぬし、これは人々のおものに日々のぼる物なりといひて、たやすくは名をいはず。人じらしのことし給ふものかなとゑんずれば、馬鈴薯なりといはるゝに、人みな驚きぬ。

道のべの小高きところ、塚あり、筆塚といふ。なつかしき名なりけり。さるにても何人のことにはなどいぶかるもをかし。

くること七八丁、岡あり、松立てり。道二つにわかれぬ。今は磯もちかゝるべしとおもへど、浪の音もきこえぬに、いぶかしみつゝ、左の方へろ高き松原がくれ、くねりたる道を辿り〳〵ゆけば、鄙にはめづらしき家二つ三つ、さてはこゝなりけりと勇む。

とろ〳〵と下りて突あたれる處、やがて主屋にして、二階は西洋風にしつらへり。右に隣れるは日本家にして、それに並びてやゝ小高き處に、東屋やうのが一棟あり。主屋の前は平らかなる庭にして、東京灣を足の下に見る。中央にいと清き水わきいでゝ堪へたり。鯉金魚など跳れり。牛乳などひやしたるは、こゝに病をやしなふ人のなるべし。この水のほとりに小さなる家あり。そこをも過ぎてのぼる。庭をおきてはみな松林なり。汐風やつよからむ、皆陸の方に曲りたてるさま、土佐風の畫を見るが如し。はなれたる處、鱗雨亭とかきし額かけたる家に導かる。この館中見はらしよきこと、第一なるべし。

長髯の人まづあり。煙草くゆらしつゝ、新聞など見

てあり。見れば山崎ぬしなり。前の汽車にて來りしなりといふ。

又六歌仙になりぬと人よろこぶ。

水とほくひきて、はるかなる干潟の奥の青く澄みわたれるに、白帆の三つ四つ二つつらなりゆく、はなれゆくおもしろし。今少し近からましかばなどいふは慾なるべし。

なぎさのゝ樂しきまとゐ待つけて
　また來む春もともにあそばむ　岸子

われも人も打ゑみつゝはありながら
　同じこゝろにかなしかりけり　信綱　貞三

ひるけものして、松かげ縫ひありくあり。濱邊に下るもあり。碁などもてあそぶもあり。歌しぬぶ人、見とり畵かく人、六人六色なり。さるほどに、時あまたゝちにけむ、ふと海の面を見れば、いつのまにか、干潟は名殘なくうしほとなりて、遠く浪なきこと、池のごとし。それを松ばらごしに見わたしたる、又ことなり。

君をおくる物のねならし浪のおと
　まつのひゞきも世の外にして　千亦



雜報

●沼津御用邸御增築　東海道沼津の牛臥の內灣に添へて、宮柱いかめしく作せたまへる、東宮殿下の御用邸は、從來のまゝの御宮にては、足はぬ所もあり、裝飾も、極めて、質素を旨とせられしが、來ん冬季御避寒の時迄に、妃殿下の御殿をも、御新築あらせらるゝ筈にて、經費は、十七萬圓の豫定を以て、御增築中なるが、內部の御裝飾も、

こたびは、稍々面體を改めらるゝ由承はる。

●東宮妃殿下御參內　日光田母澤の御用邸に、御避暑中の東宮妃殿下には、こたび九條老公病氣に付、御見舞の爲め、いにし廿六日頃御歸京あらせられ、廿七日午前十時頃吉見御用掛、御同乘、女官數名、御隨從にて、青山御所より、宮中に御參內　兩陛下に御對顏あらせられし、同十一時五十分、御退出あらせられたり。

●黑田伯薨去　樞密院議長正二位勳一等伯爵黑田清隆公は、久しく坐骨神經痛（俗稱中風）に惱み、近頃やゝ快き方なりしに、去十三日より、再び、局部に疼痛起り、廿三日夜八時頃俄に急性腦膜炎に變症して、竟に薨去せられたり。これよりさき、　兩陛下より岩佐侍醫を遣はされ、又、葡萄酒一函交肴一臺を下し賜はり、且つ左の御沙汰を下されたり

樞密院議長陸軍中將正二位勳一等伯爵　黑田清隆

特旨を以て位一級被進（叙從一位）

伯は、舊薩摩藩士にして、天保十一年十月十六日鹿兒島に生れ、了介と稱す。父は清行といふ。萬延元年三月家督を相續し、爾來藩主に從ひて、屢屢、上京し、英國船鹿兒島に襲來の時は、防戰の功を以て、金若干を賞與せらる。又島津三郎に扈從して、上京し、在京年を經、主命を以て、屢屢京都より藝長の間に往來し、軍賦役見習となり、歸國の際、日向國幕府領の民蜂起し、佐土原藩士某を暴殺するに會し、出張處分を命ぜられ、次で軍監、及び、參政を命ぜらる。明治元年正月三日、命を奉じて、伏見淀鳥羽各處に於て、賊軍を追擊す。軈て、奧羽征討に際し、九條左大臣の參謀となり、次で、北越征討參謀に轉じ函館追討に付、亦清水谷中將の參謀となり、凱旋の後、外務權大丞

に任ぜられ、賞典祿七百石を賜ふ。身に代へて榎本武揚氏等の命乞を爲せるは、皆人の知る所なり夫より兵部大丞に轉じ、三年開拓次官となり、樺太に出張し、全權を以て處措する處あり。次で歐洲、及び、支那に遣はされ、四年六月歸朝したり。七年陸軍中將となり、參議開拓長官に兼任し、八年千島に出張し、其の年末特命全權辨理大臣として、朝鮮に遣はされ、九年三月歸朝、使命を全うし、新に條約を互換したる功を嘉賞せられ、特に勅語及び金二千圓を賜はりぬ。是れ所謂江華島事件にして、井上伯、之が副使たりき。十年柳原勅使に副として、鹿兒島に出張し、又征討參謀となり、八代に向て、賊の背後を衝き、熊本城聯絡の功を奏したるを以て、特に勅語を蒙り、鎮定の後、更に勳一等旭日大綬章を賜はりたり。十一年、浦潮斯德、及、樺太に出張す、十五年一月參議開拓長官を免じて、内閣顧問となる。有名なる開拓使官有物拂下事件の結末なると、亦人の皆知る所なり。二十年農商務大臣に任じ、翌年四月内閣總理大臣となる、大隈伯を以て、外務大臣に薦む乃ち、二十二年十月總理大臣を罷め、樞密顧問官に移れり。其の後遞信大臣となり。二十八年樞密院議長に轉じて、尙ほ、内閣に列し、爾後内閣更迭の過渡に當りて、四たび總理大臣臨時代理、若くは、臨時總理大臣たりき。卅一年六月、内閣班列を免ぜられ、爾來樞密院議長のみに專任して、以て、今日に至れり。豪壯質朴、屢〻、奇行を市井に傳唱せしめしが、近年、齡と共に、漸く老いて多く病を養ふに專らなりき。享年六十一、恰も還暦の年に當りて、不歸の客となれるこそ悼ましけれ。

●故陸奥伯夫人の逝去

故陸奥宗光伯の夫人亮

子は、明治三十年八月伯に後れてより、鬱々樂まずしてありしが、本年二月頃感冒に罹り、其が遂に肺患と變じて、去し十五日、遂に、鬼籍に上られたり。三年後の同じ月といふも奇なり亮子の實父は、播州龍野藩士金田鄙とて江戸留守居役を勤めし人なるが、家不幸に不幸を重ねて、亮子は、遂に憐なる淵に身を沈めけるが、奇縁ありて、當時浪人なりし、陸奥氏の後妻となり。艱難苦楚を共にしたる、後伯爵夫人の榮を得るに至れり。一たび賤しき業を身にとりたるに關らず。よく內助の務をつくして、故伯を幇助したるは、なみ〱の婦人に非るを知るべし。今、其の逸事の二三を揭げん。

夫人の嚴格なる態度、云ふまでもなきことなるが、一たび身を狹斜に沈めたるを、いかにも殘念に思はれ、常に其の身の爲めに良人の名譽を損することなきやうにとのみ心掛られたりと。されば、昔覺えし管絃なども、結婚以來手だも觸れざるのみか、此等の席に列なることさへ避け、芝居など二十年間、一度も見物に赴きし事あらずと。

其の逝去せし少し前のことなりき。岡崎邦輔氏夫人の令妹が、某家に緣付きて、一日夫人を訪問したる折、夫人は令妹に向ひ、「貴女は今丁度小學校を出で丶中學にお這りなされた所で、これから卒業するには、中々長い間です。妾の樣にから髮を切つて始めて卒業するのですから、此の長い道中には云ふに云はれぬ艱難辛苦を甞めねばならず。妾の樣になる迄は、決して樂は出來ませんよ…………」と物語りしとなん。

夫人は昔が昔なれど、左程深き敎育のある筈はなけれど、凡て、婦人の心得べき諸藝は一通り嗜み、學問は陸奥家に來りし後勉强せしが漢文は、「日本

外史位なればヤット解りませう」と自身にて言はるゝ程にて、其の程を知るべきなり。英語は、最も長所なるが、交際家丈に、佛語の心得もあり。此等は伯に隨うて、米國に赴きし時、彼地にて修業せられしものなりと。

▲葬儀　當主廣吉伯は、米國に在任中なれば、其の歸朝を待ちて、葬儀を執行する筈なるも暑氣の候なれば、故伯の遺子ふゆ子孃が喪主となり、去し十九日自邸出棺、淺草松葉町海禪寺にて、葬式を執行せられたり。又、遺骸は日暮里にて、荼毘一片の煙となし、同寺先塋の側と、大阪天王寺旭ヶ岡なる、故宗光伯の側とに分埋する筈なりと、

▲陸奥邸の吊問者　逝去以來、伊藤侯爵夫人を始め、吊問者、非常に多く、古河市兵衞、中田敬義、岡崎邦輔氏等、專ら葬儀の事に斡旋せられたりと。

●報國の志　病院船博愛丸の看護婦は、皆、赤十字社にて養成し、今回の事あるに方りて、召集したるものなるが、平素船に馴れざる所より、船暈に苦しむもの多けれども、何れも、義勇奉公の赤心を以て、負傷者を看護し居れり。此の程木村大尉同地に赴きしに、其の居間の前面は、看護婦の集會所なりしが、彼等は、此處にある時は、或は頭痛にて頭を押へ、或は吐瀉して、唸き苦しむなど、殆ど病人に異らぬ程なるが、船中を奔走して、負傷者を取扱ふ時は、忠實しく立働きて、親切に介抱し、さながら、其の身に苦痛のあるを知らぬ樣なりし、此の有樣に大尉は見かねて、少しく休憩せよと勸めしに、彼等は、之を謝して、妾共、女の身に生れて、男兒のやうに國に殉ずることと出來ず、されど、幸にも看護の職にあれば、之にて聊か國家に酬んと存ずるなり。今日國家に酬い

ずば、何時か、又酬ゆべき時のあるべき。些しの船暈杯、何程の事も候はずとて、相變らず苦しさを忍んで、事に從ひ居たれば、大尉は、其の言葉に感じて、再び制めざりしと。

●鈴木きち子孃　私の榮華の爲には、千金をもをしまざれども、公の事には、一錢をだに吝む今の世に、いと殊勝なる人こそあれ。宮崎縣東臼杵郡岡富村大字岡富甲五十一番戶鈴木才藏氏の四女きち子は、去にし二十七年、同縣延岡女兒敎舍を卒業して、翌年以來同寮の敎師を勤むる中、日清の戰爭起りたれば、同寮を去りて、日本赤十字社兵庫支部の看護婦生徒となり、一意專心研磨したりしが、不幸にも病氣に罹り、恨を呑んで去七月三日、二十四歲にて歸らぬ旅に赴きぬ。其の臨終に方り、父才藏氏の手を握りて、妾不孝にして父君に先立ち、國恩の萬一を報せんと思ひし志も果すこと出來ず、願くば、葬儀の費用を節して、其の餘りを赤十字社救護費の中へ寄附し、下さらば、死後の榮譽、此上もなしと遺言したれば、才藏氏は、其の言を守りて、金十圓に、其の由を書き添へて、去十一日日本赤十字社へ送達方を同縣支部へ申出たりとなん。

●奇特の婦人　三河原田常四郎の妻、さく、資性溫厚歸嫁以來、能く夫に仕へ、且つ父の眼病に罹りて、明を失し、中風にて病歿するまで、二十餘年の久しき、獨力看護と家政に任じ、隣佑、其の篤行を稱せざる者なく、縣知事亦金を賜ひて、之を賞せりとぞ。

●可憐の女生　肥後小島町小學校四年生島津チエ、天資柔順昨年母の不治の難病に罹り、坐臥の自由を失ひしより、自ら炊事、及び、看護に任じ、父をして、內顧の憂ひなからしめ、父の稼業に出

てし後、母に乞うて昇校し、學術操行同級生徒の模範たりと。

●婦人の赤誠　大分縣中津鈴木某の長女きくえ子、日清戰役以來、感ずる所あり。貧しき中より、一日一錢宛を貯蓄し、其の額既に十餘圓に及びしに、偶〻北清事件起り、我兵士の負傷して歸還する者多きを聞き、自ら乞うて看護婦たらんとせしも、老父の病に臥せる爲め、意の如くならず、先づ貯金中より、十圓を赤十字社に納れて、社員となれり。

●また　横濱の紳商小野光景氏の實父、同兵助氏が、八十三才の高齢にて、郷里なる信州上伊那郡小野村に病歿したりしが、兵助翁は、頗る、篤志の人にて、從來小野村には尋常小學校のみにて、高等小學校の設備なく、村内の父兄は、頗る、不便を感じ居りしが、翁は、之が爲め己が歿後葬儀の費用を節せしめ、高等小學校を設けたしとて、其の敷地二千坪の校舍の新築費とを寄附したることあり。又、去し二十二日、横濱に於て執行せし葬儀も、極めて質素にして、之れが冗費を省き、横濱市窮民救助基本金として、金二千圓を市に寄附せしと。

●救護費の寄附　攝津國神戸市榮町二丁目十二番地寄留、清國人麥少彭は、曩に年醵金、一時に二十五圓を納め、終身正社員となりしが、今回救護資として、百七十五圓を寄附し、又、臺北縣大稻埕港邊後街三十三番戸、勳六等李春生は、臺北支部救護班經費中へ、金二百圓を寄附せし趣、村上支部長より佐野本社長へ申告せりと。

●學生の美譚　宮城農學校獸醫科卒業生、阿部源助、幼にして、父を亡ひ、母弟と共に零落し、屢次飢渇に瀕せしも、堅忍撓まず、遂に獸醫科を

卒業するに至れり。今回ジョルダン博士仙臺に遊ぶに及び、其の旅館を訪問し、自己の經歷と志望とを述べしに、博士は、痛く之を感じ、其の本國に伴ひ還り、スタンフォード大學に入校せしめんことを約せりとぞ。

●美擧　陸前世田米村の遠藤友治、村内大股尋常小學校に通學する數十の幼生が、日々三里餘の遠路を昇降し、時に雨雪のため、難澁せるを目擊し、自ら巨資を投じて、附近に一棟の寄宿舍を新築し、之を村内に寄附し、兒童を收容せしむ。

●老人會　靜岡縣相良町、太田政藏年九十八、强健、壯者も及ばず、自ら發企人となり、自宅に老人會を開く、會する者十二名、此の年齡合計一千十七、最も若きは、六十七歲なりとぞ。

●貞女　（小竹園主人報）女鑑第百九十六號の雜報に殊勝なる婦人さある、熊本縣菊池郡　城北村大字木野の内村ツナに、熊本縣知事よりの褒狀を寫して、女鑑に

熊本縣士族内村二三妹
ツ　ナ

明治六年内村金衞に嫁せし以來、能く貞節を守り、夫、金衞、去明治十六年病に罹りしより、家計益益衰ふるや、看護の傍、餘暇を以て、蚊帳布を織り、或は、草筵を編み僅の賃錢を得て、家計を支へ、夫金衞は、同十八年遂に死去し、爾來三人の幼兒を養育し、追善供養怠らず、且近隣の交誼を厚くする等茲に十五年の久しきに及び候段、奇特に候事

明治三十三年七月九日

熊本縣知事從四位勳三等　德久恒範㊞

●小學校令　此度小學校令は、改正せられたり。其の中に、以前と更りて、必要なりと思ふふしの一二をあぐれば、

一、讀書作文習字の三科を合して國語の一科目とせられたる事、

二、教授時間を減じ体操を必須科として最も兒童の体育に重きを置かれたる事、

三、授業料の全廢を本旨として義務教育の國家的事業たることを明にせられたる事、

四、教員優待の歩を進められたる事、

五、漢字節減の標準を公表せられたる事、

●假名と漢字　小學校に於て教授に用ふる假名及び、其の字体左表第一號表に、字音假名遣は、第二號表、下欄に依り、又漢字は成るべく、其の數を節減して、應用廣きものを選ぶべし。尋常小學校に於て、教授に用ふる漢字は、成るべく第三號表に掲ぐる文字の範圍内に於て之を選ぶべし。

（小學校令施行規則第十六條）

第一號表

平假名	片假名
あいうえお	アイウエオ
かきくけこ	カキクケコ
さしすせそ	サシスセソ
たちつてと	タチツテト
なにぬねの	ナニヌネノ
はひふへほ	ハヒフヘホ
まみむめも	マミムメモ
やいゆえよ	ヤイユエヨ
らりるれろ	ラリルレロ
わゐうゑを	ワヰウヱヲ
ん	ン
がぎぐげご	ガギグゲゴ
ざじずぜぞ	ザジズゼゾ
だぢづでど	ダヂヅデド
ばびぶべぼ	バビブベボ
ぱぴぷぺぽ	パピプペポ

第二號表

從來用ひ來れる字音假名遣		新定の字音假名遣
い（あ行及や行）	ゐ	い
う（あ行及わ行）		う
え（あ行及や行）	ゑ	え
お	を	お
か	くわ	
が	ぐわ	

か が　從來慣用の例に依るも妨げなし

け　くゑ　け
げ　ぐゑ　げ
じ　ぢ　じ｝従来慣用の例に依るも妨げなし
ず　づ　ず
いゆ（いハあ行及や行）　ゆ
あう　あふ　おう　わふ　をう　おー
かう　かふ　こう　こふ　くわう　こー
がう　がふ　ごう　ごふ　ぐわう　ごー
さう　さふ　そう　そー
ざう　ざふ　ぞう　ぞー
たり　たふ　とう　とー
だう　だふ　どう　どー
なう　なふ　のう　のー
はう　はふ　ほう　ほふ　ほー
ばう　ばふ　ぼう　ぼー
ぱう　ぱふ　ぽう　ぽー
まう　もう　もー
ゆう　いう　いふ（いハあ行及や行）
やう　よう　にう　にふ
（にハあ行及や行）
らう　らふ　ろう　ろー
きやう　きうよ　けう　けふ　きよー
ぎやう　ぎよう　げう　げふ　ぎよー
しやう　しよう　せう　せふ　しよー
じやう　じよう　ぜう　じよー
ちやう　ちよう　てう　てふ　ちよー
ぢやう　ぢよう　でう　でふ　じよー

にやう　によう　ねう　ねふ　によー
ひやう　ひよう　へう　ひよー
びやう　びよう　べう　びよー
ぴやう　ぴよう　ぺう　ぴよー
みやう　めう　みよー
りやう　りよう　れう　れふ　りよー
きう　きふ　きゆー
ぎう　ぎふ　ぎゆー
しう　しふ　しゆー
じう　じふ　じゆー
ちう　ちふ　ちゆー
ぢう　ぢふ　じゆー
にう　にふ　にゆー
りう　りふ　りゆー
あむ｛其他語尾ノ撥音ニむんヲ｝あん
あん｛區別スルモノ皆之ニ準ス｝

備考　本表は平假名を以て示したりさ雖も片假名を用ふる場合も亦同じ

第三號表

「一」一七三上下不丈世並丁丙「丨」中「丶」主丸「ノ」久之乘
「乙」九亂乳乙也「亅」事「二」二云五互丼「亠」京交亡商「人」人
今仕他付代以仰件任伏休伐伯伺但位住何作使來 例供依便係
促俗信修俵倉個倍倒候借催傳傷假 保儀働似倹侮倖低仁令健
催僕伴俄佛僞偽佳倦備傾僧像併仲傘側伸佐侍 優「儿」元兄先
兎兒充光「入」入內全兩「八」八公 六共兵其具兼「冂」再冊「冫」
冬冷涼「几」凡「凵」出「刀」分切列初別利到前則劃刻刃刀券判
「力」力功加助勉務勝勅勇勞勢勸劣動「勹」勺匁句包「匕」北

化「匕」匹區「十」千升午南卒「卩」印危卷卯卸「厂」厘原原「厶」
去參「又」叉及友反取受叔「口」口古只可右各合同名向君否呈
吾吳告周味呼命和品 問善單器叶吉善 召吸吹唱 史后吏吐鳴
「囗」四因固國圓圖圍團圖「土」土在地坂坐坪基堪垣塌墓
壁増器垂均堅報堤堂城境堀塗壩「士」士壯壹壽變「夂」夏「夕」
夕外多夜夢「大」大火夫失奉太奧奮 央奇「女」女如好妨妻姉
妹始委娘婦姓妙嫌妃姿姫「子」子字存孝學孫「宀」宅守安官定
宜客室宮害家宿寄富察實寒寶寫審容宗寬「寸」寸寺專尊尋對
將封導射「小」小少尚「尢」尤就「尸」尺居屆屋尾層屆屬局尼
「山」山岡岩岸島崇崩「巛」州巡川「工」工左巧差「已」巳「巾」巾
市布常帳帝師帶帆幅幣希帽「干」平年幸幹「幺」幾幼「广」店府
度廣庭底席應廢「廴」延建「廾」弊「弋」式貳「弓」引弟張強弱弓
「彡」形影「彳」得彼後役從御微往待復徒德「心」心必忠思情意
慶應悪愛憐戀忍志忘忙念怨急性怨恐恭息 悔悲惑愚慈慰慶懼
快怒恩 慣怠恥 惠忌感惜 悅慾「戈」成我或戒戰「戶」所戶扇
「手」手扱折招持指才投承批拜拾捨授掛推揭損打拔接拂振挾
捕捌掃揃 抱押「支」支「攴」收政故教數改散敬敵救放敗「文」
文「斗」斗料「斤」斤新斧斷「方」方於施旅族旗「日」日明是時旨
春昨智曆晝晚暑暮早暇 昔曜暖易晴 晏暴最星暗「曰」書會最替
冊「月」月朝有望期服「木」木本東業末 末村果校株根械樂機橫
檢札查朱枚染植架樣柔松板材林枝柱桑杉森桐梅極橋梨桃東柄
杯椀枯机杖枕棒桶櫛「欠」次欺歡歐欲「止」止正此步武歲歸
「歹」死殘「殳」段殺殿「毋」母每毒「比」 比「氏」民「气」氣「水」
氷水決治法注消清減渡滿求活流海深淺源油泉波涌洗添港 湯
溫溝漁濱漸潔資池漆汽瀨河濕汝泣汁汲湖濟潮沖沈濁浴「火」
火炭灰無然照燈營畑烈災燒熱熟烟點煮「瓜」爭爲爪「父」父
「片」片「牛」牛物特牧「犬」犬犯狀獸狹猫狩狂「玄」玄「玉」玉

現理球王「瓜」瓜「瓦」瓦瓶「甘」甘甚「生」生產「用」用「田」田由
申男町界 畝留略番當畫甲畿「疒」病痛療「癶」登發「白」白百
皆的皇「皮」皮「皿」盆盛盜皿盃盡「目」目直相眞眼睦眠省「矢」
矢知短「石」石破砂硯磨砲「示」示神社祖祝禁禍福祭禮「禾」私
秋租稅種秒稻稗積穩移程穀從「穴」空穴窓「立」立產端競「竹」
竹第等笑筆答算箱節築籍籠箋篤「米」粉精粗粟糖粒「糸」系約
紡紙級線細終組結給綿締總縣繁絹縫織績縮紅紫絲縱 紺繩紀
緒「缶」缺「网」罪罷置「羊」羊美義「羽」羽翌習「老」老考者「耒」
耕「耳」耳聞聲「肉」肉肥育脊胸能腦腹肩背臟「臣」臣「自」自臭
「至」至致臺「臼」舊「舌」舌「舛」舞「舟」舟船般艦「艮」良「色」色
色「艸」花芽 苗若苦茶草荒荷菊英菜落葉著葬薪藥藍 蒸萬藝
「虍」處「虫」虫蜂螢蠶「血」血「行」行術「衣」衣表哀袋被裁裏
製補「西」西要「見」見規親「角」角「言」言計訓記設許詔評 試
話認辭語誠說誰調談請論 諸謝護證警譯議讀讓課 變講 詩識
「谷」谷「豆」豆豐「豕」豚「貝」貝負貧財貧貫貴貯貸買貸賀貿賃
資賊賜賞賢寶賤質賴貨贈赤「赤」赤「走」走起越趣「足」足跡路「身」
身「車」車軍載輕轉軒「辛」辭「辰」農「辵」込近迎返述迷追退送
通速造 連進遊運過道達遠遣適遲選遺避週辻邊過途「邑」那
郵都鄉部「酉」酒配酢醫醬「里」里重野量「金」金釜銀銅錢錨鍬
鎌鉛釘針鋤鋸錦鑑鍋鐘鏡鉢 釣銃鐵「長」長「門」門閉開間 關
「阜」防附限陞院降除陰隊際隣險陽陰陶階陸「隹」雀集雁雜難
雞「雨」雨雪雲雷電需露震「靑」靑靜「非」非「面」面「革」革鞍
靴「音」音「頁」頃頂順預頭題顏額類願傾「風」風「飛」飛「食」食
飲飯飽飾餅養餘「首」首「香」香「馬」馬騎騷驚驛藍「骨」骨體
高「髟」髮「鬼」魂「魚」魚「鳥」鳥「麥」麥「麻」麻「黃」黃「黍」黍
「黑」黑「鼻」鼻「齒」齒齡

備考　本表の漢字中略字にて廣く通用せるものは之を使

用するも妨げなし
人名地名及本表に掲げざる物名等にして特に漢字にて示すべき必要あるものは之を加へ授くるも妨げなし

●英國兒童の思想一斑　こは萬朝報の傳ふる所なり。昨年の十二月英國のアール、バーヌと云ふ人が、同國の小學校に於て、三百二人の男兒と二百八十九人の女兒とに對し、作文時間に、

一、あなたがたは大きくなつてから男の方がよいと思ひますか、又女の方がよいと思ひますか、其れは、又何ういふわけです。

○第一問に對する男兒の答　は凡そ、之を五種に分つを得べし。

第一、女子たらん事を望むもの（三百二人の男兒中只二名あるのみ）

「私は女になりたい女程らくなものはありませぬ婦禮して亭主の給金をみんな貰つて自分の好な事に遣ひますさうして亭主が遅く歸つてくれば叱つて遣るので女程面白いものはありませぬ」

「女と云ふものは始終うちに居て何にもせずに只めかして居ればよいのですが男は隨分あぶない事なんかして働いてばかり居なければなりませぬから私は女の方が善い」

第二、單純なる思想を有して己れの性を可とするもの八名あり

「私は軍人になりたいから男がよい」

「私は勳章が貰ひたいから男の方が都合が善いと思ひます」

第三、眞面目なる考を有して己れの性を可とするもの（一割五分を占む）

「男は國の爲め女皇の爲め戰爭に行つて功をする事が出來るから善い」

「早く大人になつて國に盡し英國の名を世界に輝かしたいと思ひます」

第四、家族的愛情の爲に己れの性を可とするもの（極めて少數なり）

「男は働いてお金を儲けてお父さんやお母さんに樂をさせる事が出來るから善い」

「私はたんと金を儲ける男になつて嫁なんかに仕事をさせなくて善い樣になりたい」

「うちの人に樂をさせる樣に給金を澤山貰ふ男になりたい」

「私はうち中の人を毎年海水浴につれて行ける樣な人になりたい」

第五、利慾の點より己れの性を可さするもの（全數七割六分を占む）

「男は女より金が儲けられて自分の好な事は何んでも勝手にやれるから善い」

「女は子供でもあるさ子供の泣いたり喧嘩したりする世話で苦しんでばかり居ればなりませぬ女ほど詰らぬものはありませぬ私はどうしても男が善い」

「女は内に居て詰らない事ばかりして居なければなりませぬ男は何處へでも出て歩るけるから善い」

「男は何んな遊びでも出來るし會へ行つたり何かして政治の世話をやく人などは働かなくても錢が儲かるから善い」

「女は毎日同じ事を繰返し〳〵して居ますが男は何時でも變つた事ばかりするから樂みが多くて善い」

「女は赤坊を内に置いて外へ出る事が出來ぬ出やうさ思へば連れて行かねばならぬ男の方が餘程樂で善い」

以上男兒の回答　略言すれば、殆んど皆男性を可とするものにして、男性の利益と、女性の不利益とを熟知せるが如くなれども、女兒に比較して、男兒中には、公平なる考を有し、愼重に、此の問題を究めんとするも　は、極めて少なし。これ

十一歳より十四歳迄の年齢にては、男兒は、一般に粗暴なる思想を有し、女兒は、最早大人びたる思想を有するが爲にして、寧ろ當然の事なるべし。

○第二問に對する回答　男兒は、大抵皆戰爭熱に浮されたる氣味あれども、女兒は、天性の文學的美術的思想を離れざるもの多きが如し。而して女兒の望む理想的人物は

第一、**フローレンス、ナイチンゲール**（一割五分を占む）

「大膽で勇氣に富んでる人だから」

「自分の爲より人の爲を思つた女だから」

「病兵を能く看護したから」

「親切で柔しい人だから」

第二、グラッドストーン（一割五分を占む）

「英國の爲になる事をしたから」

「愛蘭の乞兒を可愛がつたから」

「賢くて學者だから」

「私は女で理想さする人がないからグラッドストーンの樣な眞心のある人を一番善さ思ひます」

第三　女皇
「一番貴い人だから」
「金が澤山あるから」
「自分の好な事が出來るから」
第四　グレース、ダーリング
「女で人の命を助けたから」
「勇婦だから」
第五　シエーキスピーア
「立派な詩を作つた人だから」
「世界中で一番えらい考を持て居た人だから」

二、あなたがたの見たり聞いたりした人の中で、どの人になりたいと思ひますか、何せ、又其の人になりたいか。

と云へる二問を試み、其の回答を求めたりしに、カゼリン、ドッドと云ふ、一女教師は、又其の回答を解釋して、ナショナル、レビユー雜誌に掲げたり。國情を異にし、人種を異にせる英國兒童の思想を知るは、興味ある事なれば、左に其の大要を譯出せり。

此問題を課したる時は恰も南阿戰爭の開始せられたる際なりし故一は以て兒童の愛國心の如何を試驗し又一は女兒と男兒との間に於ける思想の異同を知らんが爲なりしなり此目的に供せられたる兒童は年齡十一歲より十三歲までのものにして多くは上流社會に屬するものなりき

○第一問に對する女兒の答　は凡そ之を七種に分つを得べし。

第一、自己の性を可とし極めて堅固なる思想を有するもの
(こは勿論極めて少數なり)
此種に關する回答の例
「私は女が善いと思ひます何ぜなれば女は男より情が強いから」
「女が善い其譯は男より氣が強くて何んでも男より早くします男はお酒なんか飮んで餘つ程頓間です」
「女が善い男は下らない話ばかりして居ますが女は始終何か爲になる仕事をして居ます」
第二、温良なる性質にて女は女性を好むを當然なりとするもの
此種に屬する回答の例
「神樣が私達を造つて下さつたから私達は女が善いと思ひます」

「私は神様の造つて下さつた通り女になつて喜んで居ます

第三、男子たるを希望するもの（此の如きもの三割四分なり）

其例

「私は男に成りたいと思ひます男なれば軍人になつて國の爲に働く事が出來ますそしてえらい人になれますが女はそんな事が出來ないので悔しう御坐いますおまけに男は働いて女を養つて吳れますが女は男を養ふ事が出來ませぬ」

「我は男になりたい男なら軍に行つて方々國を取つたり何かして國の爲になる樣にします」

「私は男が善い男は女より貴いものでもつと役に立ちます」

「男は女より心配がなくて善いと思ひますそれでも女聖の樣な人になれゝば男よりも善いと思ひます」

「男は朝起きて御飯をたべて外へ出て行つて晩の御飯の時に歸つて來てあとは烟草をのんで寢るばかりですから男の方が餘つ程氣樂で善いと思ひます」

「男は何んな事でも出來ますけれども女の仕事にろくな事はありません私は男大贊成です」

「女は給金が少なくて仕事をしても詰りませぬ男は財産を分けて貰つたり何かして女よりごくですから我は男が善い」

第四、女子として社會の爲に働かんとするもの（殆んど二分の一を占む）

其例

「女は看護婦になりて軍の場所へ行けるから我は女が善いと思ひます」

第五、男の生活を煩はしとして快樂を求めんが爲に女たるを希望するもの（三割に當る）

其例

「男は色々の仕事をして働かねばなりませぬが女の役は子供の世話ばかりで樂で善いと思ひます」

「女は夜會や舞踏會なんかに呼ばれて面白い事ばかりありますけれど男は始終働かなければなりませぬから詰りませぬ」

「男は石炭を搬つたり溝を浚へたり靴を磨いたりごみを集めたりしなければなりませぬが女は奇麗な着物を着て買物なんかに行けますから女の方が善い」

其の他ウエルリングトン、ネルソン、コルムバス、ナポレオン、及びブルラー（征杜軍の指揮官）等を選ぶものあれども、少數にしてヘマンス、ブラウニング、ゼーンデーラー、エリザベツク等の女文豪を選ぶもの多し。エレンテリイ（女優）、パツチー（唱歌者）を貴ぶものも亦少からず、

男兒の理想的人物は、前述の如く、大抵軍人なれども、女皇を可とするもの二名、バッチーを貴しとするもの一名ありたり、今數の順序によりて、之を記せば、

ブルラー將軍 } 共に南阿に在り
キッチエール將軍
子ルソン
ウエルリングトン
シエーキスピーア
パーデンポワエル將軍 } 共に南阿に在り
ホアイト將軍
グラッドストーン
メシユーン將軍(南阿に在り)
セシルローヅ(南阿の起業家)
ロスチヤイルド男(富豪)
キプリング(富豪)

等なりとす。此他クルーゲルを愛し、獨逸皇帝を愛するもの等ありたり。而して、其の理由は、頗る單純なるものに過ぎざれば、之を省きて、今は只以上を紹介するのみ。

●萬國博覽會　巴里萬國大博覽會褒賞授與式はいにし八月十八日擧行せられ、出列者、約二萬人餘　佛國商務卿ミルラン氏の演說あり、いと盛會なりしが、日本の出品者にて、名譽を得たるものは、官廳十七個東京府八人、其の他府縣合計十三人にして、其の他金牌以下、數百人の受賞者ありしとぞ。さに英國倫敦にある、デリーニユースの巴里通信員が、日本品を評したる報告をかゝげん。

當博覽會に集められたる多くの種類中、トロカドロ園にある、中央建築物の日本出品物中、著しきもの一にして足らず。暗黑時代の美術品の驚くべき模造品あり、或は普通の骨董物あり。此等種類は、恐らく倫敦にて見るべき、非常に立派なる漆器に非らずして、只神戶、若くは、宮の下商人の秘藏室に於てのみ發見し得る傑作なり。其の數多からずと雖、皆希有高價の種類のみなり。而して、其の中最古なるものは、十三世紀頃の黄金佛なり。又同時代の大木像佛もあり。大に尊嚴に見ゆたりき。又漆塗の一大黑箱

あり、眞珠を鏤して、九世紀頃の作なり。此箱は、皇帝の出品なるが、皇帝は、此の外種々の物品を出され、其中黄金の景色模樣ある漆黑の宮殿の如きは。最も目立ちたり。又皇帝の出品中十七世紀頃の天皇の帶びさせられたる劍あり、其の附屬品は巧みに、漆塗りに裝飾せり、又日本固有の絹製、及び、鐵製の胄三四對あり。其中の一は、十一世紀頃の勇將源義經の着用したるものなりと云ふ。又、珍奇なる陶器の切片、二三十あれば、刀劍もあり、又印籠とて、小藥入にして、裝飾したる數個の箱を連ぬるに、紐を以て結びたるあり、又假面あり、是れ、中世時代の僧侶か、寺院内にて、喜劇を演ずるとき用ひたるものにして、歐士にても、之と同く、之を用ひて、秘密手品を行ひしことありと云ふ日本美術の凱旋は、確に掛物に於て、見出されたり。數十品中の多數は十六七世紀頃の作なれども、亦之れよりも古きもの少からず、又珍奇なる卷物あり、蛙、兎、及、猿の形を白と黑とに彩色せるものにして、作者は、ウイリヤムコンクエラーが、尙ほ、襁褓中にありし時代に、全盛を極めしものなり、又種々異りたる態度を表はせる動物の圖あり。其の中には、射的となるあり、人夫の如く、荷物を運搬するあり、又、參々伍々逍遙するあり、又、一猿猴あり、不快を訴へつゝある、他の猿猴に對して、兎の援助によりて、糊劑を貼用せるの圖あり。是れ紙畫中、世界最古のものならん、掛物の文字は、多く剝げて、灰色を呈せるが中にも、一哲學者あり、皇帝より仕官せよと勸められたる爲、其耳汚れたりとて、近隣の小流にて、之を洗滌せんとし、突進せしに、其の下流に牛に水飮ましむる一聖人あり、汝は何を爲す積りなるかと質問したり、哲學者は其の所以を語りしに、聖人曰く、汝は最少し、早く予に之を語らば、予が牛は、此腐りたる水を飮まざりしものをと、是れ自主獨立を稱賞せんとするの例、而も過言の何ぞ夫れ巧みなる、嗚呼、此如き時代は、果して之れありしか

◎日本女學校入學式

校舍の修築工事、いまだ竣功せざるをもて、整頓せざるところもありたれど、豫定の如く本月一日に、入學式を擧げられたり、父兄、保證人の參集せらるゝもの百數十名。校長、先づ起ちて、學校創立の主旨及び將來の方針について、其の大綱を述べられ、次いで、三輪田學監は、將來この學校に於ける教育の方針について、懇切周到に說示せられたり。是は、ひとり同女學校の面目をうかゞふに足るのみならず、世の女子問題に心を寄する人は必ず傾聽せざるべからざるものなるを以て、乞うて、次號の論說欄に

掲ぐること丶せり。さて、次に、受持教員諸氏の生徒に對して、種々の心得を懇示せらるゝことありて、全く、入學の式を終へ、翌々日三日より授業を開始せられたりと。生徒の數、百餘名。猶續續入學志願者ある由にて、其等の人々のために、特に本月廿日まで延期して入學を許すといふ。各科擔任の教師、皆その適任を得たるのみならず、主義に對する精神の一致も鞏固なれば、將來の良効果は、期して俟つべきものあることを信ず。因に記す、同校開校式は、近々、工事竣功の後、直に擧行する由なり。

●孝順(花のやのあるじ報)　香川縣仲多度郡琴平町字高藪町八百七番戸千葉伊三郎の長女津伊(三十)といふは、性質温柔にして、克く父母に仕へ、また、よく姉妹をいたはり愛しみ、年にも似ず、職業に似ず、いと殊勝なるものなりとて、一郷うらやみ譽めぬものもなし。さて、その職業といふは女髪結なりけり。弟子も數多あれど、例の如く虐使ひもせず、專ら、その業を勵ましめ、さて、おのれは、いそがしき中に、妹千代(十二)と共に、年老いたるに加へて、健康すぐれざる父母にかしづき仕へ、其の餘の、いとわづかの暇を見出でゝは讀書、習字等の獨習にふけり、いまだ、嘗つて、見物遊山のために日を消したることなしといふ。津伊に、さとゝよべる一人の義姉ありき。數年前より病にかゝり、本年五月遂に死去りしが、この數年間、津伊が眞實をこめたる介抱看護は、病人のみならず、近隣の人々をさへ感涙にむせばせたりきとぞ。近來愛づらしき心操ならずや。

女鑑歌文月次兼題

九月廿日　歌　凉風
　　　　　文　陰徳

右九月七日〆切

十月五日　歌　霧中露
　　　　　文　秋夜の感

右九月廿二日〆切

十月廿日　歌　山初雪
　　　　　文　新刊書籍を贈るに添ふる文

右十月七日〆切

十一月五日　歌　奉祝天長節
　　　　　　文　菊をめつる詞

右十月廿二日〆切

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離て認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても隨意に投稿することを得。

教の庭



九月五日兼題

旅立つ人をおくる

天

くさまくらたひゆく人をやすらかに
まもらせたまへちよろつのかみ
東京市本郷區東片町　北島功子

地

をしめともかひなきいその別れ路に
またゝちかへるなみもこそあれ
備中國都窪郡辛高村大字老松　岡本松野子

人

行く君をおくるふなちはなみなきて
たてよとまつはいさをなりけり
福岡縣三井郡草野町　武田龜子

(以下原稿到着順)

おさは山こたかくきゝすなきつるは
きみかたひたちをしむなるらめ　佐藤保子

しら雲のやへにかさなるさきさても
おもはてひさにこゝろへたつな　佐藤梅子

たよりよき今の世なれさたびにたつ
ひさのわかれはかなしかりけり　田村多豆子

今の世はたのしきたひにたつひさの
わかれのなにかなしかるらむ　村上操子

舟くるまたよりよき世もたひにゆく
ひさをおくるはかなしかりけり　上原のぶ子

さごめまじあかぬ別れもくにのため
こゝろつくしのたび路なりせば　德永萬壽子

さく行てたぐひなき名を世にあけて
はやかへりませおやのみまへに　德永廣子

名殘をば小しまの海人のそれならで
たもさかわかぬけさのわかれ路　竹村竹里子

ふる郷ににしきまさひてかへりませ
まなひのみちにすゝみゆくきみ　鏡山增代子

別れてもいまにかへらんきみなれは
はなむけもせすこまははやゆけ　松尾くに子

何ゆゑにかゝるなみたのこぼるらん
うれしかるへきわかれなれさも　今村不二子

土產にしてさくかへりませ外くにの
ふみのはやしのはなのいろ〳〵　前川琴子

ゆきめくる雲のあなたにわかるさも
つきのかつらをなりてかへれよ　藤井里惠子

ふる里をおもひもいてよまつむしの
こゑする野邊にゆめむすふ夜は　河野みち子

けふよりはたゞゆび折てまちなまし
つゝかあらせすかへりませきみ　島津龜久野子

うみやまをへだてゝ君はゆくとても
ともにちかひしことなわすれそ　志茂邑けい子

君が行くやまぢをこゑんはつかりも
あとに見なしてかへりませきみ　松尾やそ子

つゝがなくかへりてきませ野に山に
たひのうたふみいへつとにして　小村琢子

うみやまを遠くへたてゝわかるとも
わすれさらなんかすならぬ身も　牧[illegible]子

旅ころもたちかさねらむ今日よりは
ひとへにおもへふるさとのそら　日高かず子

たとひ身はくも井はるかに別るとも
かりのたよりをゆめなわすれそ　福原菫子

あさまだきたびゆく君をおくらずは
あきのもかくはつゆけからじを　加藤露子

ゆく君のはやきくるまはなくもがな
とめむせき路はよしやありとも　服部蔦子

國のためまなびのみちにゆくきみを
いまより四とせまちやわたらむ　服部正子

滊車までと送るくるまはほどなくて
いよいよとほきわかれをぞする　河合縫子

いなつまのかよふたよりは早けれど
とほざかりゆくわかれをぞ思ふ　三宅中枝子

かへりこんその日をいつと旅ころも
たゞねさきよりきみそまたるゝ　永井さい子

見もなれぬ旅ぢにつゑをひくきみは
いかにたのしきおもひをぞする　森このゑ子

朝ゆふにとひとはれつる我がともの
立ちわかれ行く今日のかなしさ　松尾婦美子

久かたのかつらかざして行くきみの
かど出にくもるわがこゝろかな　松尾せい子

わかれては千さと隔てゝすみぬとも
きみなわすれそわれもわすれじ　森こと子

何となくうらやましくもおもふかな
きみがたびぢのわかれなれども　頴川智か子

いかなればかくは名殘のをしまるゝ
たゞかりそめのたびと知りつゝ　中川芳尾子

けふ別れあすはくもゐのよそにても
こゝろばかりはきみなへだてそ　清水ひで子

おほ君のめぐみくまなき御代ながら
こゝろして行けなれぬたびぢは　篠田圓子

いたづらにとゞめんよりは旅ごろも
たちかへるべきときをたのまん　平島よし子

わかれてもまた逢ことはあるものを
なにとてかくはこひしかるらん　服部倫子

とほからずかへりきまさむ君なれど
わかれといへばたゞなしぬかな　山代由子

海やまはよしへだつともをりをりは
こなたにかけよゆめのうきはし　虎口資子

みづうまやみづみづしくて草まくら
つゝみなく山路たどりませきみ　佐々小琴子

あづま路のうまやうまやを立いづる
こゝろはいかにたのしかるらん　佐々有鄰子

わかれ路の露けきそでをひきかへて
立かへるはるのはなをまたなん　佐藤玄子

あづま路さむかしは遠くへだつとも
まつにかひある火くるまのみち　溝口貞子

あすよりはたれにかよらん片いさの
こゝろほそくもおもほゆるかな　長澤いゑ子

いかりふくほどたに君かのりしふれ
見てなくさまんすへもなきさに　東郷常子

わすれては君さゝもにもみやこへさ
ゆくこゝ地する今日のわかれち　川畑芳子

よろこびをそへてそおくる旅なれさ
しのふはつらきわかれなりけり　齋藤きゑ子

むさしのゝ月にうかるゝゆふべにも
ゆめなわすれそふるさとのそら　松原千鶴子

おつまぢをさしてゆくらん若つるの
みおくるかけにちよをふくめり　馬場まつ枝子

もろこしにゆくらむみちは遠けれど
なほふみかよへみちたにはずして　香波愛子

よくゆきてよくかへりませ旅ころも
つゆけきなりのいさおほくとも　青木たま子

幸おほき〻みかかどでのよろこびに
つゝむやなにのなみたなるらん　北島松子

こゝらぬやまのぼるはじめさたつ君を
みおくるそでもつゆけかりけり　山田稻子

人やりのたびぢならねは待もさめじ
こゝよくなしてはやかへりませ　西川順子

旅に伴く君みこそは見めふしのゆき
よしのゝはなもわがものにして　田代艶子

はらからもおよはの君さわかれつる
けふのたもとはつゆけかりけり　田代綾子

いつしかさけふりの中をたゞ〳〵に
立ちわかれゆくきみそいさまし　萩原章子

あすよりの文のおさつれたねもせは
そらゆくかりをそれさたにみよ　中村さく子

しはしへは歸りきますさ知りながら
なほもわかれはかなしかりけり　椎野ぬき子

わかるゝはをしむ物からよろこびに
いそくかさてをいかゝさゝめん　椎野秀子

ふるさとをあさにみなしてゆく君の
にしきをかさるひをはまたなん　椎野滿子

かれてある君かのそみのさつくにゝ
いそくかさてをいはふけふかな　椎野清子

國のためよのためゆゑのたびなれは
いかてさゝめんきみかかさてを　椎野鋭子

わかれてもまた近江さは知りつゝも
ひさひ千あきのこゝちこそすれ　大橋かれ子

さらはさてわかれしこさをこむ春の
またのあふよにかたりあかさむ　鵜井貞子

こねてゆく嶺よりたかききみの名の
世にさゝろくをわれはまたなん　岡本蔦野子

九月五日兼題

わが地のうるはしき風俗

地　大阪市北區中ノ島六丁目　松尾せい子

我おほやしまは、千早振神の御代より、君と臣との道すぐに、みだるゝことなく、あをひとくさは、世々、皇室のみつゆにうるほひぬれば、世渡る業に暇なき山賤も、君の御爲には、家をも身をも忘るめり。藻鹽やく海士が子も、たらちねのみおやを敬ひなづさふ心の切なるは、昔より、能く父母に事へたる人の、多きにてもしるかりけり。かひある浦の濱千鳥、あとゝはぬ女も、心正しく、節操を守りたるなど、おのづからなる良きならはしならでやは。便りなき老人、親なき孤子を見ては、うちすて置かん心もなし。今や、學の道は至らぬきはもなく、百般の技術は、日に月に進み行くを、億兆のおほみたみが、おなじ心に、大みことのりをかしこみ奉らんは、こよなき美風ならんかし。

人　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

縣下にても、わが地は、綠綬、藍綬の褒章を賜はりし人をはじめ、孝子、節婦の旌表せられしもすくなからざるに、山川さへ、はた秀美なり。男女の別を正しくし、學文をはげみ、陸海軍兵を志願し、あるは、大學を卒業し、學士の稱號をさづけられし人々もあまたあり。或は、豪農となり、巨商となりて、青年のともがらを導きて、世の開明につれて、よく朝旨を遵奉せしめ、海外の國々の强兵と立ならびて、太沽より天津にいたる戰場に出兵、始終、諸國の兵に卒先し、名譽のはたらきをせし兵士さへ、わが地より出でぬるも、うるはしき鄕の風俗とこそいふべけれ。

同　香川縣三豊郡上高瀨村　森　このみ子

月雪花のながめには、都の人のさわぐらむ。四季をりをりの氣色を待つばかりたのしきことはなかりけり。なかにも、春秋を集めし公園に、衆もろ共、花の朝月の夕べをながむる時の心地よさ。そも、かゝることのうれしくおもしろくおもふは、たゞ、市の廣くて、西に東に人家并び、商ふことの繁昌は云ふも更らなり、馬に車に行きかひかまびしく、華の都の夜猶明く、瓦斯燈の光り月もくらむばかり、未だ、見なれぬ人のおどろくもうべなるかな。さるがゆゑ、都の人は、常に、しづけき地をばしたふらむ。各々に、務むることのいと

またには、田舎に出で丶閑なる暮しをば樂しむならむ。我、都の花にあくがれて、ひたすらに、故郷戀し、海山見たしとれもひしものを、げに、草深き田舎に歸りてよりは、自づと氣もゆるやかになり、心もおちゐせしやうに覺えぬ。そが上に、公園などの設もなけれども、野山のけしき青々と、見渡す限り、しづやかに、造らぬながめ一しは心地よく、人は、多く農をはげみ、平素は、節驗を守り、性は總ておんわなり。頃しも、夏の日、朝まだき、戸外に出で丶、そゞろ歩きの折などは、あふ者ごとに、いふ丁寧に挨拶をなすなど、都の人々には似もやらず。隣りあふ家々は、皆、親せきの如くしたしみ、夕づく頃は、打集ひ川のほとりに綠おひつ丶、夕涼みなすなど、いと面白し。又、方をかへ、海べに近づけば、大舟小舟漂よふさま、えも云はず。あたりは、男女打集ひ鹽を製することに、ひねもす働くなど、これはた、うるはしき風俗の中に加へられつべし。

秋の庭

徳永萬露子

今年の八月はじめつかたより、赤痢といふやまひはやりて、おほくの人のなやみければ、大やけより、そがひろごれるをう

れひたまひて、交通遮斷といふことを行ひて、里の入口には、極ゆひまはして、おごそかにまもらせければ、親朋友とても、とひくることのかなはねば、いとゞ心ほそくて、

おほやけのみおきてなればかしこしや
　身はしまもりのこゝちのみして

もろひとにみちへだてられくるしくも
　あつさなかこつともなきかな

すずしやと月にとひよるひともなく
　身は世のほかにすむここちして

袖のしぐれ

多比壽

學妹日向なつ子飛谷さわ子の二嬢は、校中、俊秀の聞え高かりし人々なりしが、不幸にして夭折せり。痛惜の情に堪へざるなり。これ、また、志す所世と乖離し、加へて、病の爲めに歸省するの不幸にあへぬ。頃日、杖を力に、嬢等のおくつきなる古藥師に詣でつるに、懷舊の情、勃として禁ずる能はず。嬢等の溫容、髣髴として眼に映じ、心緒亂れて糸の如し。さるにても、嬢等は今いづこ。曾て机を共にせし嬢等の眠は、遂に覺めじ。あゝ、嵐に散る花は、やがて、來む春に逢ふの時あるも、蕾に似たりし嬢等は、長に花咲く期なけむ。

なき君の墓はいつことたつぬれば
　かたへの松を子等が指さす

ふる藥師あまたの墓はたちつれど
　君等のはかぞわけて悲しき

泣きながら呼べど答ひもあらずして
　ことふるものはたゞ秋の風

去年のけふおこせし文は殘れども
　いつ地の空に君まよふらむ

数の庭

きみははや歸らぬ旅にいでましぬ
　散りにし花はまたもさく世に
亡き君のありし昔を思ひ出てゝ
　またもおちくろ我が涙かな
夢の間に月日はすぎてひさゝせの
　むかしさなりしけふぞ悲しき
訪れ來て昔しのぶのそでの上に
　まつ落ちつるは我が涙かな
老杉の一本立てるおくつきに
　ちいさき塚ぞ君がしるしか
共に見し人はいまさず紅つゝぢ
　すきしむかしぞしぬばれにけり

平島よし子

松蔭泉

枝ひろき松のこかげの岩清水
　君のちさせもそへてむすばん



日本女學校

開校九月一日
入學九月廿日迄

本校は質素着實を尚び我が國固有の婦德を發揮するを旨とす

◎生徒募集

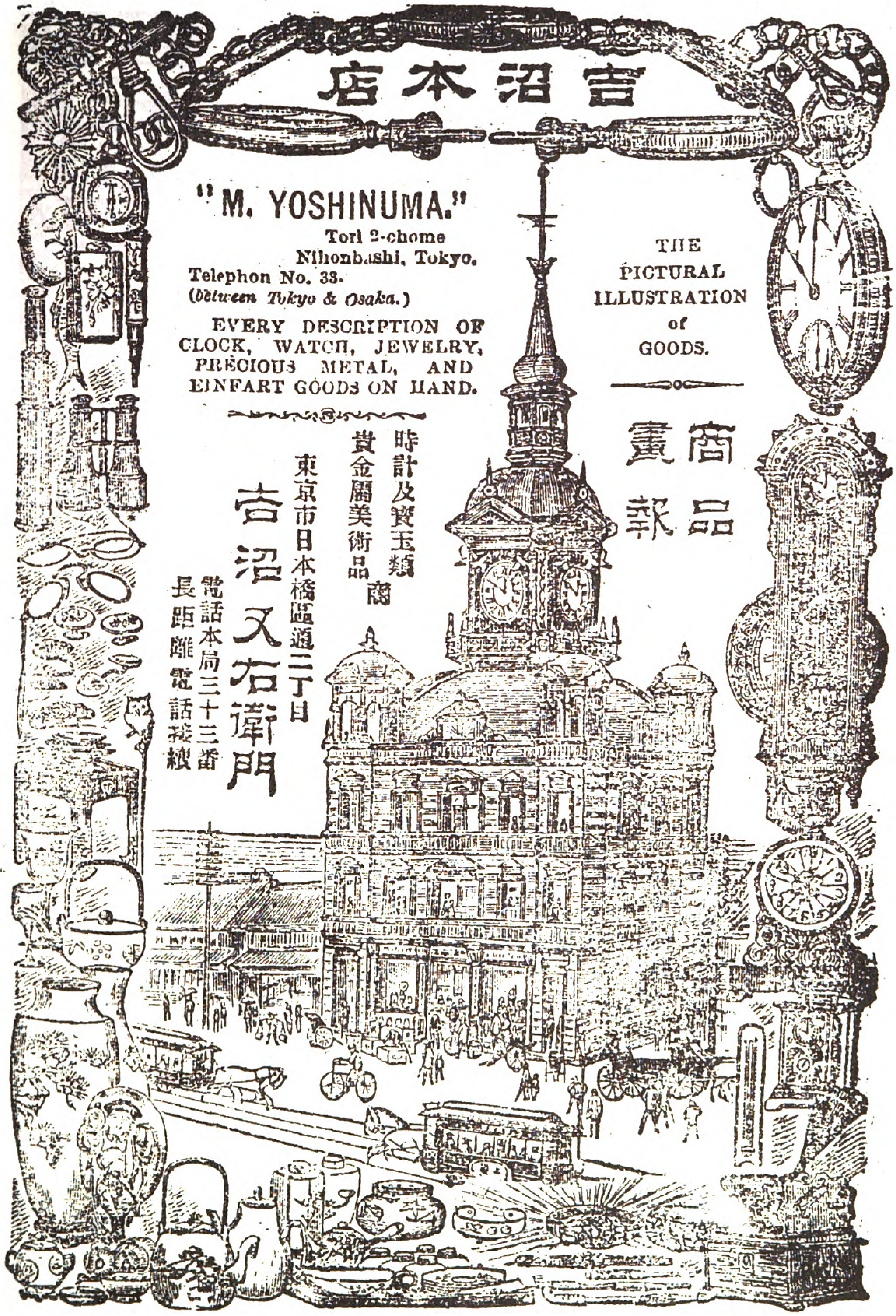
本科第一、二、三學年
技藝科第一學年

（規則書望の方は郵税二錢相添申込あるべし）

東京市本郷區龍岡町三十六番地

私立 日本女學校

時計は堅牢最新形實用裝飾兼備を撰ぶ
美術品は意匠卓絶製作精妙なり



從來商品は階上にのみ陳列せしが今般階下も
亦陳列場となし總て最廉の正價を附し顧客隨
意縱覽御撰擇の便に供す

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告

女鑑毎月五日、廿日、發行

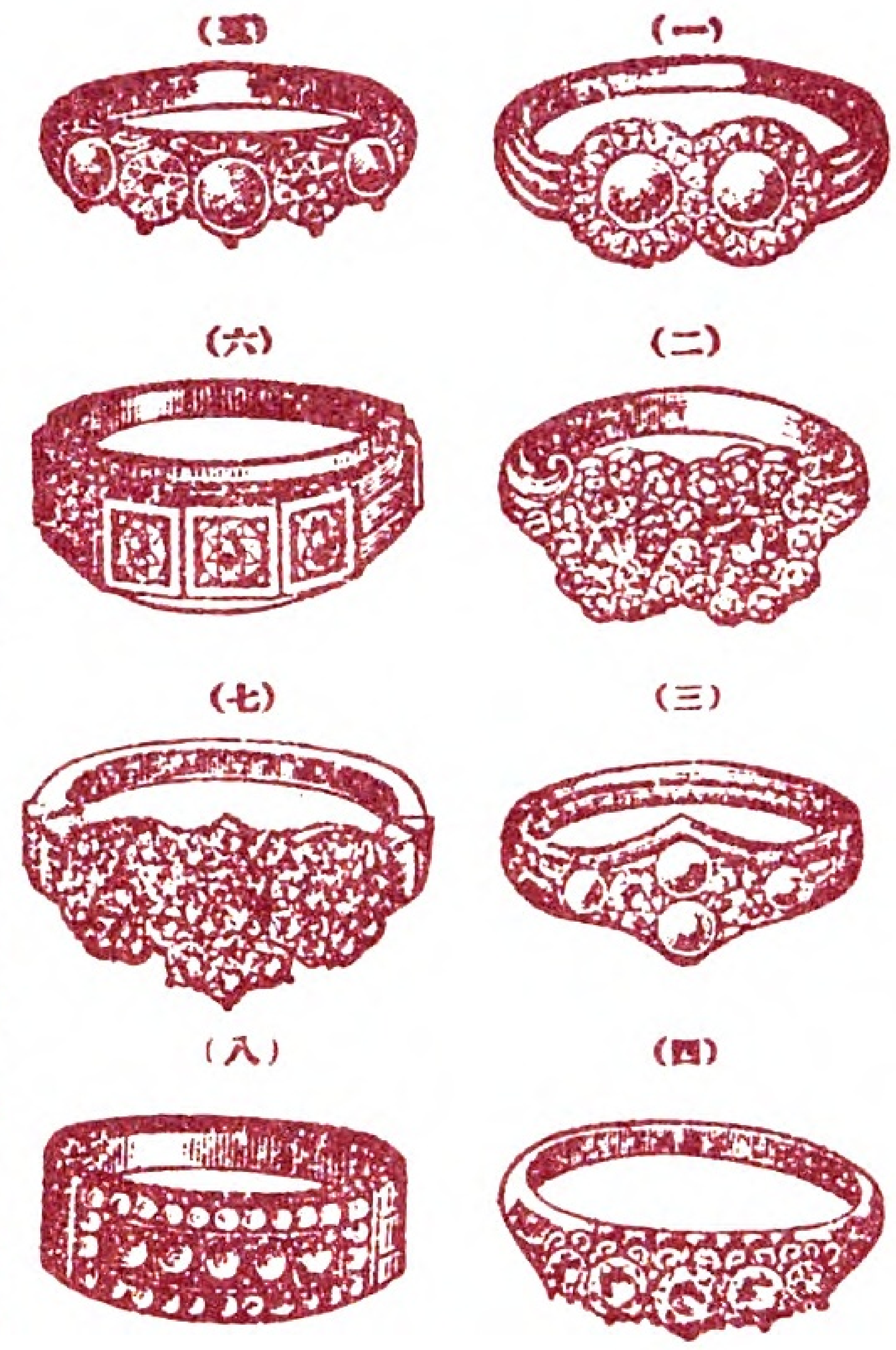
定價	一冊	拾錢
	六冊（三ヶ月分）	五拾五錢
	十二冊（半年分）	壹圓
	送料	全國無遞
代金	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事 拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割増	
領收	別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事	
照會	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」○會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納郵の來書は一切受取らず	
廣告料	一行（五號活字廿三字詰）	金二拾五錢
	半頁（一行三十詰）	金六圓
	一頁（二段六十行）	金拾圓
	料金は前納、位置は申込の順により組み込む	

明治三十三年九月四日印刷
明治三十三年九月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●全眞珠及ヲパール入甲價參拾參圓●乙價參拾圓

（二）ダイヤモンド入甲價參拾圓●乙價貳百八拾圓

（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓

（四）ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

（五）ダイヤモンド及キャッツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

（六）ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●全ルビー及サッフアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

（七）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓

（八）眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外遞送料金貳拾錢

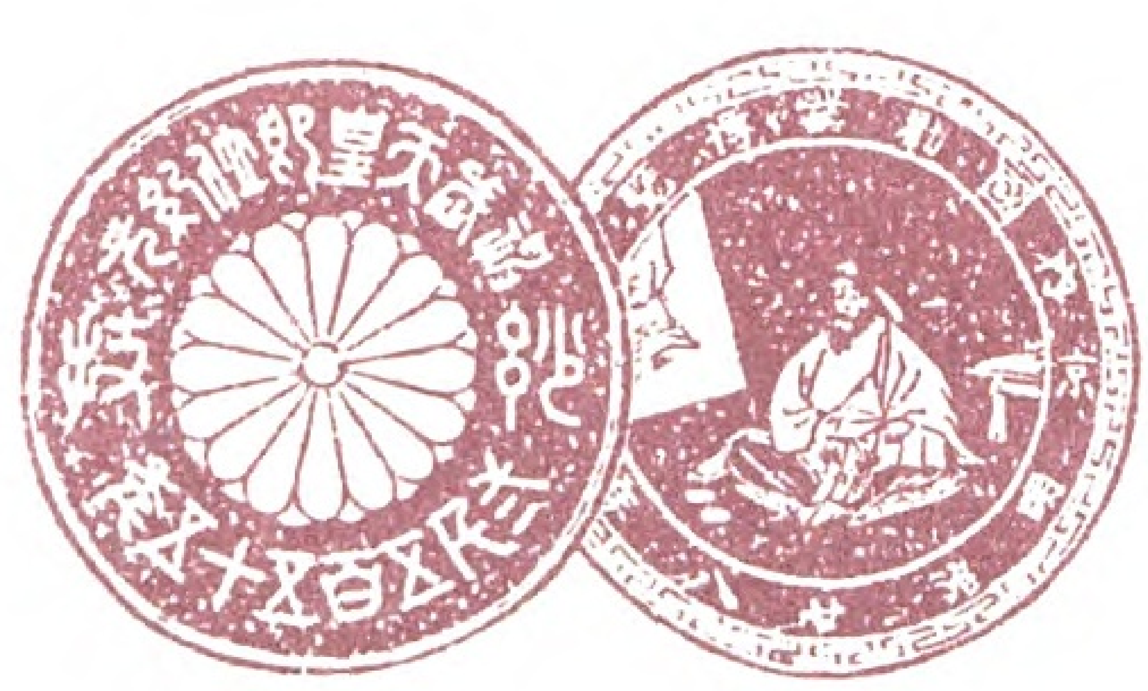
此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

天賞堂

妙技一等賞牌



東京神田小川町（電話本局二六〇）天賞堂小川町出張所
橫濱尾上町五丁目（電話八七六）天賞堂橫濱出張所
大阪心齋橋北詰（電話東七三三）天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所
熊本市上鍛冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所
長崎市今鍛冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所
福岡市橋口町榮屋方 天賞堂福岡臨時出張所
北海道小樽色內町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所

（東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷）